

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第106集

# 下原遺跡Ⅲ

平成9年度 東駿河湾環状道路建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第106集

下原遺跡Ⅲ正誤表

下記の箇所に誤りがありましたので、恐れ入りますが訂正下さいます  
ようお願ひいたします。

	誤	正
P 49 表19 図版No. 19 備考	1類	3類
P 49 表19 図版No. 29 備考	6類	7類

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第106集

# 下原遺跡 III

平成9年度 東駿河湾環状道路建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

# 序

当研究所による東駿河湾環状道路建設に伴う埋蔵文化財調査も6年目を迎えた。東駿河湾環状道路が建設される箱根山西麓にあたるこの地は、県内でも有数の埋蔵文化財の包蔵地として知られている。これまで、平成4年度と平成7年度に焼場遺跡、平成6年度に加茂ノ洞B遺跡、平成7年度に八田原遺跡の調査が行われ、特に旧石器時代と縄文時代早期～前期にかけての遺構・遺物が多く検出された。

下原遺跡は、過去平成5年度から6年度にかけて調査が行われている。当時の調査で、縄文時代草創期の土坑群、後期旧石器時代の石器群、約27,000年前の土坑群などが検出された。この調査の際に検出された石器群については、蛍光X線分析による黒耀石の原産地同定を実施したことにより、各地の黒耀石が当地に持ち込まれていることが明らかになり、石材の消費地遺跡としての位置づけを行うことができた。

今回は、前回の調査が行われた区域に隣接する個人住宅跡地の調査を行った。その結果、前回の調査と同様、後期旧石器時代の石器群が検出され、石器群に伴って尖頭器やナイフ形石器などの製品が出土した。今回の調査でも蛍光X線分析による黒耀石の原産地同定を導入し、分析を行った結果、前回の調査で出土した個体別資料と同一の個体が存在することが確認された。このことから、下原遺跡の広大な範囲を持つ石器群が後期旧石器時代の比較的短い期間に形成されていたことが明確にされた。また、黒耀石以外の石材についても石器群を構成する石材を中心に個体別分類を行った。その結果、石材によって遺跡内における分布傾向が異なることが明らかにされ、また、同一の地点で複数の種類の石材の剥片や碎片が混在して出土した石器群が存在することも確認された。これらは本遺跡内で石材加工が行われていた可能性を示す資料であり、箱根山西麓の旧石器時代文化を研究する上でも良好な資料の一つに数えあげができるものである。今後今回の調査で得たこれらの資料が埋蔵文化財の理解と保護に役立っていくことを切に希望する。

最後に、調査並びに本書の作成にあたっては建設省中部建設局沼津工事事務所をはじめとした関係機関各位に多大なる援助・協力をいただいた。この場をお借りして厚く御礼を申し上げる。また、現地調査並びに資料整理に参加した調査員・作業員の労をねぎらいたい。

平成10年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤忠

## 例　　言

- 1 本書は三島市塚原新田字下原に所在する下原遺跡の発掘調査報告書の第3分冊である。
- 2 調査は平成9年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として建設省中部建設局沼津工事事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成9年6月から同年10月まで現地調査を実施した。
- 3 整理作業は平成9年11月から実施し、平成10年3月に終了した。
- 4 調査体制は以下のとおりである。

所長 斎藤 忠 副所長 池谷和三 常務理事 三村田昌昭 調査研究部長 石垣英夫  
調査研究四課長 橋本敬之 調査研究員 佐野暢彦・岩崎しのぶ
- 5 本書の執筆は岩崎しのぶが行った。
- 6 土層中に含まれる火山灰分析は、都留文科大学教授・上杉 陽氏に依頼した。
- 7 遺物実測作業の一部は(株)シン技術コンサルに委託した。
- 8 本書の遺物写真撮影は、当研究所が行った
- 9 石器石材の鑑定と個体別分類は、東京都立青山高等学校教諭・柴田 徹氏の作成した標準資料とともに森嶋富士夫が行った。
- 10 黒耀石の原産地同定については沼津工業高等専門学校助教授・望月明彦氏に御指導を賜った。原产地判別法は『静岡県考古学研究』26号掲載の望月氏の論文に準拠する。
- 11 調査では次の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる（敬称略）。

上杉 陽 笹原芳郎 望月明彦
- 12 発掘調査資料はすべて静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。また、遺跡で出土した全遺物の出土データは、希望者には閲覧の用意がある。

## 凡 例

本書の記載については、以下の基準に従い統一をはかった。

- 1 グリッドは建設省予定道路のセンター・ラインを中心軸として任意に設定した。
- 2 方位は国家座標（平面直角座標VII系）のX軸線を南北軸とした。
- 3 出土遺物は調査区毎に通し番号を付して取り上げ、土製品P、石器S、礫Rの略号を付した。
- 4 石器等の遺物の実測は、(株)シン技術コンサルによる等倍写真撮影を委託し、写真トレースによって行った。
- 5 出土遺物実測図の縮尺は基本的に4/5、一部の石核と礫石器は3/4で掲載した。また、各実測図には石材名（個体別資料については個体別資料番号）を付した。
- 6 出土遺物の写真図版は実寸で掲載した。
- 7 遺物の出土位置については、一覧表内に座標で明記した。座標はA 1グリッドを(X. Y) = (0. 0) とし、南北方向をX軸に、東西方向をY軸にとった。
- 8 土層の色調は、新版『標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修1994）を使用した。
- 9 本文中・挿図中の表記は以下の表のとおりである。

層 名	石 材	黒曜石原産地
FBa 富士黒色土層a	Ob 黒曜石	KRM 霧ヶ峰系
FBb 富士黒色土層b	Hor ホルンフェルス	WDT 和田峠系
YLU 休場層上層	GAn ガラス質黒色安山岩	TTS 蓼科系
YLM 休場層中層	Ch チャート	HTJ 番宿
YLL 休場層下層	Ch (DG) 暗灰色チャート	KSW 柏峠
BB0 休場層直下黒色帶	Ch (BG) 黒灰色チャート	
SC I 第Iスコリア層	Ch (Gy) 灰色チャート	
BB I 第I黒色帶	HS 硬質頁岩	
NLa ニセロームa	HFT 硬質細粒凝灰岩	
NLb ニセロームb	Qz 珪岩	
BB II 第II黒色帶	Rhy 流紋岩	
SC II 第IIスコリア層	Cha 玉髓	
BB III 第III黒色帶	S1 粘板岩	
SC III s1 第IIIスコリア層スコリア1	FAn 細粒安山岩	
SC III s3 第IIIスコリア層スコリア3	An (Hy) 輝石安山岩	
SC III s4 第IIIスコリア層スコリア4	SS 砂岩	
SC III s5 第IIIスコリア層スコリア5	Ba 玄武岩	

# 目 次

序  
例言  
凡例

## 第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 現地調査の方法と経過	1
1 現地調査の方法	1
2 現地調査の経過	2
第3節 資料整理の方法	4
1 整理作業の方法と経過	4
2 蛍光X線分析による黒耀石の原産地推定について	5

## 第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と歴史的環境	7
第2節 基本層序と土層の堆積状況	11

## 第Ⅲ章 近世・縄文時代の遺構と遺物

第IV章 旧石器時代の遺構と遺物	18
第1節 休場層中層の遺構と遺物	18
1 遺構	19
2 個体別資料分類	20
3 遺物集中地点	34
4 遺物	48
第2節 休場層直下黒色帶の遺構と遺物	61
第3節 第Ⅰ黒色帶の遺構と遺物	62
第4節 第Ⅱ黒色帶の遺構と遺物	63
1 遺物集中地点	63
2 遺物	64
第5節 第Ⅲ黒色帶の遺構と遺物	65

## 第V章 調査の成果と課題

- ・ 蛍光X線分析結果一覧表
- ・ 出土遺物一覧表
- ・ 写真図版

## 挿図目次

第1図 調査区及び4区テストピット配置図	3	第27図 Tブロック器種別分布図	39
第2図 黒耀石産地位置図（望月1994より）	5	第28図 Uブロック個体別分布図	40
第3図 産地判別図	6	第29図 Uブロック器種別分布図	40
第4図 東駿河湾環状道路と周辺の遺跡	8	第30図 Vブロック個体別分布図	42
第5図 周辺地形及び周辺遺跡立地図	10	第31図 Vブロック器種別分布図	43
第6図 基本土層柱状図	13	第32図 Wブロック個体別分布図	45
第7図 土層堆積図	15・16	第33図 Wブロック器種別分布図	45
第8図 近世・縄文時代の遺物	17	第34図 Xブロック個体別分布図	46
第9図 休場層遺構配置図	18	第35図 Xブロック器種別分布図	46
第10図 燃土実測図	19	第36図 休場層尖頭器・ナイフ形石器	52
第11図 土坑実測図	19	第37図 休場層ナイフ形石器	53
第12図 休場層個体別資料分布図（霧ヶ峰系）	25	第38図 休場層彫器・削器・抉入削器・楔形石器	54
第13図 休場層個体別資料分布図（蓼科系）	26	第39図 休場層楔形石器・刃部再生剥片・加工痕 剥片・使用痕剥片	55
第14図 休場層個体別資料分布図（和田峠系）	27	第40図 休場層石核	56
第15図 休場層個体別資料分布図 (畠宿・柏峠)	28	第41図 休場層石核・打面調整剥片	57
第16図 休場層個体別資料分布図 (ホルンフェルス)	29	第42図 休場層ポイントフレーク・器種不明石器・ 礫器・敲石	58
第17図 休場層個体別資料分布図 (ガラス質黒色安山岩)	30	第43図 休場層加工礫	59
第18図 休場層礫分布図	31	第44図 休場層接合資料	60
第19図 休場層遺物分布図	32・33	第45図 BBⅠ層礫群1・2	61
第20図 Qブロック個体別分布図	35	第46図 BBⅠ層遺物分布図	62
第21図 Qブロック器種別分布図	35	第47図 BBⅡ層石器ブロック個体別分布図	63
第22図 Rブロック個体別分布図	36	第48図 BBⅡ層接合資料	64
第23図 Rブロック器種別分布図	36	第49図 BBⅢ層遺物分布図	65
第24図 Sブロック個体別分布図	38	第50図 個体別資料集中地点とtoolの分布	67
第25図 Sブロック器種別分布図	38	第51図 下原遺跡全調査区休場層遺物分布図	68・69
第26図 Tブロック個体別分布図	39		

## 挿表目次

表1 作業工程	4	表5 近世～縄文時代遺物計測表	17
表2 遺構・遺物一覧	4	表6 休場層個体別資料分類一覧 (黒耀石)	20・21
表3 東駿河湾環状道路関係埋蔵文化財包蔵地 .....	9	表7 休場層個体別資料分類一覧 (ホルンフェルス)	21・22
表4 縄文時代個体別資料分類一覧	17		

表8	休場層個体別資料分類一覧 (ガラス質黒色安山岩) .....	22	表18	ブロック別個体別資料分布表 .....	47
表9	個体別資料器種組成 .....	23・24	表19	休場層尖頭器・ナイフ形石器計測表 .....	49
表10	Qブロック石器組成表 .....	34	表20	休場層彫器・削器・抉入削器・楔形石器・ 刃部再生剥片・加工痕剥片・使用痕剥片計 測表 .....	50
表11	Rブロック石器組成表 .....	34	表21	休場層石核・打面調整剥片計測表 .....	51
表12	Sブロック石器組成表 .....	37	表22	休場層礫石器等計測表 .....	58
表13	Tブロック石器組成表 .....	37	表23	休場層接合資料計測表 .....	59
表14	Uブロック石器組成表 .....	37	表24	BB I層個体別資料分類一覧 .....	62
表15	Vブロック石器組成表 .....	41	表25	BB II層個体別資料分類一覧 .....	63
表16	Wブロック石器組成表 .....	44	表26	BB II層接合資料計測表 .....	64
表17	Xブロック石器組成表 .....	44			

## 写真図版目次

図版1	4区全景	図版11	休場層使用痕剥片・加工痕剥片(表) 休場層使用痕剥片・加工痕剥片(裏) 休場層石核・打面調整剥片
図版2	5区全景 基本層序	図版12	休場層ポイントフレーク・器種不明石器 休場層礫器 休場層加工礫 休場層敲石
図版3	4区焼土土層断面 4区1号土坑完掘状況	図版13	休場層接合資料 BB II層接合資料 近世・縄文時代の遺物
図版4	4区休場層Qブロック 5区休場層Sブロック		
図版5	5区休場層Tブロック 5区休場層Vブロック		
図版6	5区休場層Wブロック 5区休場層Xブロック		
図版7	5区BB0層礫群1 5区BB II層石器ブロック		
図版8	休場層尖頭器・ナイフ形石器(表)		
図版9	休場層尖頭器・ナイフ形石器(裏)		
図版10	休場層彫器・削器・抉入削器・刃部再生 剥片(表) 休場層彫器・削器・抉入削器・刃部再生 剥片(裏)		

# 第Ⅰ章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯

静岡県三島市は、県の東部に位置し、東海道の交通の要所として、伊豆地方における観光の拠点として知られる都市である。また、近年は首都圏のベッドタウンとして注目され、宅地開発も急速に進んでいる。これらの要因から、当地域の交通量は増加の一途を辿り、国道1号線バイパスの開通や国道136号線の拡張などの措置が執られたものの、慢性的な交通渋滞が問題化している。この問題を解消することを目的に東駿河湾環状道路の建設が計画された。この道路は東名高速道路沼津インターチェンジから、愛鷹南麓、箱根西麓を経由し、函南町平井の熱函道路へつながる片側2車線の道路である。

箱根西麓は旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が密集する地域である。道路の建設予定地はこの遺跡集中地点を横断するように設定されていたため、平成2年に三島市教育委員会により予定路線内の調査が行われ、周知の遺跡を含めた計31地点が埋蔵文化財の包蔵地の可能性があると報告された。翌平成3年8月に静岡県教育委員会文化課、三島市教育委員会、当研究所の3者による現地踏査を行い、その後の協議の結果、調査機関に当研究所が、指導機関に静岡県教育委員会文化課があたることになった。

下原遺跡は平成3年12月に行われた試掘調査の結果を踏まえ、平成5年度から6年度にかけて、道路建設予定地のほぼ全面を対象とする本格的な調査が行われた。この調査では、旧石器時代においてはBBⅢ層で本遺跡の南西に位置する初音ヶ原遺跡群や、同じく東駿河湾環状道路建設予定地内に位置し、当研究所が調査した加茂ノ洞B遺跡、焼場遺跡で検出されたものとほぼ同形態を呈し、後期旧石器時代における数少ない遺構として全国的にも注目される土坑群が検出され、休場層を中心に多くの石器ブロックが検出された。また、縄文時代においては草創期のものと推定される土坑が検出されるなど多くの成果をあげることができた。しかし、調査区内に点在した個人住宅の買収が進まず、2ヶ所の未調査区域が残されたままとなっていた。平成9年度に入り、委託者である建設省沼津工事事務所と静岡県教育委員会文化課、当研究所の協議の結果、残された未買収地の買収と建設物の撤去が完了したとの連絡を受け、平成9年6月2日から現地調査を実施することになった。

## 第2節 現地調査の方法と経過

### 1 現地調査の方法

平成5・6年度の調査では、調査区内に残る3本の道路を境として、全体を3区に分割して調査を行った。この時の調査で残された2ヶ所の未調査区域が調査区となった今回の調査では、便宜的に1区東辺縁部を4区、道路建設予定地のほぼ中央部を5区と呼称することにした。

グリッドの設定は、1区から3区で既に検出されている石器ブロックや礫群、土坑群との関係の把握を容易にするため、建設予定道路のセンターラインを中心軸（Kライン）として、調査区全体に10m×10mのグリッドを設定し、南西隅の座標をA1（X, Y）=（0, 0）として、X軸方向に数字を、Y軸方向にアルファベットを付した過去の調査と同じ方法で行った。本遺跡のX軸線は、国家座標（平面直角座標VII系）北から30度11分36秒西に傾く。

調査は表土を重機によって除去した後、休場層の精査から開始した。地形と土層堆積状況の確認のため、調査区に土層帯を約20m毎に設定し、1区と2区で遺物が集中的に出土した休場層については、調査区の全面を手掘りによる精査を行い、試掘調査も含めた過去の調査で標準堆積が確認されていた休場層直下黒色帶（以下BB0）上面において地形測量を行った。

4区については、1区東辺縁部におけるBB0層以下の遺物の出土量が少なかったこともあり、1グリッドに3m×3mのテストピットを12ヶ所設定し、1区と2区で土坑の検出が見られた第IIIスコリア帶（以下SCIII）上面までを掘削し、遺物が出土した場合はテストピットを拡張する方法をとった。テストピットによる調査の終了後、重機によりSCIII層上面までの間層を除去し、土坑の検出を目的とした精査を行った。一方、BB0層以下においても遺物の出土が見られた5区は、引き続きSCIII層上面まで遺物の出土と土坑の検出を目的とした手掘りによる精査を行った。

遺構の写真撮影は中型カメラ（6×7判白黒）、小型カメラ（35mm白黒・カラーネガ・リバーサル）を使用した。また、地形測量と遺物取り上げはトータルステーションを使用した。遺構・遺物の出土状況は、原則として1/20、必要に応じて1/10の図面で記録した。

## 2 現地調査の経過

下原遺跡は、1区は平成5年度に、2・3区は平成6年度に調査が行われている。当時残された工事予定地内の未調査区域を調査区とした今回の調査では、2ヶ所の調査区を便宜的に4区・5区と呼称し、平成9年6月1日から同年10月31日まで、両調査区の調査を並行して行った。しかし、両調査区とも残された埋設物等の障害物の除去に手間取り、本格的に調査に着手できたのは平成9年7月7日からであった。

### （1）4区 1,475m<sup>2</sup>

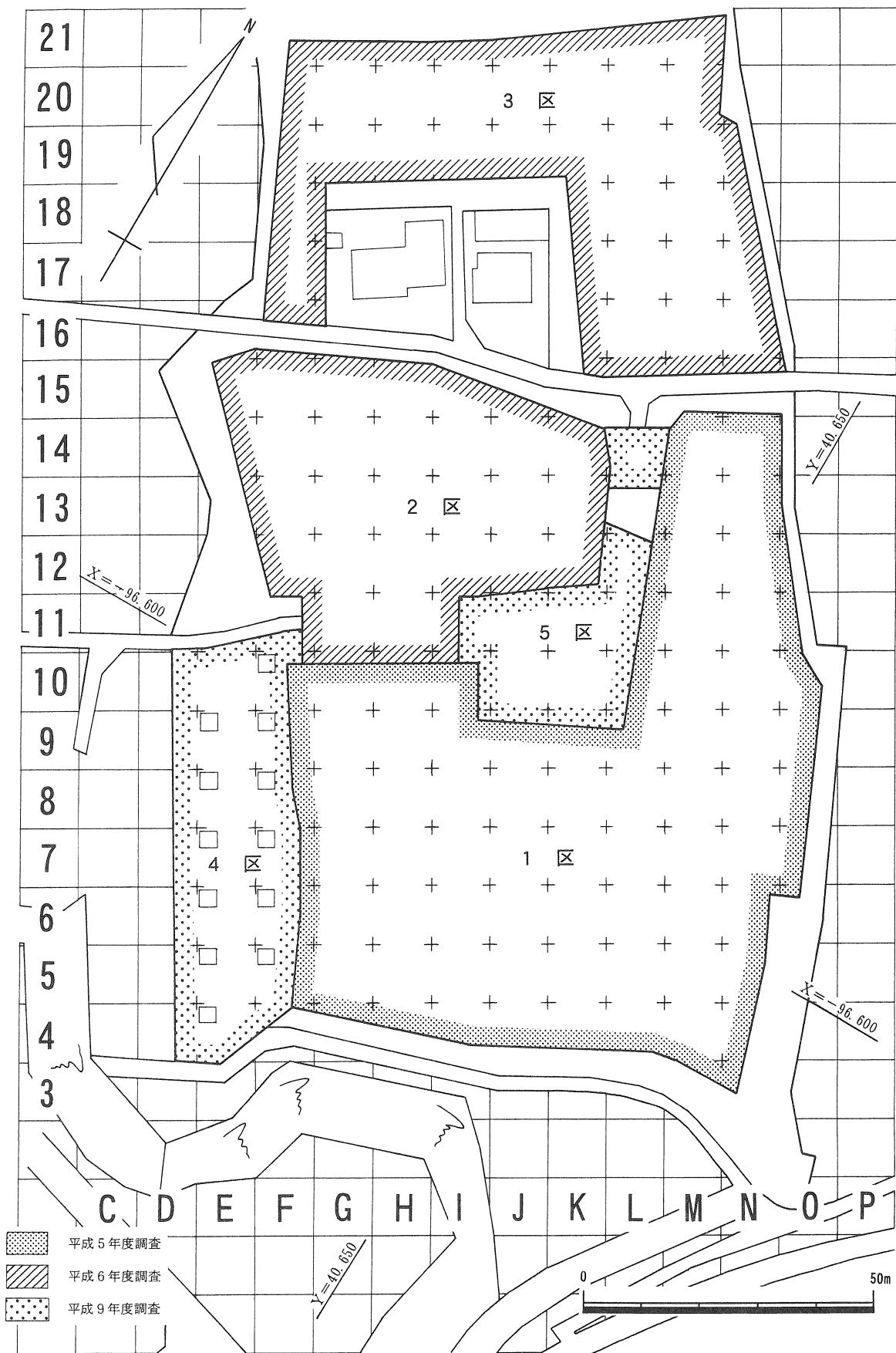
東側に隣接する1区が資材置き場として利用されていたため、平成9年7月7日より調査区の東半分のみ重機による表土除去を行った。測量杭打設、土層帯設定、ベルトコンベア搬入の後、7月22日より休場層の精査を開始し、全面をBB0層に到達するまでジョレンによって精査した。8月19日より残る調査区の西半分の表土を重機により除去し、同じく休場層の精査を行った。この結果、ホルンフェルスを中心とした石器ブロック2基、焼土1基、土坑2基を検出した。

地計測終了後、9月2日よりBB0層以下のテストピット調査を開始した。各テストピットをSCIII層まで掘り下げた結果、遺物が出土しなかったことから、10月14日に重機により中間層を除去し、SCIII層上面の精査を行った。新たな遺構等の検出が見られないことを確認し、10月31日にすべての調査を終了した。

### （2）5区 800m<sup>2</sup>

平成9年7月7日より重機による表土除去を行った。北西側に隣接する2区が1区と同じく資材置き場として利用されていたため、L13グリッド周辺部は搬入路として未調査のまま残した。測量杭打設、土層帯設定、ベルトコンベア搬入の後、7月24日から休場層の精査を開始し、全面をBB0層に到達するまでジョレンによって精査した。この結果、ホルンフェルスを中心とした石器ブロック3基、黒耀石を中心とした石器ブロック2基、複数の種類の石材で構成される石器ブロック1基、礫群2基を検出した。

地計測終了後、引き続き全面精査を行った結果、BBII層で石器ブロック1基を検出した。その後、SCIII層上面まで精査を行い、10月31日にすべての調査を終了した。



第1図 調査区及び4区テストピット配置図

表1 作業工程

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
平成9年度												

← 4区現地調査 →

← 5区現地調査 →

← 整理作業 →

表2 遺構・遺物一覧

	時代	遺構	遺物
1区～3区	縄文	住居跡 1 土坑 14	石匙 1 石鏃 11 打製石斧 1 局部磨製石斧 1 石皿 2 土器
	縄文（草創期）	土坑 4	有舌尖頭器 6 石槍 1
	旧石器	石器ブロック 16 礫群 土坑 4	尖頭器 8 石槍 1 ナイフ形石器 80 搗器 8 削器・抉入削器 15 楔形石器 11 石刃 25 石核 34
4・5区	縄文		石鏃 4 石核 1
	旧石器	石器ブロック 14 礫群 焼土 1 土坑 2	尖頭器 1 ナイフ形石器 29 彫器 1 削器・抉入削器 6 楔形石器 3 石核 5 打面調整剥片 2 加工痕剥片 2 使用痕剥片 2 礫器 1 敲石 1 加工礫 1

### 第3節 資料整理の方法

#### 1 整理作業の方法と経過

整理作業は平成9年11月から同10年3月まで行った。出土遺物の内訳は、近世の土製品1点、近世の石製品1点、縄文時代の石器4点、旧石器時代の石器約1,100点である。石器については製品全点と、剥片のうち加工痕、使用痕等の認められるものを抽出し、実測図を掲載した。遺物実測に関しては、(株)シン技術コンサルに等倍写真の撮影を委託し、外形線、稜線、フィッシャー、リング等を写真からトレースすることによって作業の迅速化をはかった。遺物分布図と等高線図はグラフ作成ソフトを用いてコンピュータで図化した。

黒耀石、ホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩については、肉眼による個体別資料分類を行った。さらに黒耀石については、蛍光X線分析による原産地推定を行い、この結果を踏まえて分類を確定させた。また、石器と礫の出土位置の座標、レベル、計測値は巻末の出土遺物一覧表に記載した。

実測、計測が終了した遺物については、遺物カードを1遺物毎に1枚作成する。これらのカードは遺物検索を効率よく行うことを目的として作成されたもので、各遺物の実測図や写真を貼付し、報告書図版番号、実測図や写真の登録番号、遺物の収納先等を記載したものである。記載したデータはコンピュータ

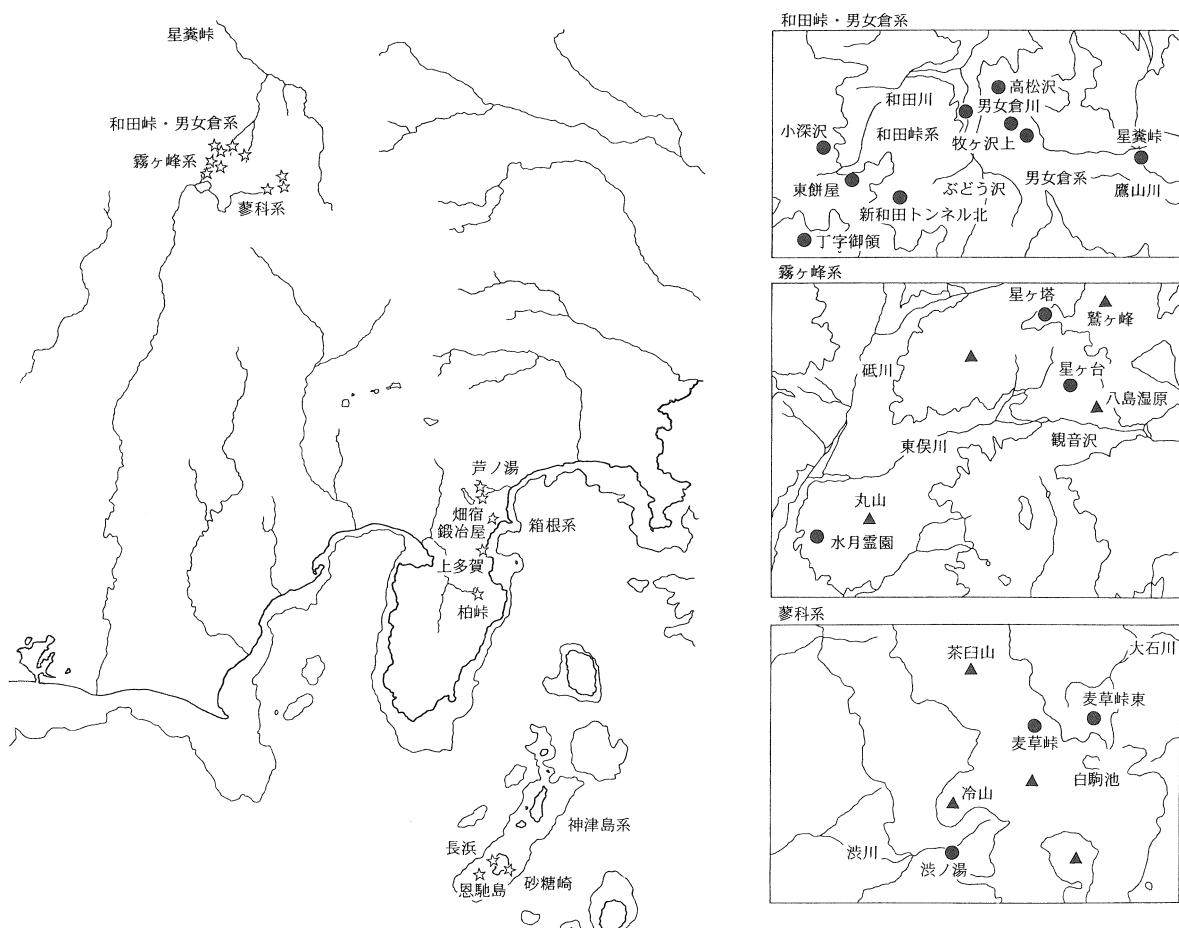
タにも入力し、研究所で一括管理する予定である。

## 2 蛍光X線分析による黒耀石の原産地推定について

今回の4・5区の調査では、約900点の黒耀石製の遺物が出土した。出土状況から判断して、表採資料や攪乱が著しいF B層から出土した遺物も、石鏃等縄文時代の製品以外は旧石器時代の遺物である可能性が高いため、原則としてほぼ全点、このうち分析可能な382点を抽出し、蛍光X線分析による原産地推定を行った。なお、測定と産地推定は国立沼津工業高等専門学校助教授 望月明彦氏の御指導のもとで行った。

### 測定方法とデータ処理

試料は超音波洗浄器による洗浄の後測定する。分析はセイコー電子工業社製卓上型エネルギー分散蛍光X線分析装置SEA-2001を用い、電圧50kV、電流 $3 \sim 6 \mu\text{A}$ 、照射径10mm（微小試料は3mm）、測定時間240secの条件下で行った。測定した元素は、Al（アルミニウム）、Si（ケイ素）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Ti（チタン）、Mn（マンガン）、Fe（鉄）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）、Y（イットリウム）、Zr（ジルコニウム）の11元素である。各元素のスペクトル強度から原産地推定に有効な指標を算出し、判別図を用いて原産地を推定する。判別に用いる指標は以下の式で求められる。



第2図 黒耀石産地位置図（望月1994より）

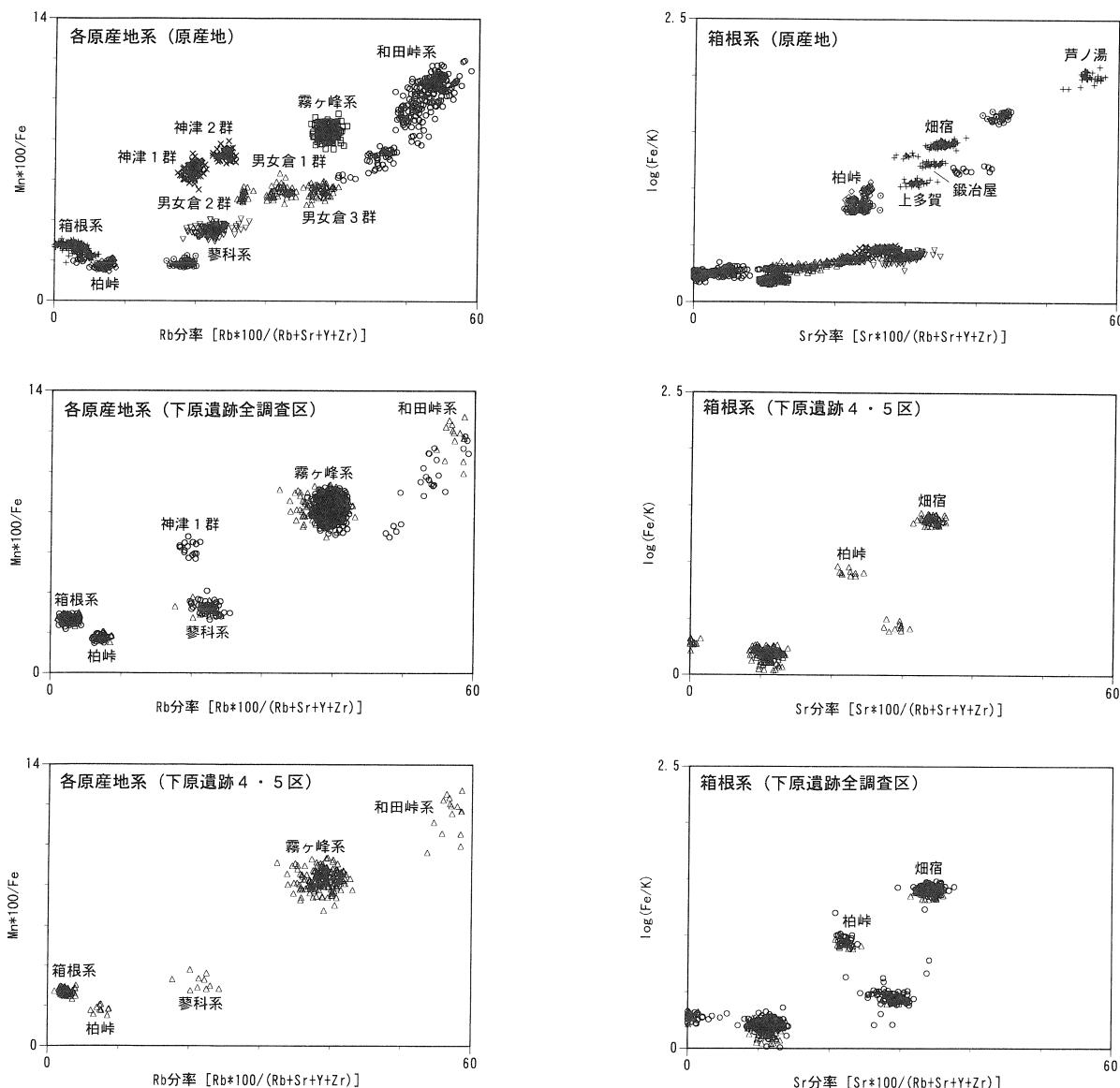
Rb分率=Rb強度×100／(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)、Mn強度×100／Fe強度

Sr分率=Sr強度×100／(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)、 $\log(\text{Fe強度}/\text{K強度})$

原産地より採取した標準試料について、中部地方全体の原産地把握のため、X軸にRb分率、Y軸にMn×100／Feの値を示した判別図を作成する。さらに箱根系の原産地判別のため、X軸にSr分率、Y軸に $\log(\text{Fe}/\text{K})$ の値を示した判別図を作成する。これと同様に作成した遺跡出土の黒耀石の判別図と、原産地試料の判別図を重ねあわせることにより遺物の原産地を推定する。

遺跡出土の黒耀石の測定結果は巻末の一覧表に記載した。また、1区～3区から出土した黒耀石538点の演算結果もあわせて図化し、第3図に掲載した。

なお、各試料の演算結果の詳細については、当研究所においてプロッピーディスクを提供、もしくは望月氏のホームページ (<http://www.busitu.numazu-ct.ac.jp/motizuki/home.htm>) で公開の予定である。



第3図 産地判別図

## 第Ⅱ章 遺跡の概要

### 第1節 遺跡の位置と歴史的環境

下原遺跡は、三島市街地東方に広がる箱根山西麓の緩やかな丘陵上に位置し、遺跡の北方には富士山を見ることができる。箱根山は今から約40万年に火山活動を開始し、3回の活動期に分けて断続的に形成された複式火山である。現在の箱根西麓の緩斜面地形は、約6万年前に始まり、4万年前に終息した第3期の火山活動中、約5万年前の大噴火の際に噴出した軽石流（箱根新期軽石流）により形成されたもので、その上層は愛鷹ローム層に対比される古富士火山後期の活動による火山灰が厚く堆積している。さらに狩野川の支流である大場川に注ぐ沢地川、山田川、夏梅木川などの小河川に開析されて複雑な尾根地形を形成している。本遺跡はこのようにして形成された尾根の比較的平坦な台地上に位置している。

箱根西麓は、古くから東海地方と関東地方を結ぶ交通の要所として知られ、現在でも本遺跡の南側には国道1号線が尾根筋に沿って造られている。この地域は各時代の遺跡が密に分布しており、とりわけ旧石器時代から縄文時代の遺跡数が多いことで知られている。

現在のところ、箱根西麓における最古の遺跡は、初音ヶ原遺跡群（①）のSCⅢ層から検出された台形様石器や局所磨製石斧を含む旧石器時代の石器群である。また、この層からはBBⅢ層中が掘りこみ面と推定される土坑群が検出された。これらの土坑群は尾根を横断するように配列されていることから陥穴と推定され、本遺跡では平成6年度と翌7年度の調査で同じくSCⅢ層を検出面とした土坑7基が検出された。また、当研究所が調査した加茂ノ洞B遺跡（23）、焼場遺跡A地点（27）でも同様の土坑の検出が認められている。しかし、当地域においては、BBⅢ層からBBⅡ層、A.T.（姶良・丹沢広域火山灰）降灰以後BBⅠ層からBBⅠ層にかけての石器群を検出する遺跡は相対的に少なく、一部の遺跡で小規模な石器群が検出されるにとどまる。休場層段階に入ると遺跡の分布は台地全体に広がり、各遺跡で良好な石器群の検出が認められる。この層位は、ナイフ形石器の盛行期から最終末、細石刃と細石刃核の出現と消滅、さらに縄文時代草創期に及ぶ幅広い時期の遺物を包含している。また、柳沢C遺跡（②）では休場層下層から石囲い炉が検出されている。

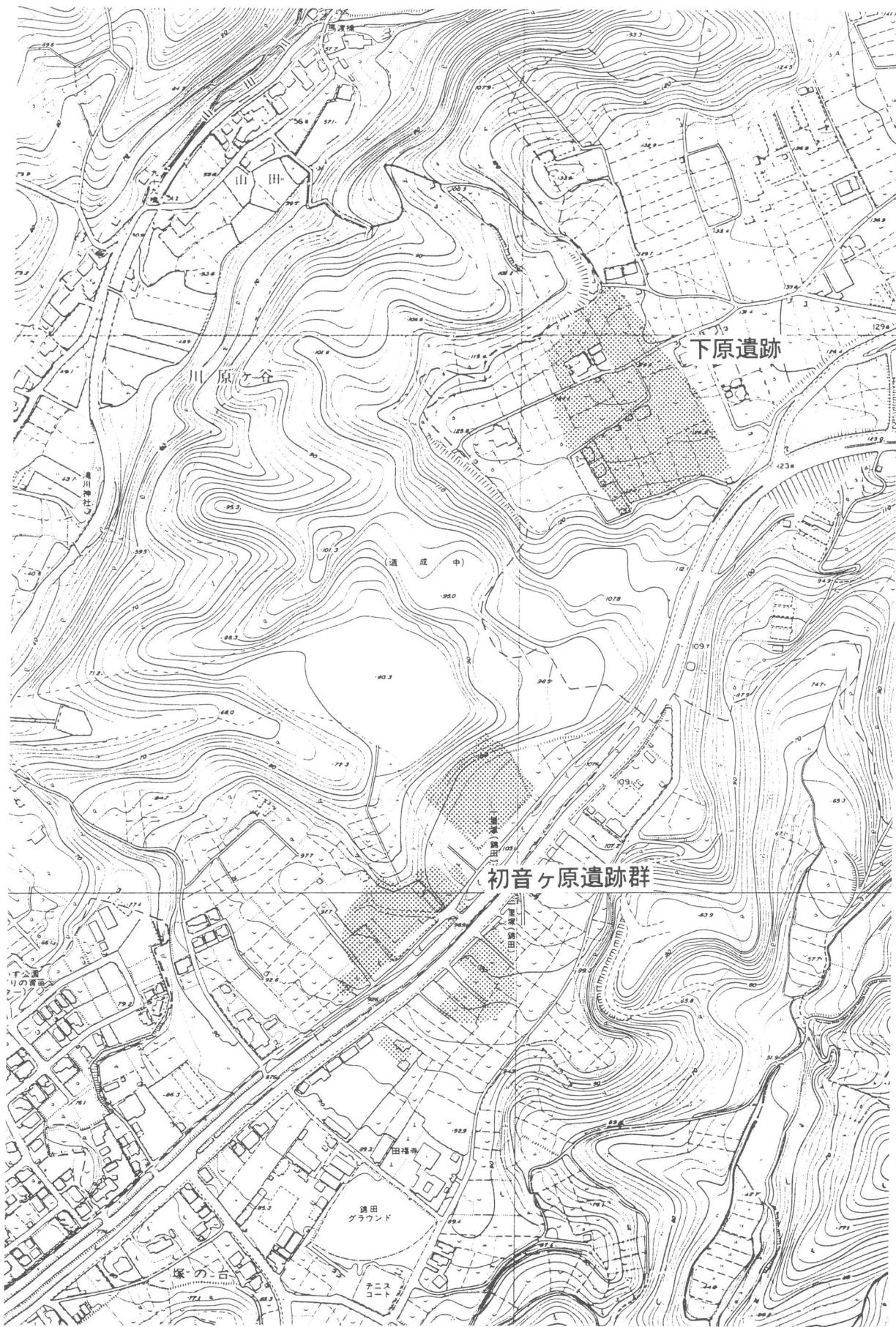
縄文時代草創期は、有舌尖頭器や大型の槍先形尖頭器が出土しているが、土器との共伴関係等、未だ不明な点も多いのが現状である。縄文早期、特に後半に入ると、10数基の竪穴住居跡などで構成される集落跡を検出した乾草峠遺跡（③）をはじめ、遺跡数は再び増加する。

第4図 東駿河湾環状道路と周辺の遺跡 (S=1/50,000)



表3 東駿河湾環状道路関係埋蔵文化財包蔵地

番号	所在地	各市町村 整理番号	遺跡名	面積 (m <sup>2</sup> )	内容	調査状況
1	沼津市	4	上松沢平	16.440		調査予定
2	沼津市	3	虎杖原1号墳	4.150		調査予定
3	沼津市	2		2.650		調査予定
4	沼津市	1	丸尾北	6.160		調査予定
5	長泉町	14	柏窪B	800		調査予定
6	長泉町	54	桜畠上	6.200		調査予定
7	長泉町	53	山岸A	4.400		H9確認調査
8	長泉町	42	木戸	4.800		H9確認調査
9	長泉町	37	池田B	5.812		調査予定
10	長泉町	38	鉄平	14.400		調査予定
11	長泉町	48	大平	12.000	中・近世	H8本調査「大平遺跡」1998
12	三島市	0		12.000		調査予定
13	三島市	1	萩B	2.000		調査予定
14	三島市	2	北ノ入A	1.440		H7確認調査、以後本調査予定
16	三島市	4	長平衡平	1.040	旧石器～縄文	H9本調査
17	三島市	5	小池	5.310	旧石器～縄文	H9本調査「小池遺跡」1998
18	三島市	6				
19	三島市	7	徳倉B	2.370	旧石器～縄文	H8本調査「徳倉B遺跡」1998
20	三島市	8	上ノ池	1.320	旧石器～縄文	H7・8本調査「上ノ池遺跡」1998
21	三島市	9			遺跡なし	H5確認調査
22	三島市	10	八田原	14.000	旧石器～縄文、中・近世	H7本調査「八田原遺跡」1997
23	三島市	11	加茂ノ洞B	1.000	旧石器～縄文	H6本調査「加茂ノ洞B遺跡」1996
24	三島市	12			遺跡なし	H5確認調査
25	三島市	13				市道につき調査対象外
26	三島市	14	五百司	1.140	集石	H5確認調査「焼場遺跡B 地点・五百司遺跡」1996
27	三島市	15	焼場	5.600	旧石器～縄文、中・近世	H4・7本調査「焼場遺跡A地点」1994 「焼場遺跡B 地点・五百司遺跡」1996
28	三島市	16	下原	16.650	旧石器～縄文	H5本調査「下原遺跡I」1995、「下原遺跡II」1996 H9本調査「下原遺跡III」1998
	三島市	17				
30	三島市	18	押出シ	2.810	縄文中期集落	H8・9本調査、H9整理作業
31	三島市	19	生茨沢	6.750	旧石器～縄文	H8・9確認調査
32	三島市	20	中峯	2.750	旧石器～縄文	H9本調査「中峯遺跡」1998
33	三島市	21	桧林A	7.440	旧石器～縄文	H8・9本調査「桧林A遺跡」1998
34	三島市	22		1.870		調査予定
35	三島市	23		1.190		H9確認調査
36	三島市	24	ヌタウチド山	4.310		H9確認調査
37	三島市	25		1.940		H9確認調査
38	三島市	26	田頭山	5.750		調査予定
39	三島市	27	大明神洞	5.000		調査予定
40	三島市	28	長命洞B	2.120		調査予定
41	三島市	29	大場向山B	1.060		調査予定
42	三島市	30		19.845		調査予定



第5図 周辺地形及び周辺遺跡立地図 (S=1/5,000)

## 第2節 基本層序と土層の堆積状況

本遺跡が立地する箱根山西麓の丘陵地は、古期富士火山を主な供給源とするローム層が厚く堆積して形成されている。「箱根西麓ローム層」と呼称されるこのローム層の上層は、愛鷹ローム層の上部ロームに相当し、また関東ローム層の立川ロームにも相当する。一般にスコリア帯と黒色帶（埋没腐食土層）の互層を成すが、テフラの供給源である富士山から若干距離が離れているため、愛鷹ローム層に比して黒色帶の発色が鈍く、スコリアの堆積量も少ないので特徴である。特にSCⅢ層下半部以下の黒色帶を観察することは現段階では困難である。

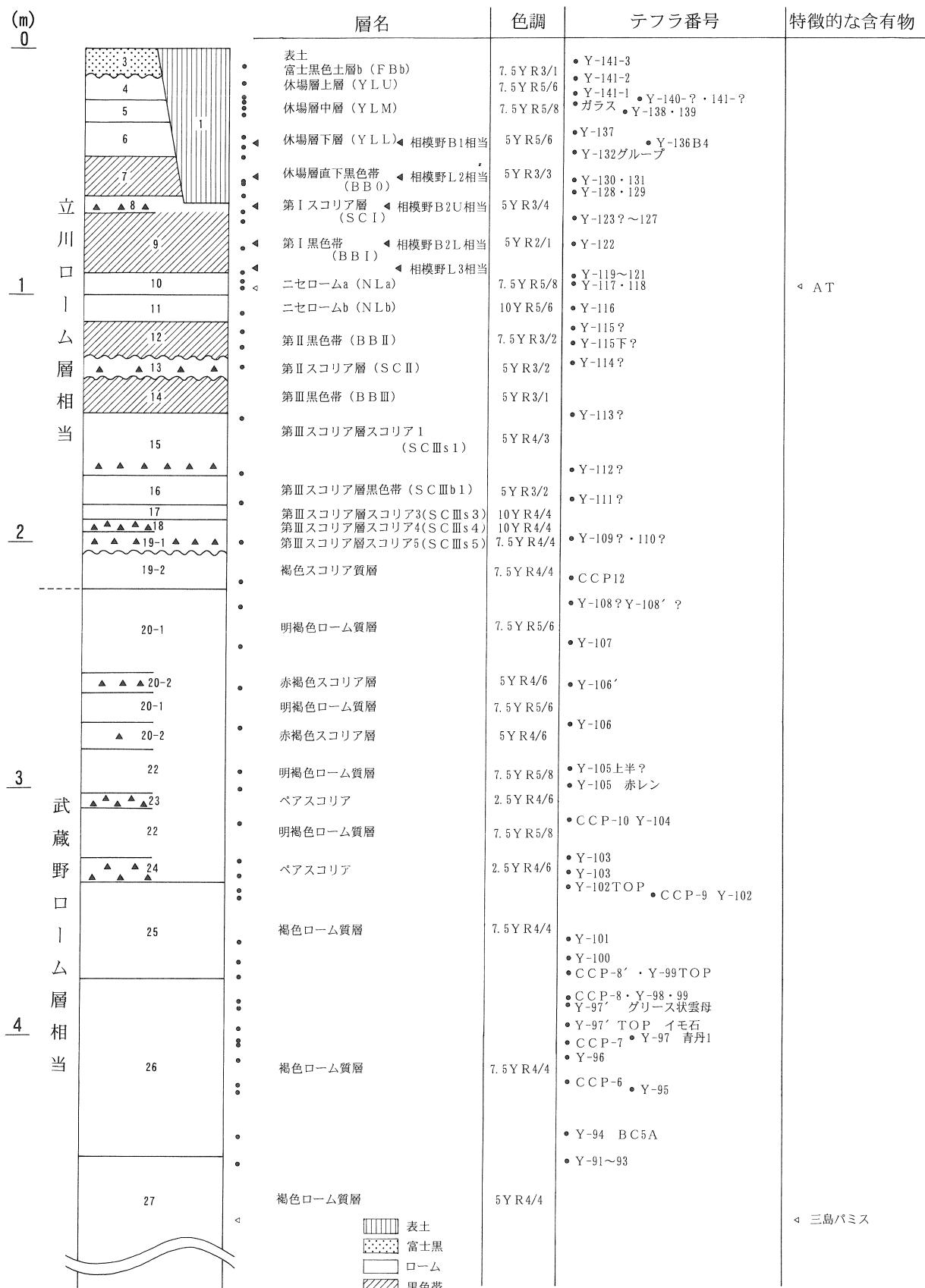
今回の調査で改めて土層の観察を行った結果、第17層以下の層で層序の細分と若干の変更が認められたため、第6図に改訂した土層柱状模式図を掲載することにした。以下、各層毎に解説を記するが、層位番号は『下原遺跡I』に準じて適宜枝番を用いて表記し、層名は前掲書と愛鷹山南麓に準じた。また、都留文科大学教授・上杉陽氏に土層を実見していただき、この結果確認されたテフラの番号と特徴的な含有物も併せて記載した。

- |      |   |
|------|---|
| 第1層  | 耕作土   |
| 第2層  | 富士黒色土層a (FBa) やや褐色を帯びる黒色土で、カワゴ平パミスと考えられる $\phi 0.1\sim 0.2\text{cm}$ の白色パミスを少量含んでいるが、上層からの混入と考えられる。今回の調査ではすべて削平され、検出されなかった。   |
| 第3層  | 富士黒色土層b (FBb) 暗褐色土で、 $\phi 0.1\sim 0.2\text{cm}$ の橙色スコリアを少量含む。漸移的に休場層に変化し、不安定な堆積状況を示す。  |
| 第4層  | 休場層上層 (YLU) 明黄褐色ローム層で、粘性がありパウダー状を呈する。 $\phi 0.1\sim 0.2\text{cm}$ の橙色スコリアをごく少量含む。また、黄色の発色は休場層中で最も鮮やかで、斑紋状に明暗色が混ざりあっていっているように見えるのが特徴である。   |
| 第5層  | 休場層中層 (YLM) 黄褐色ローム層で、 $\phi 0.1\sim 0.3\text{cm}$ の橙色スコリア、茶褐色スコリアを少量含む。第4層に比してやや硬く、粒子も粗くなる。   |
| 第6層  | 休場層下層 (YLL) 中層下位で相模野B 1層に対応する層である。暗黄褐色ローム層で、 $\phi 0.2\sim 1.0\text{cm}$ の橙色スコリア、黒色スコリアを多量に含む。第4層、第5層に比して硬く、粒子も粗い。  |
| 第7層  | 休場層直下黒色帶 (BB0) 中層で相模野L 2層に対応する層である。暗赤褐色硬質ローム層で、 $\phi 0.2\sim 1.0\text{cm}$ の黒色、黄色、赤色スコリアを多量に含む。上層からの変化は漸移的で、上層のローム層中に $\phi 1.0\text{cm}$ のブロック状に混入する形で出現する。下層に下がるにつれて硬質ロームの比率が増し、下半部は部分的に第Iスコリア層のスコリアが混入する。乾燥するとクラックを生じ、しまりは弱い。 |
| 第8層  | 第Iスコリア層 (SC I) 赤褐色スコリア層で、本遺跡では層状に確認することはなく、ブロック状に認められる。   |
| 第9層  | 第I黒色帶 (BB I) 上面で相模野B 2U層、中位で相模野B 2M層、下位で相模野B 2L層に対応する層である。黒褐色硬質スコリア質層で、 $\phi 0.2\sim 0.5\text{cm}$ の橙色、黒色、黄色スコリアを多量に含む。乾燥するとブロック状に崩壊する。  |
| 第10層 | ニセロームa (NLa) 上面で相模野L 3層に対応する層である。明黄褐色スコリア層で、 $\phi 0.2\sim 0.5\text{cm}$ の橙色、黒色、赤色スコリアから成る非常に硬質な層である。層下半部に $\phi 1\sim 4\text{cm}$ の始良・丹沢広域火山灰 (AT) のブロックを見ることがある。  |

第11層	ニセロームb (NLb)	黄褐色スコリア層で、上層と同様、 $\phi 0.2\sim0.5\text{cm}$ の橙色、黒色、赤色スコリアから成る。上層に比してスコリアの粒径が小さくなり、密度が薄くなる。
第12層	第Ⅱ黒色帶 (BBⅡ)	黒褐色スコリア質層で、 $\phi 0.1\sim0.5\text{cm}$ の橙色スコリアを含み、 $\phi 0.1\sim0.2\text{cm}$ の黒色、黄色スコリアも少量認められる。
第13層	第Ⅱスコリア層 (SCⅡ)	暗赤褐色スコリア層で、 $\phi 0.2\sim0.8\text{cm}$ の橙色スコリアから成る。BBⅡ、BBⅢ層との層界は非常に不明瞭である。
第14層	第Ⅲ黒色帶 (BBⅢ)	暗黒褐色スコリア質層で、SCⅡ層と類似する $\phi 0.2\sim0.8\text{cm}$ の橙色、黄色スコリアを含む。SCⅡ層との層界はスコリアの頻度をもって分層する。
第15層	第Ⅲスコリア層スコリア1 (SCⅢs1)	にぶい赤褐色スコリア層で、 $\phi 0.2\sim0.3\text{cm}$ の橙色スコリアを多く含む。
第16層	第Ⅲスコリア層黒色帶1 (SCⅢb1)	暗黒褐色スコリア質層で、 $\phi 0.2\sim0.3\text{cm}$ の橙色スコリアを含み、SCⅢ層に特徴的な $\phi 0.5\sim0.8\text{cm}$ の黒色スコリアも含む。

以上第16層まではほぼ愛鷹山南麓の土層と対比できるが、愛鷹山南麓のSCⅢ層の下半部で発達する黒色帶以下、BBIV層～BBVII層と称される黒色帶は下原遺跡では観察することができない。また、今次の調査において、第17層と第18層はSCⅢ層中のスコリア層としての認識が可能であると判断し、第19層と第20層は細分が可能であった。以下に現地での所見を記す。

第17層	第Ⅲスコリア層スコリア3 (SCⅢs3)	『下原遺跡I』における第17層・暗黄褐色スコリア質層に相当する。 $\phi 0.2\sim1.3\text{cm}$ の黒色スコリアを主体として、 $\phi 0.1\sim0.2\text{cm}$ の橙色・赤色スコリアを含むが、スコリアの密度は薄い。
第18層	第Ⅲスコリア層スコリア4 (SCⅢs4)	『下原遺跡I』における第18層・暗黄褐色スコリア層に相当する。17層に含まれるスコリアの純層で、ロームをほとんど含まず非常に硬質である。
第19-1層	第Ⅲスコリア層スコリア5 (SCⅢs5)	『下原遺跡I』における第19層・褐色スコリア質層上層に相当する。 $\phi 0.1\sim0.5\text{cm}$ の橙色スコリア、 $\phi 0.2\sim0.7\text{cm}$ の黒色スコリアを多く含む。
第19-2層	褐色スコリア質層	『下原遺跡I』における第19層・褐色スコリア質層下層に相当する。上層の橙色・黒色スコリアをごく少量含む。
第20-1層	明褐色ローム質層	$\phi 0.1\sim0.2\text{cm}$ の発泡した赤色スコリアを含む。
第20-2層	赤褐色スコリア層	『下原遺跡I』における第20層に包含された $\phi 0.4\sim0.5\text{cm}$ の赤色スコリアで構成される $\phi 10\text{cm}$ のブロックが、不明瞭ながら層を形成していることを確認することができた。
第21層	ペアスコリア	赤褐色スコリアで、部分的に検出される。今次の調査では検出されなかった。
第22層	明褐色ローム質層	$\phi 0.1\sim0.2\text{cm}$ の赤色スコリアを少量含む。20-1層よりロームの粒子が細くなる。
第23層	第24層 ペアスコリア	赤褐色スコリア層で、ブロック状に検出される。
第25層	褐色ローム質層	$\phi 0.2\sim1.0\text{cm}$ の橙色スコリアを少量含む。
第26層	褐色ローム質層	$\phi 1.0\text{cm}$ の橙色スコリアを少量含む。
第27層	褐色ローム質層	$\phi 1.0\text{cm}$ の橙色スコリアをごく少量含む。上層に比して硬く、粒子も粗い。下部に $\phi 0.1\sim0.2\text{cm}$ の三島パミスを見ることができる。

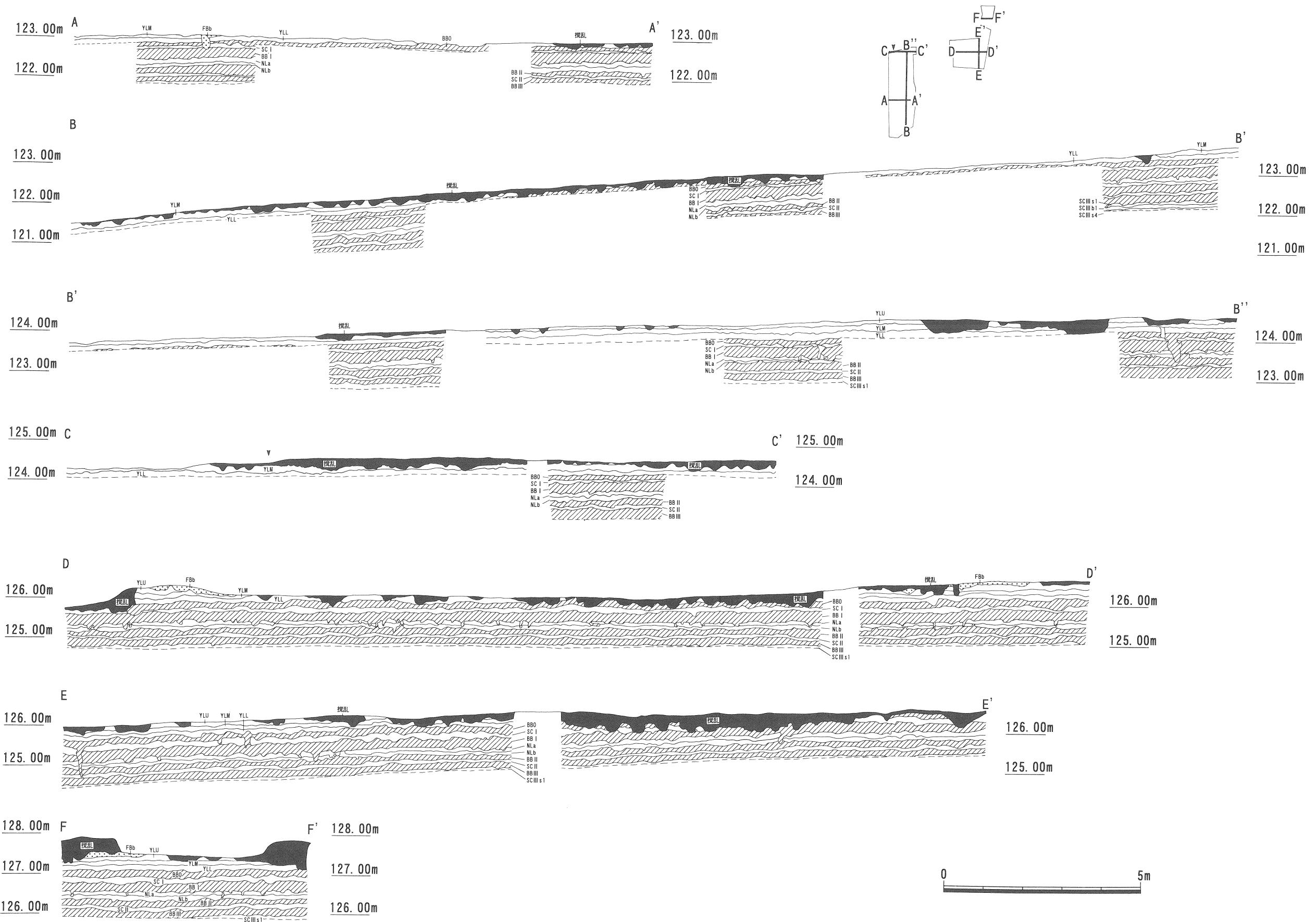


第6図 基本土層柱状図

下原遺跡は、標高約122～127mの比較的広く、平坦な、舌状に延びる尾根上の台地に立地し、調査区の北側と南側は傾斜の急な谷地形を成している。今回調査を行った4・5区は畑作による耕作とその後の個人住宅建設のため、1区～3区に比して、一部はBB I層まで搅乱が及んでいるなど、休場層上層から中層の覆土が残る範囲はさらに限られ、安定した堆積を見せるのはYL L層からとなる。またBB 0層では、4区E 6グリッド南西部では正断層、5区L 10グリッドでは地表面の断続的な亀裂を確認することができた。なお、4区Fライン南部においては、『下原遺跡I』で報告されている谷部の浸食は見られなかった。

#### 〈参考文献〉

- 望月明彦・池谷信行・小林克次・武藤由里 1994  
「遺跡内における黒耀石製石器の原産地別分布について—沼津市土手上遺跡BB V層の原産地推定から—」 静岡県考古学研究26
- 静岡県教育委員会 1989 『静岡県史資料編1 考古一』
- 静岡県考古学会編 1996 『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年』 静岡県考古学会シンポジウムIX  
予稿集
- 静岡県考古学会編 1996 『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年』 静岡県考古学会シンポジウムIX  
収録集
- 函南町教育委員会 1989 『函南スプリングスゴルフ場用地内埋蔵文化財発掘調査報告書（I）』
- 三島市教育委員会 1987 『三島市誌増補』 第1章第1節・第2節
- 三島市教育委員会 1992 『三島市誌増補 資料編』 第1章・第2章第1節
- 三島市教育委員会 1989 『初音ヶ原遺跡群III』
- 三島市教育委員会 1996 『三島市文化財年報8』
- 財静埋文研 1995 『下原遺跡I』
- 財静埋文研 1996 『下原遺跡II』
- 財静埋文研 1996 『加茂ノ洞B遺跡』
- 財静埋文研 1994 『焼場遺跡（A地点）』
- 財静埋文献 1996 『焼場遺跡（B地点）・五百司遺跡』



第7図 土層堆積図 (S=1/100)

## 第Ⅲ章 近世・縄文時代の遺構と遺物

今回調査を行った4・5区からは縄文時代以降の遺構は検出されず、1～3区と同様、富士黒色土層より上層は耕作等により削平されていた。しかし、攪乱層を中心に、近世の遺物と縄文早期末に推定される土器片と石器が出土した。このうち残存状態の比較的良好な7点を図化し、第8図に掲載した。

1は江戸時代の火打ち石である。随所に発火時の打痕が残り、摩耗が著しい。2は江戸時代の玩具と推定される土製品である。赤橙色の精緻な胎土を持つ素焼きの製品である。

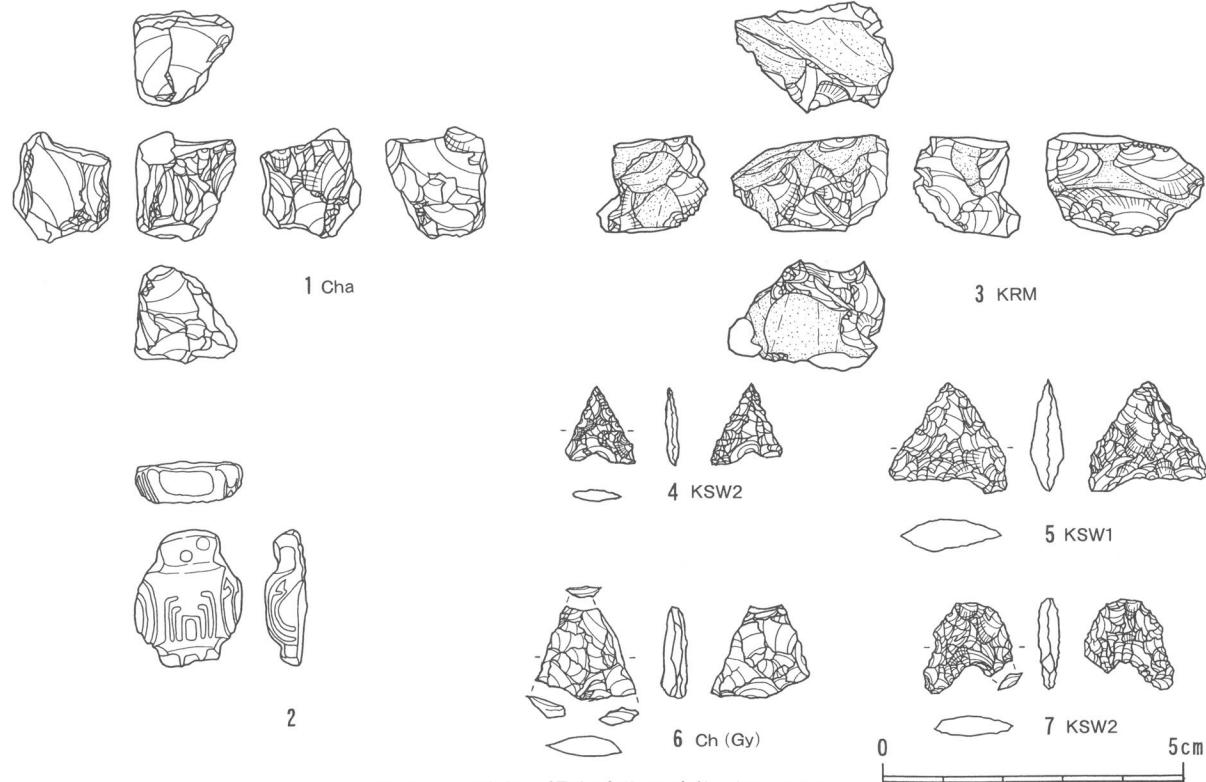
3は縄文時代の石鏃製作後に残った石核である。4～7は石鏃である。4点とも凹基無茎石鏃で、基部の抉りが浅いもの（4～6）と、基部を深くU字状に抉るもの（7）に分類することができる。4と7は同一母岩KSW 2を使用している。

表4 縄文時代個体別資料分類一覧

個体番号	色調	縞	包有物	ガラス光沢	自然面	個体数	備考
KSW1	暗灰色半透明	なし	微細な気泡目立つ	鈍い	不明	1	
KSW2	黒色半透明	なし	なし	富む	不明	2	

表5 近世～縄文時代遺物計測表

図版番号	器種	層位	登録番号	石材	原産地	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1	火打ち石	表探	4S0007	玉髓		18.5	17.6	15.8	5.2	
2	玩具	表探	5P0003			22.0	18.0	6.8		
3	石核	表探	4S0010	黒耀石	KRM	15.3	27.3	20.0	6.1	
4	石鏃	YLL	4S0097	黒耀石	KSW2	13.2	11.3	1.7	0.2	
5	石鏃	YLL	4S0048	黒耀石	KSW1	18.5	19.5	5.3	1.3	
6	石鏃	FB	5S0064	灰色チャート		(14.9)	(16.4)	4.0	(1.0)	
7	石鏃	FB	4S0031	黒耀石	KSW2	(14.7)	(14.6)	3.3	(0.5)	



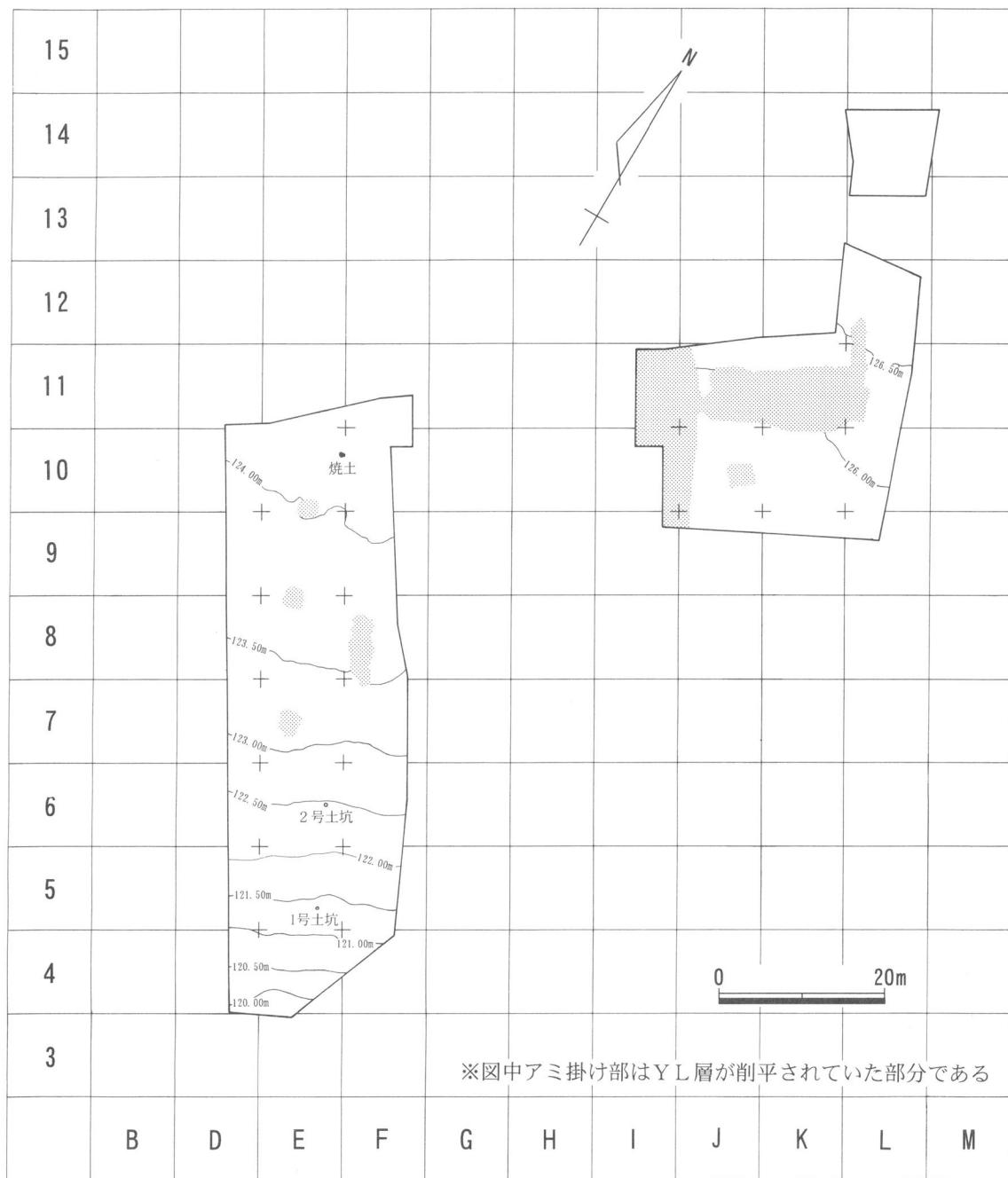
第8図 近世・縄文時代の遺物 (S=4/5)

# 第IV章 旧石器時代の遺構と遺物

## 第1節 休場層中層の遺構と遺物

### 概要

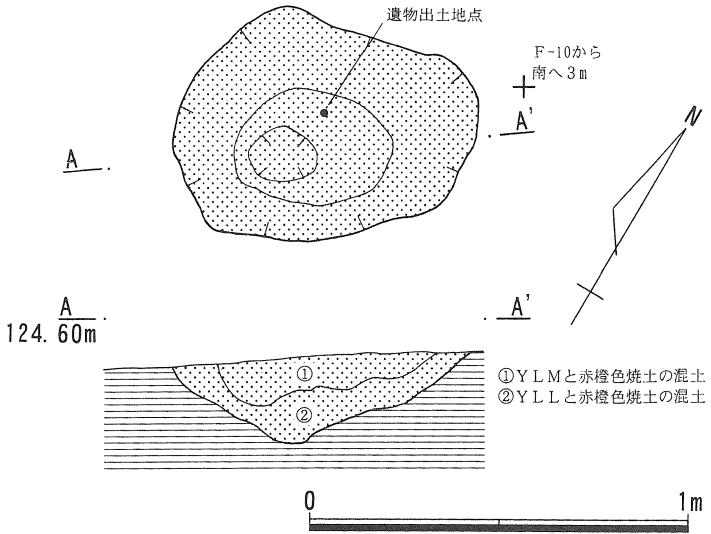
旧石器時代の遺構は4区で焼土1基、土坑2基を検出した。また、4・5区あわせて8ヶ所の石器ブロックが1・2区で検出された一見環状を呈するように分布する石器ブロックと礫群の空白域を埋めるように検出された。各石器ブロックの出土層位は、これらに伴って検出された礫群の層位から、休場層中層のものであると認定した。



第9図 休場層遺構配置図 (S=1/800)

## 1 遺構

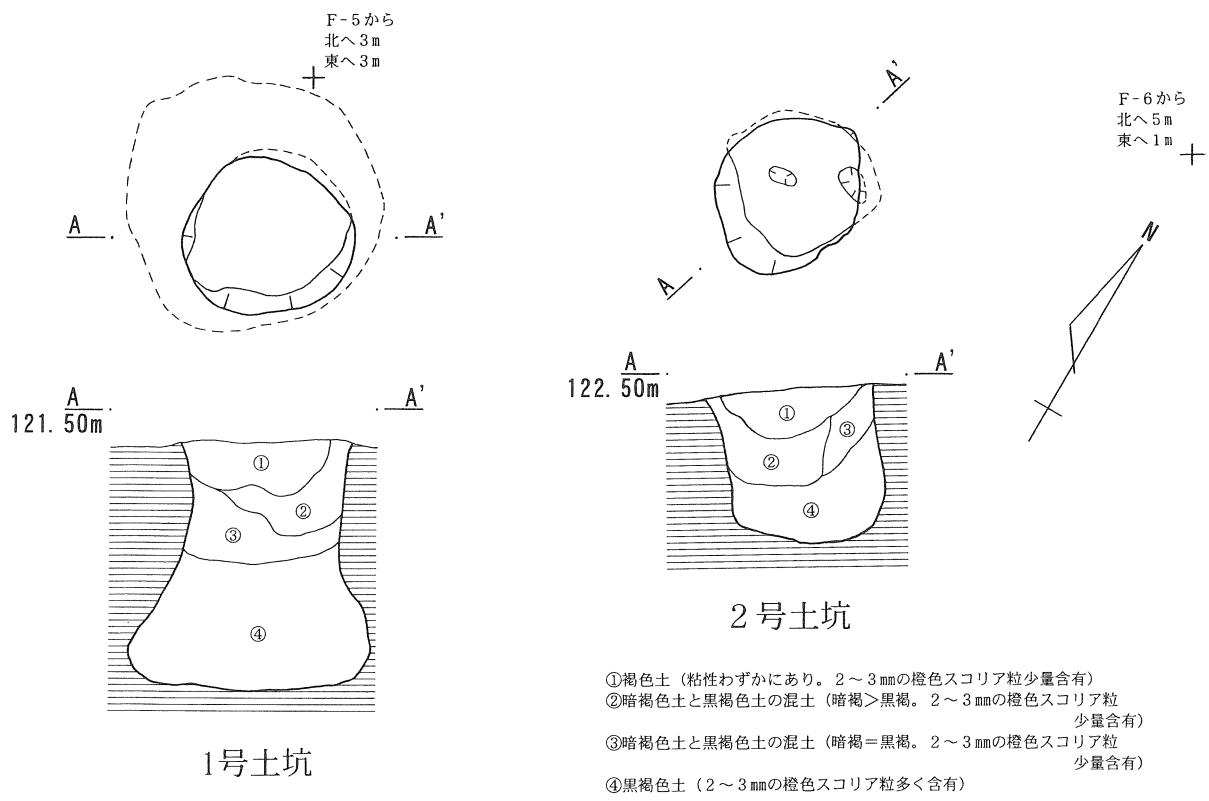
(1) 焼土 (第10図) E9 グリッドで検出された。YLM層を検出面とするが、実際の掘りこみ面はこれより上層と推定される。土坑状の焼土で、平面形は長軸約80cm、短軸約65cmをはかる橢円形、掘方の形状は浅い掘り鉢状を呈し、覆土中に粒状の焼土を多く含む。遺物は覆土上層より周辺から混入したと考えられるホルンフェルスのチップ1点が出土した。



第10図 焼土実測図 (S=1/20)

(2) 土坑 (第11図) E5 グリッドで1号土坑が、E6 グリッドで2号土坑が検出された。ともにBB0層まで掘り下げる平面プランを確認した。平面形は2基とも径約40cmの円形を呈し、掘方の形状は、1号土坑は底面径約70cmのフラスコ形、2号土坑は方形を呈する。覆土は2基とも上層は硬質の褐色土、中層は暗褐色土、下層は粘性の強い黒色土である。遺物は2基とも出土しなかった。形態や規模等から検討して、今回検出された2基の土坑は、1・2区で検出された陥穴と考えられる縄文時代草創期の土坑とは様相の異なるものと考えられるが、その用途は不明である。

なお、遺物集中地点については、石材の個体別分類記述後、詳細を述べることにする。



- ①褐色土（粘性わずかにあり。2~3mmの橙色スコリア粒少量含有）
- ②暗褐色土（2~3mmの橙色スコリア粒少量含有）
- ③暗褐色土（2~3mmの橙色、黒色スコリア粒多く含有）
- ④黒褐色土（2~3mmの橙色スコリア粒多く含有）

第11図 土坑実測図 (S=1/20)

## 2 個体別資料分類

平成5・6年度の調査では、1・2区出土遺物の個体別資料分類の結果、それぞれの資料に分布や石器組成の面で特徴があることが明らかになるなどの成果をあげることができた。今回の調査で出土した石器についても、原産地分類を行ったものを中心に、個体別資料分類を行っている。休場層出土の遺物については表6～8に石材別に所見を記述しているが、これより下層で出土したものについての所見は後節で記述することにする。各石材の分類基準は以下の通りである。

黒耀石——色調・透明度・含有物・光沢を基準として分類し、蛍光X線分析の可能な、厚さ2mm以上、長さ10mm以上の石器、剥片、チップについては産地同定を行い、その分析結果をもとに分類を検討。

ガラス質黒色安山岩——粒子の粗密、含有物を基準に分類。

ホルンフェルス——交差組織、鉄サビ状粒子の含有量を基準に分類。

珪石（チャート）——1個体1点であるため、個体別番号は特に記していない。

なお、黒耀石については、1・2区で出土した個体別資料とも照合を行った結果、同一の個体が出土したため、表6には『下原遺跡I』に掲載した旧個体別番号も併せて表記した。また、各個体別の平面分布は第12図～18図に、休場層から出土した全遺物の平面分布は第19図に示した。

表6 休場層個体別資料分類一覧（黒耀石）

個体番号	旧個体番号	色調	縞	包有物	ガラス光沢	自然面	個体数	備考
KRM1		薄黒色透明	灰色の粒子が雲状に散在	なし	鈍い	不明	2	
KRM2		薄黒色透明	暗灰色の粒子が雲状に散在	なし	鈍い	不明	3	
KRM3		薄黒色透明	暗灰色の粒子が帯をつくる	なし	鈍い	不明	1	
KRM4	HST1A	漆黒色 不透明～透明	黒色毛状の縞が全体に見られる	なし	鋭い	不明	2	
KRM5		煙色 透明～半透明	黒色粒子状の縞が見られる	なし	鋭い	不明	2	
KRM6		漆黒色 不透明～透明	黒色粒子状の縞が見られる	なし	鋭い	不明	1	
KRM7		薄煙色透明	暗灰色の縞	なし	鋭い	不明	1	
KRM8		薄黒色透明	白色の微細な縞	黒色粒子が全体に散在する	富む	不明	65	
KRM9		煙色透明 透明度高い	白色の微細な縞	黒色粒子が全体に散在する	鋭い	不明	296	
KRM10		煙色透明 透明度高い	白色の微細な縞	球顆少し	鋭い	不明	94	
KRM11		煙色透明 透明度高い	コゲ茶の微細な縞	なし	鋭い	不明	98	
KRM12		煙色透明	青灰色雲状の縞	なし	鋭い	不明	8	
KRM13		煙色透明	コゲ茶の縞が重なり、帯をつくる	なし	鋭い	不明	10	
KRM14		煙色透明	黒色粒子状の縞	なし	鋭い	不明	1	
KRM15		煙色透明	黒色粒子状の縞	なし	鋭い	不明	1	
KRM16		煙色透明	黒色粒子状の縞	なし	鋭い	不明	1	
KRM17		煙色透明	灰白の微細な縞が全体に見られる	なし	鋭い	不明	20	

個体番号	旧個体番号	色調	縞	包有物	ガラス光沢	自然面	個体数	備考
KRM18		煙色透明	暗灰色の微細な縞が全体に見られる	なし	鋭い	不明	17	
TTS1	MUG3	薄灰黒色 半透明	暗灰色の気泡状粒子が散在	なし	富む	不明	1	
TTS2	MUG5	灰～暗灰色 半透明	微細な気泡状の縞	なし	鈍い	全体に発泡している	1	
TTS3	MUG2	煙色透明	なし	1mm程度の球顆が多く散在	鋭い	不明	2	
TTS4	MUG4	薄煙色 透明～半透明	灰色の細やかな縞	微細な球顆を多く含む	鋭い	なめらか 一部発泡	1	
TTS5		煙色透明	灰白の微細な縞が全体に見られる	なし	鋭い	不明	7	
TTS6		薄黒色透明	なし	1mm程度の球顆含む	富む	不明	1	
TTS7		暗灰色半透明	なし	微細な気泡目立つ	鋭い	不明	1	
TTS8		薄煙色透明	暗灰色の縞	なし	鋭い	不明	1	
WDT1		煙色透明 透明度高い	白色の微細な縞	なし	鋭い	スリガラス状	1	WDT1群に相当する
WDT2		煙色透明 透明度高い	白色の微細な縞	球顆少し	鋭い	不明	1	WDT2群に相当する
WDT3	WAD8	漆黒色不透明	なし	なし	鋭い	スリガラス状	49	WDT1群に相当する
HTJ1	HAT1	黒～灰色 不透明～半透明	なし	全体に微細な気泡や、細かい割れ目が見立ち、白色粒子を含む	鈍い	なめらか	17	
HTJ2		黒～灰黒色 不透明	なし	なし	風化が著しい 鈍い	不明	3	
HTJ3		黒色不透明	なし	1mm程度の白色粒子	富む	不明	1	
HTJ4		黒色不透明	なし	細かい割れ目が目立つ	鈍い	不明	1	
HTJ5	HAT1 に似る	黒色 不透明～半透明	なし	3mm程度の球顆を含む	富む	不明	1	
HTJ6		黒色半透明	なし	微細な白色粒子を含む	鈍い	不明	1	
HTJ7	HAT2	漆黒色不透明	なし	2mm程度の白色粒子目立つ	富む	不明	1	
HTJ8		黒色 半透明～透明	なし	3mm程度の球顆を含む	富む	不明	24	
HTJ9		黒色 半透明～透明	なし	1mm程度の白色粒子	富む	不明	2	
HTJ10		黒色 不透明～半透明	なし	全体に黒色微粒子が散在、1mm程度の白色粒子を含む	鋭い	不明	40	
KSW3		黒灰色不透明	一部に灰色の縞が見られる	1mm程度の球顆を含む	富む	不明	1	
KSW4		黒灰色半透明	なし	なし	富む	不明	1	
KSW5		暗灰色不透明	なし	1mm程度の球顆を含む	鈍い	不明	1	
KSW6		黒色半透明	なし	なし	鈍い	不明	6	

表7 休場層個体別資料分類一覧（ホルンフェルス）

個体番号	特長	交差組織	鉄サビ状粒子	自然面・その他	個体数
Hor1	淡黄色粘土様物質に覆われ、新鮮面は赤紫黒色。塊状。	全体に見られ、組織に沿って割れている	少し	円礫面	33
Hor2	淡黄色粘土様物質に覆われ、新鮮面は赤紫黒色。片状に剥がれやすく、源岩の特長残る。	少し見られる	少し	不明	17
Hor3	淡緑褐色粘土様物質に覆われ、新鮮面は不明。塊状。	なし	わずか	円礫面	2

個体番号	特長	交差組織	鉄サビ状粒子	自然面・その他	個体数
Hor4	淡黄色粘土様物質に薄く覆われ、新鮮面は赤紫黒色。塊状。	なし	少し	円礫面でなめらか	3
Hor5	淡黄色粘土様物質に覆われ、片状に剥がれやすく、源岩の特長残る。	全体に見られ、組織に沿って割れ目立つ	少し	不明	23
Hor6	淡黄色粘土様物質に覆われ、新鮮面は紫黒色。塊状。	少し見られる	少し	不明	3
Hor7	淡黄灰色粘土様物質に薄く覆われ、新鮮面は赤紫黒色。塊状。	全体に見られ、組織に沿って割れている	少し	円礫面	3
Hor8	淡黄色粘土様物質に覆われ、新鮮面は紫黒色。塊状。	少し見られる	少し	不明	1
Hor9	淡黄色粘土様物質に薄く覆われ、新鮮面は赤紫黒色。塊状。	なし	少し	不明	6
Hor10	淡黄色粘土様物質に覆われ、新鮮面は不明。片状に剥がれやすい。	少し見られる	わずか	不明	9
Hor11	淡緑褐色粘土様物質に覆われ、新鮮面は不明。塊状。	なし	わずか	不明	36
Hor12	淡黄灰色粘土様物質に覆われ、新鮮面は紫黒色。塊状。	なし	少し	不明	11
Hor13	淡緑褐色粘土様物質に薄く覆われ、新鮮面は不明。塊状。	少し見られ、組織に沿って割れている	わずか	不明	9
Hor14	淡黄色粘土様物質に覆われ、新鮮面は赤紫黒色。塊状。	少し見られ、組織に沿って割れている	わずか	円礫面	19
Hor15	淡黄灰色粘土様物質に覆われ、新鮮面は赤紫黒色。塊状。	全体に見られ、組織に沿って割れている	少し	不明	34
Hor16	淡灰褐色粘土様物質に薄く覆われ、新鮮面は不明。塊状。	なし	なし	不明	1

表8 休場層個体別資料分類一覧（ガラス質黒色安山岩）

個体番号	特長	含有物	気泡	自然面・その他	個体数
GAN1	風化面は灰褐色。新鮮面は黒色。光沢あり。緻密な石質。	1mm程度の白色岩片をわずかに含む	微細な気泡が全体に目立つ	不明	2
GAN2	風化面は灰黒色。新鮮面は不明。緻密な石質。	なし	微細な気泡がわずかに見られる	不明	4
GAN3	風化面は灰黒色。新鮮面は黒色。光沢あり。緻密な石質。	黄褐色岩片を含む	偏平状の気泡がわずかに見られる	不明	1
GAN4	風化面は灰褐色。新鮮面は黒色。光沢あり。粗粒な石質。	なし	微細な気泡が目立つ	不明	2
GAN5	風化面は灰褐色。新鮮面は黒色。光沢あり。緻密な石質。	1mm程度の長石をわずかに含む	気泡はほとんどなく、自然面で気泡が目立つ	なめらかだが微細な気泡が目立つ	1
GAN6	風化面は灰黒色。新鮮面は黒色。光沢あり。緻密な石質。	なし	偏平状の気泡が全体に見られる	不明	2
GAN7	風化面は灰黒色。新鮮面は黒色。光沢あり。粗粒、流理が見られる。	なし	気泡が全体に見られる	溶岩状のギザギザした面	1
GAN8	風化面は暗灰色。新鮮面は黒色。光沢あり。緻密な石質。	黄褐色岩片を含む	全体に微細な気泡が目立つ	円礫状	2
GAN9	風化面は灰褐色。新鮮面は黒色。光沢あり。緻密な石質で、全体に流理が目立つ。	黄褐色岩片を含む	流理に沿って微細な気泡が見られる	溶岩状のギザギザした面	1
GAN10	風化面は黒色。新鮮面は黒色。光沢あり。緻密な石質。	なし	微細な気泡が目立つ	不明	8

表9 個体別資料器種組成

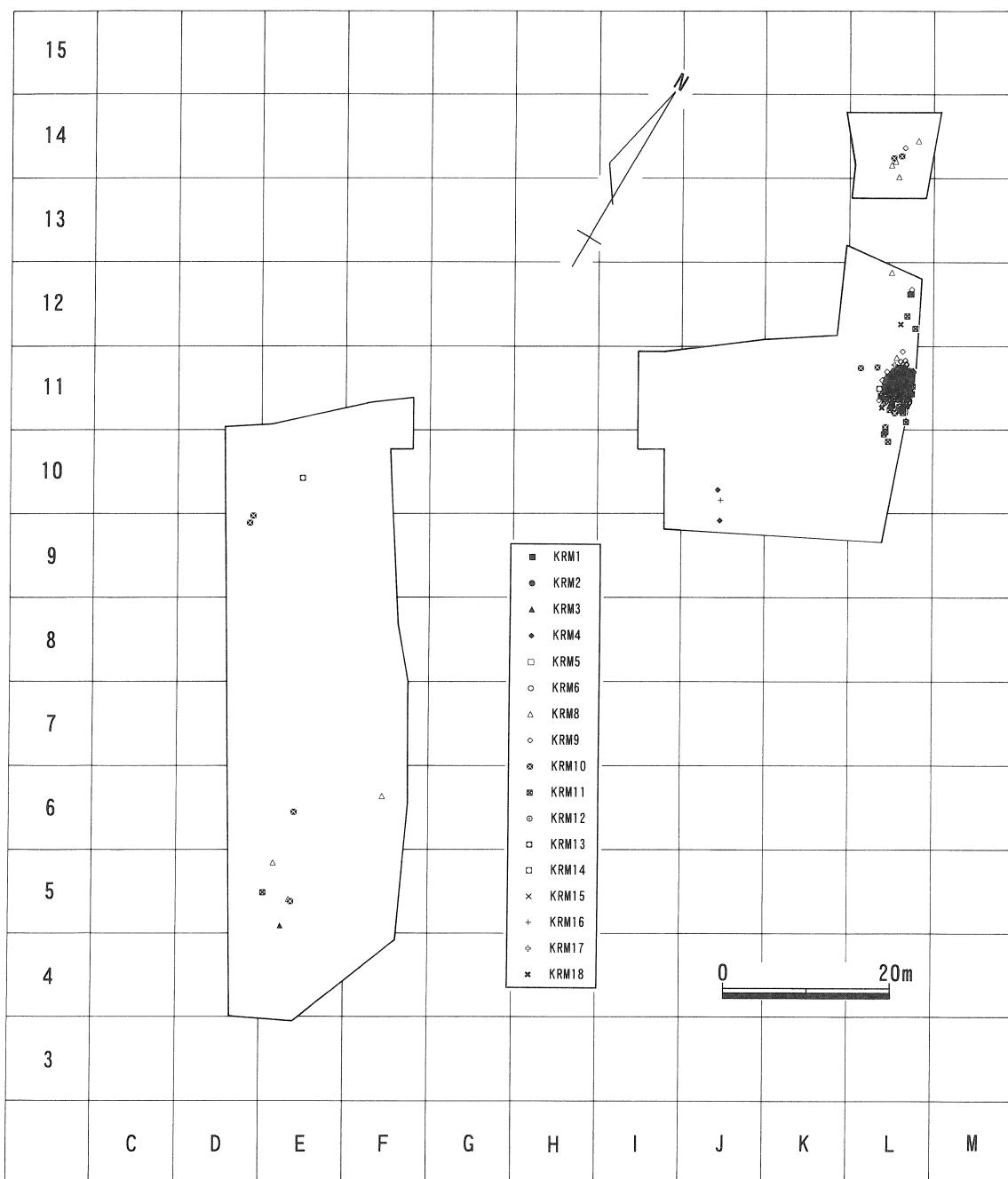
個体別番号	尖頭器	ナイフ形石器	彫器	削器	抉入削器	楔形石器	加工痕剥片	使用痕剥片	石核	打面調整剥片	刃部再生剥片	ポイントフレーク	器種不明	礫器	敲石	加工礫	剥片・チップ	合計
KRM1																	2	2
KRM2								1									2	3
KRM3		1																1
KRM4																	2	2
KRM5																	2	2
KRM6																	1	1
KRM7																	1	1
KRM8	1	4									1						59	65
KRM9		1										1					294	296
KRM10																	94	94
KRM11		1		1	1												95	98
KRM12																	8	8
KRM13		2		1													7	10
KRM14																	1	1
KRM15																	1	1
KRM16																	1	1
KRM17		1									1						18	20
KRM18		2															15	17
TTS1		1																1
TTS2																	1	1
TTS3																	2	2
TTS4																	1	1
TTS5																	7	7
TTS6																	1	1
TTS7		1																1
TTS8																	1	1
WDT1		1																1
WDT2		1																1
WDT3		2									1						46	49
HTJ1																	17	17
HTJ2		1					1										1	3
HTJ3																	1	1
HTJ4																	1	1
HTJ5																	1	1
HTJ6							1											1
HTJ7							1											1
HTJ8		3															21	24
HTJ9								1									1	2
HTJ10		2		1													37	40

個体別番号	尖頭器	ナイフ形石器	彫器	削器	抉入削器	楔形石器	加工痕剥片	石核	打面調整剥片	刃部再生剥片	ポイントフレーク	器種不明	礫器	敲石	加工礫	剥片・チップ	合計
K SW3																1	1
K SW4																1	1
K SW5		1															1
K SW6																6	6
Hor1		2														32	34
Hor2																16	16
Hor3																2	2
Hor4							1									2	3
Hor5																23	23
Hor6																3	3
Hor7							1									2	3
Hor8																1	1
Hor9		1														5	6
Hor10																9	9
Hor11																36	36
Hor12							1									11	12
Hor13								1								7	8
Hor14								1	1							17	19
Hor15																33	33
Hor16							1									1	2
GAn1		1					1										2
GAn2																4	4
GAn3																1	1
GAn4																2	2
GAn5																1	1
GAn6																2	2
GAn7																1	1
GAn8																2	2
GAn9							1									1	
GAn10						1										7	8
チャート								1								6	7
硬質頁岩			1														1
粘板岩											1					2	3
珪岩																1	1
硬質細粒凝灰岩			1													1	2
細粒安山岩									1			1					2
輝石安山岩													1	1			2
流紋岩							1										1
玄武岩																1	1
砂岩																1	1

4・5区から出土した黒耀石は、霧ヶ峰系、蓼科系、和田峠系、畠宿、柏峠の5系統が確認された。以上5系統の黒耀石とホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩、礫の4・5区における分布状況を以下に記す。

### (1) 霧ヶ峰系黒耀石 (第12図)

4・5区では最多の623点が出土し、18個体に分類できる。中でもKRM9は296点が出土し、黒耀石の総点数の約50%、個体別資料の総点数に対する比率も約40%を占める。これにKRM10とKRM11がほぼ同率で続き、さらにKRM8が続く。以上の4個体だけで個体別資料の総点数の約70%を占める。これらのほとんどがL11グリッドに集中して石器ブロックを形成し、4区全体や5区L12、L14グリッドにも拡散して分布する。器種はナイフ形石器12点、削器2点、尖頭器、抉入削器各1点のtoolをはじめ、使用痕の

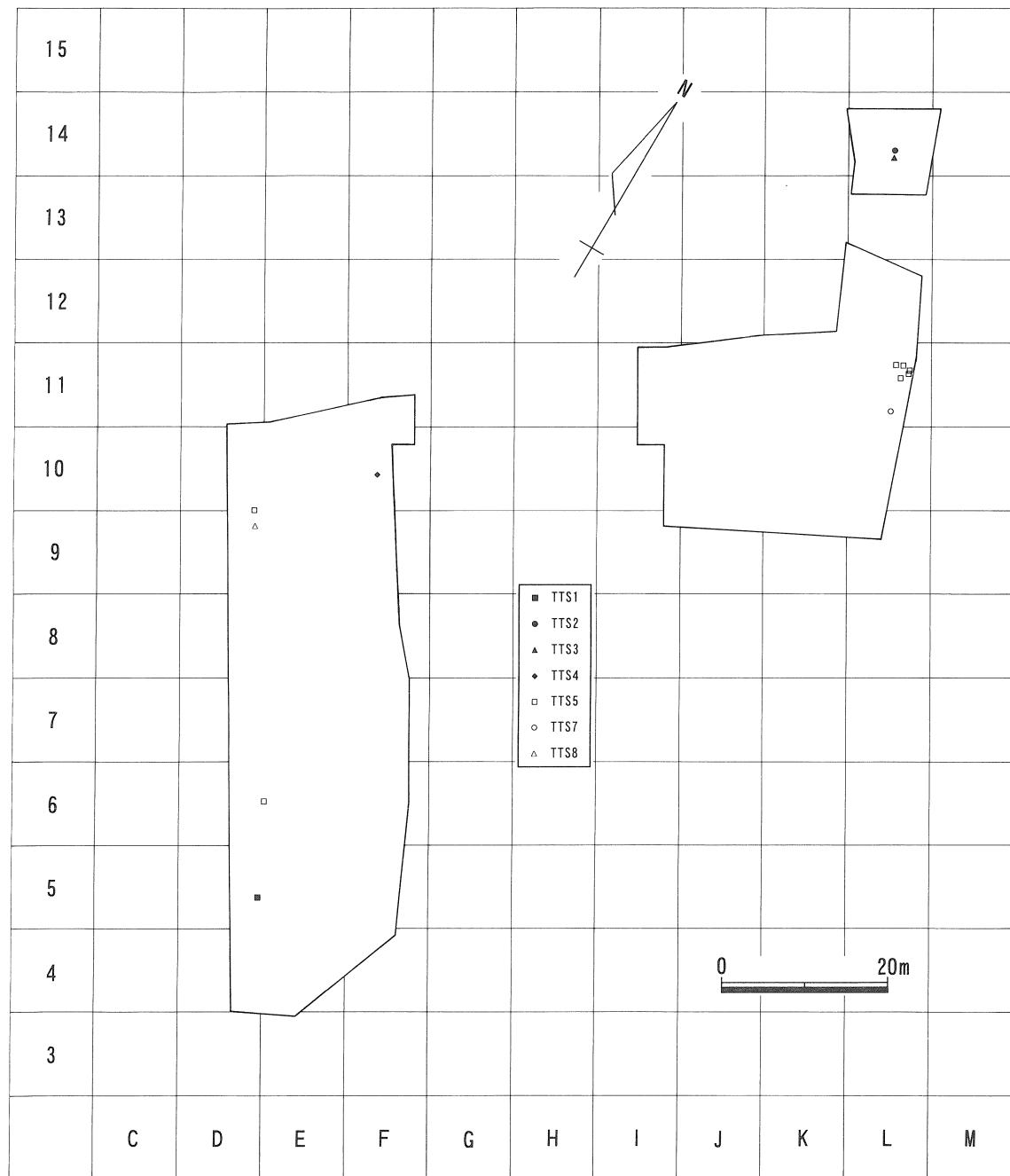


第12図 休場層個体別資料分布図（霧ヶ峰系）

ある剥片、打面調整剥片、刃部再生剥片、ポイントフレーク各1点が見られる。toolの比率は、KRM10のように多量に出土していくながらtoolを全く含まないものから、KRM13のように比較的比率が高いものまで、個体によって大きく異なるが、全体的には他の系統の黒耀石に比して低い数値を示す。なお、KRM7は表採資料である。

## (2) 蓼科系黒耀石 (第13図)

4・5区での出土数は15点と少なく、8個体に分類できる。最も多い7点が出土したTTS5は、L11グリッドに集中して石器ブロックを形成し、4区E6、E10グリッドにも拡散して分布する。また、1・2区でも出土するTTS1～TTS4 (MUG 3・5・2・4) は4区、5区にも散発的に分布している。tool

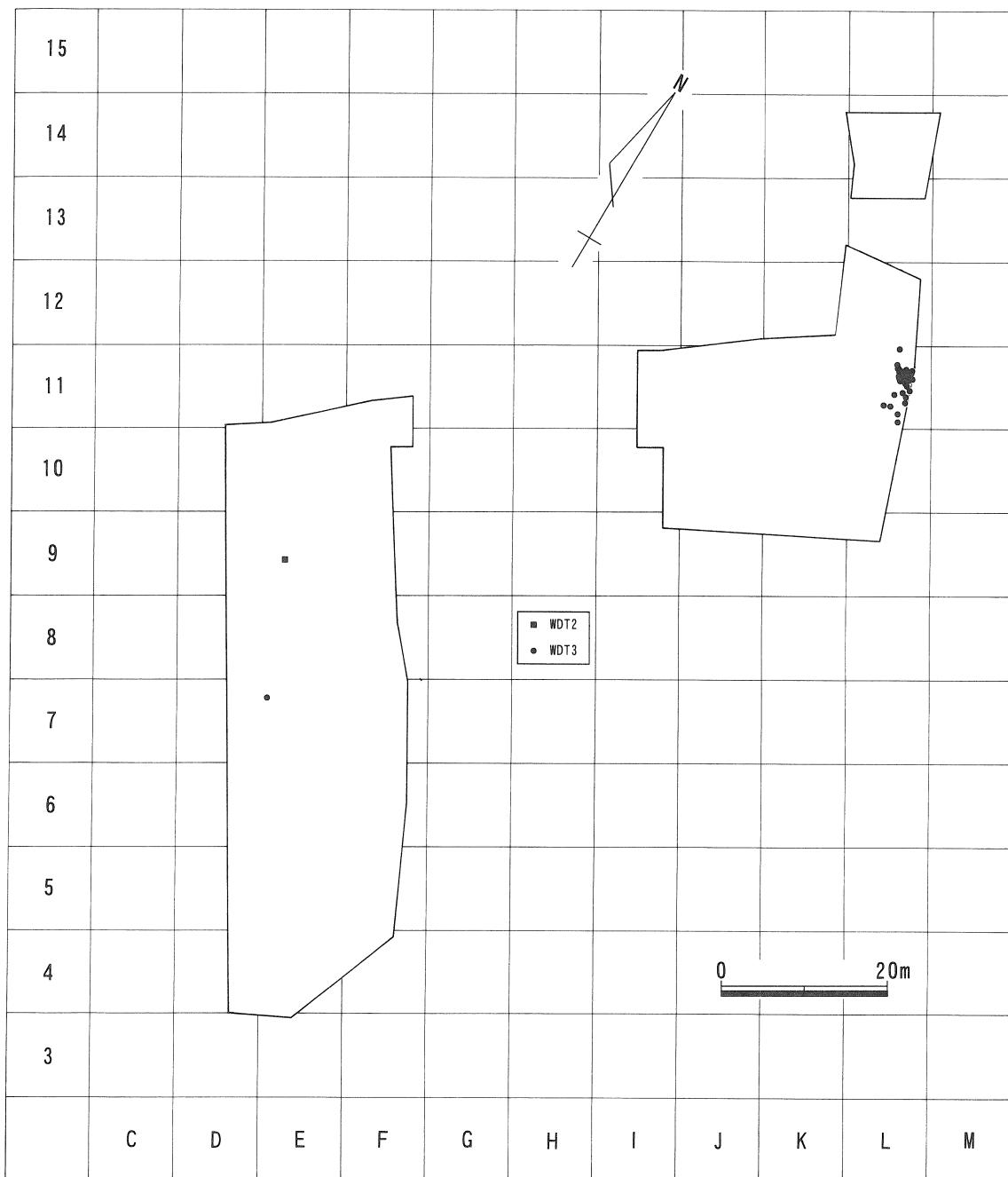


第13図 休場層個体別資料分布図（蓼科系）

はTTS 1とTTS 7のナイフ形石器がそれぞれ単独で出土している。なお、TTT 6は表採資料である。

### (3) 和田峠系黒耀石 (第14図)

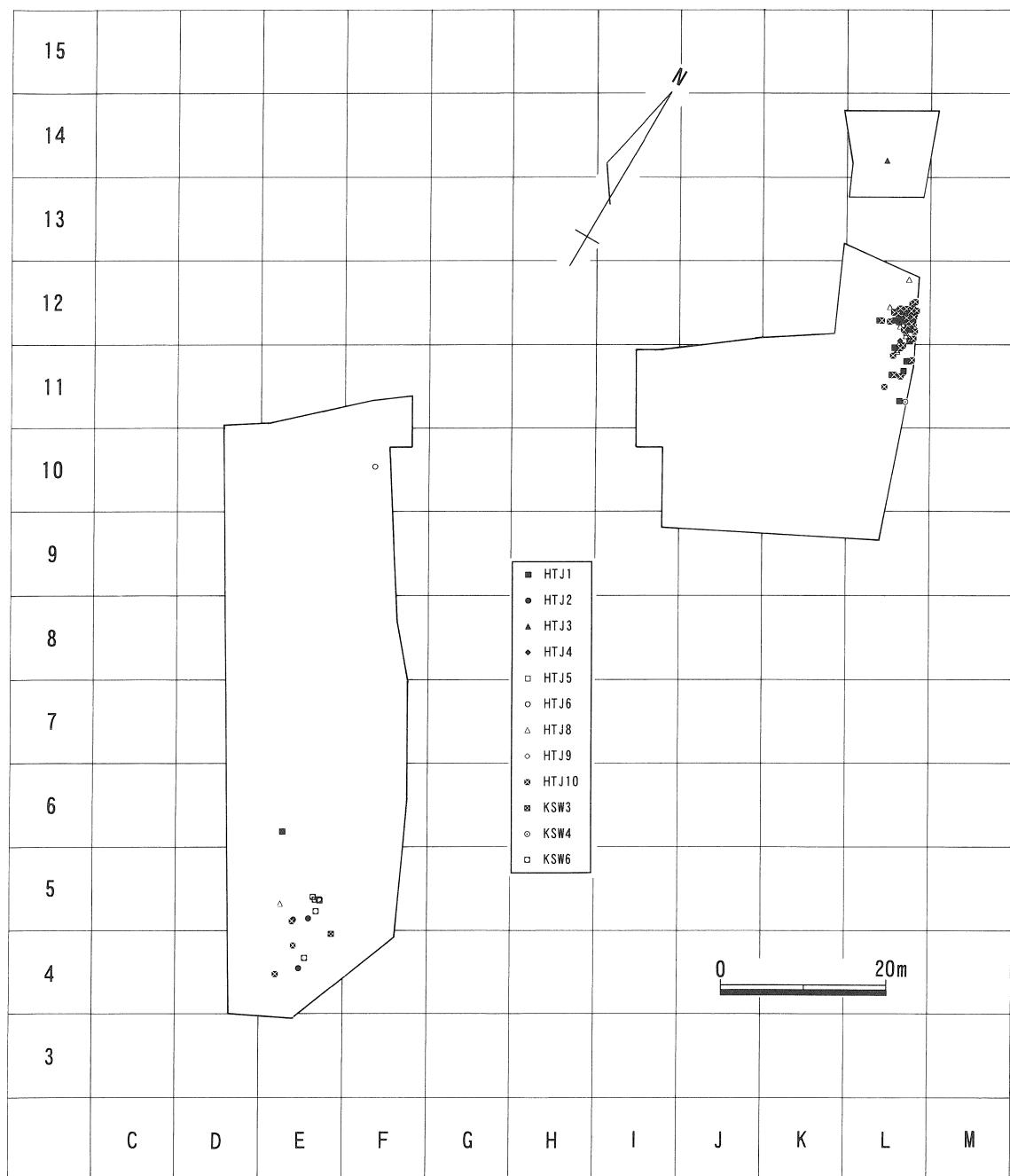
3個体に分類できる。4・5区での出土数は51点を数えるが、このうちWDT 1とWDT 2はそれぞれ単独で出土したナイフ形石器である。残るWDT 3 (WAD 8) はL11グリッドに集中して石器ブロックを形成し、4区E7グリッドにも拡散して分布する。1区L11グリッドで1点のみ出土したWAD 8もこの石器ブロックに含まれている。WDT 3の器種は、ナイフ形石器2点のtoolと打面調整剥片1点が見られる。なお、WDT 1は表採資料である。



第14図 休場層個体別資料分布図（和田峠系）

#### (4) 畑宿産黒耀石 (第15図)

4・5区での出土数は霧ヶ峰系に次いで多い91点を数え、10個体に分類できる。分布状況は前述の3系統の黒耀石と異なり、5区L12グリッドを中心にして、その範囲がL11グリッドにも拡がる石器ブロックを形成している。石器ブロックの組成の中心となるHTJ1、HTJ8、HTJ10が4区にも少量拡散しており、特にE4、E5グリッドに多く見られる。このグリッドに分布する畑宿産の個体のほとんどはtoolである。器種はナイフ形石器6点、削器、抉入削器、楔形石器各1点のtoolと、加工痕のある剥片2点が見られ、このうちナイフ形石器2点は横長剥片を用いたものである。なお、HTJ7 (HAT2) の抉入削器は表採資料である。



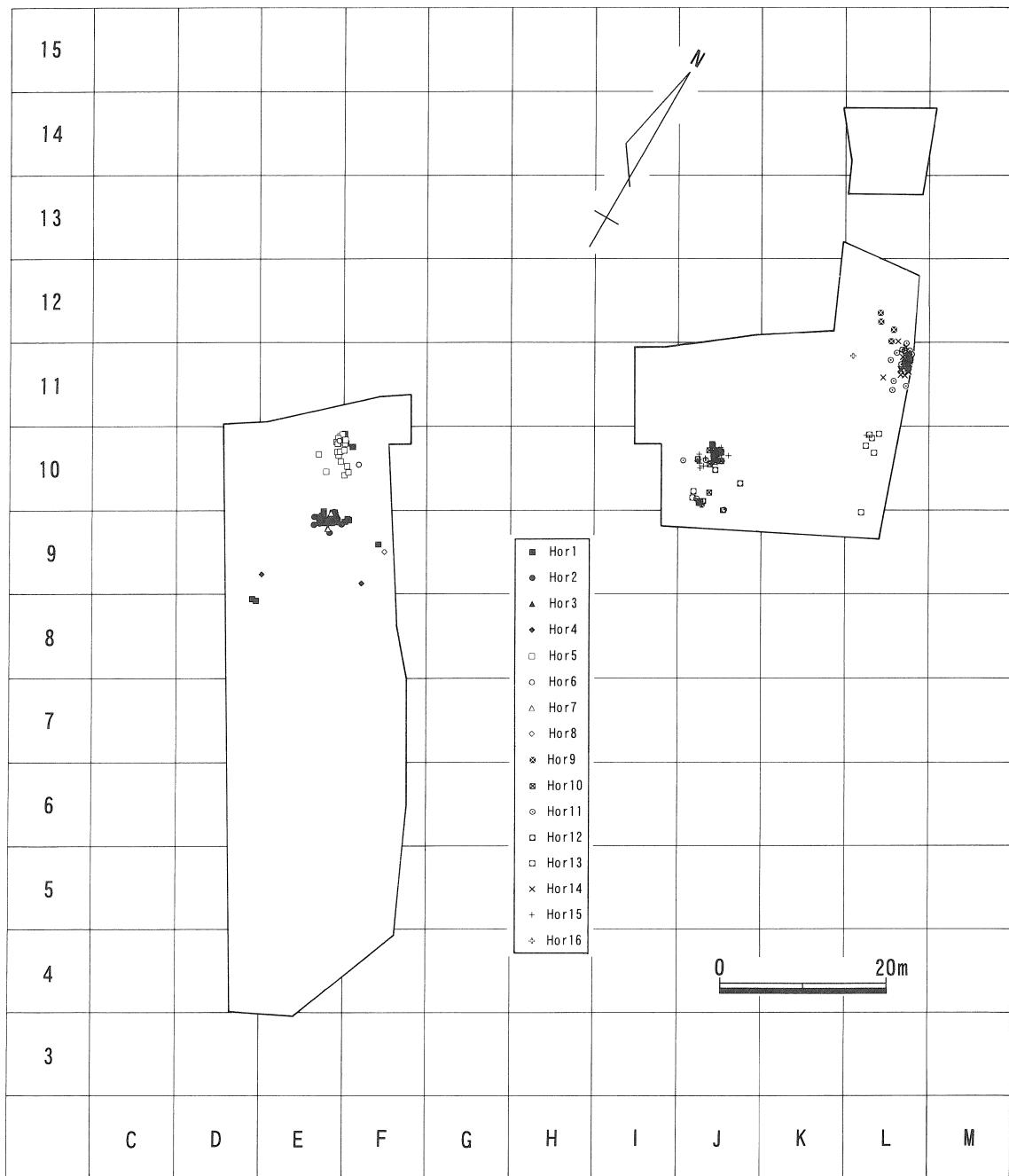
第15図 休場層個体別資料分布図（畑宿・柏峠）

### (5) 柏崎産黒耀石 (第15図)

4・5区での出土数は9点を数え、4個体に分類できる。前述の4系統の黒耀石と異なり、L11、L12グリッドでの分布は少なく、その中心は畠宿産の黒耀石で作られたtoolが多く分布するE4、E5グリッドにある。最も多い6点が出土するKSW6もこのグリッドに集中して分布している。toolは表採資料であるKSW5のナイフ形石器1点が出土している。

### (6) ホルンフェルス (第16図)

4・5区での出土数は210点を数え、個体別資料の総点数に対する比率は約20%を占める。16個体に分類でき、4区はE9グリッド北東部、E10グリッド北東部に集中して、5区はJ10グリッド北半部と同南半部、L10グリッド北西部、L11グリッドに集中して分布し、それぞれ石器ブロックを形成している。

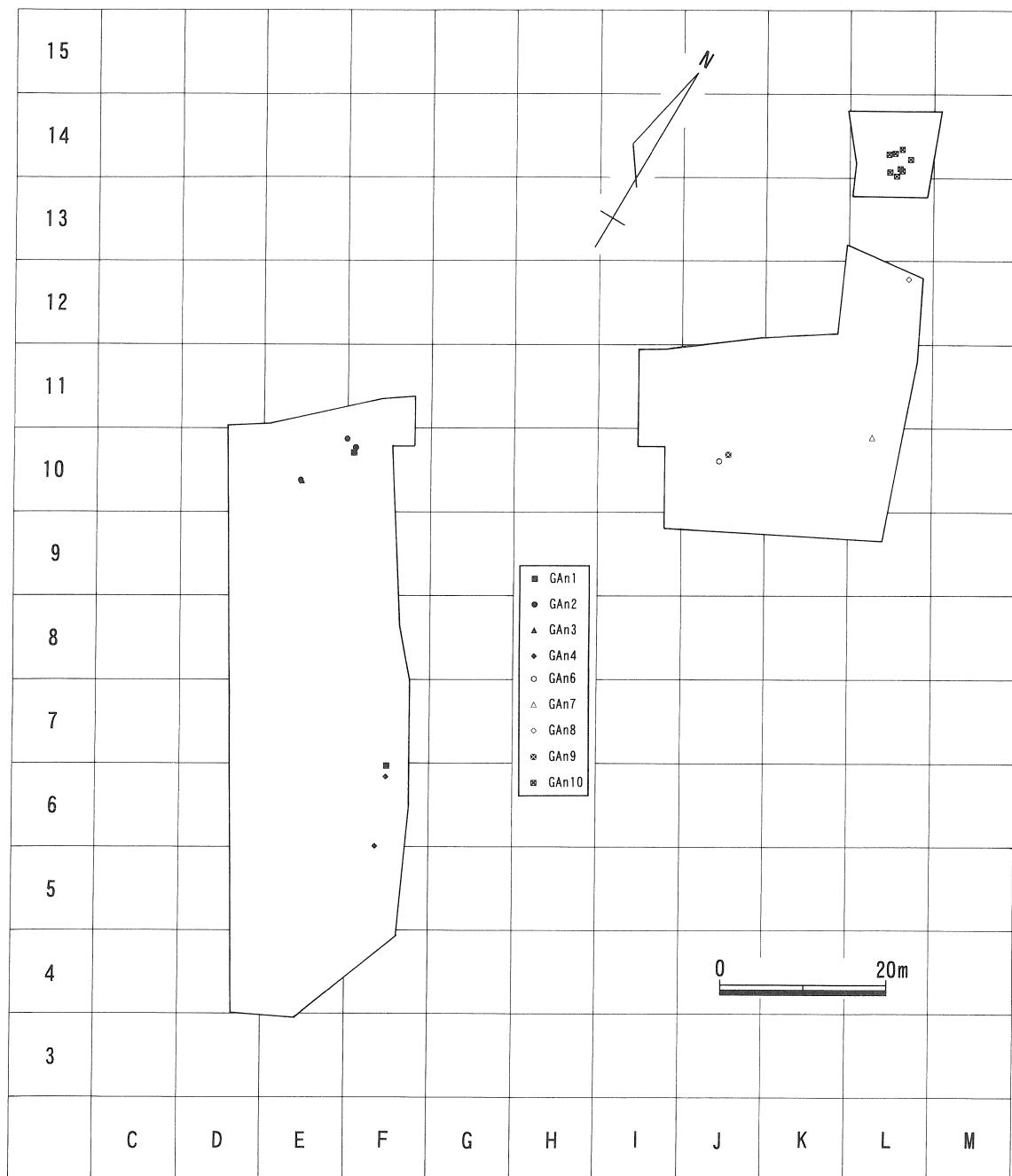


第16図 休場層個体別資料分布図（ホルンフェルス）

分布形態は、個体数の少ないものを除くと、Hor 9、Hor11などのように複数の石器ブロックにまたがって分布するもの、Hor 1、Hor13、Hor15などのように特定の石器ブロックの組成の中心となるが、一部他の石器ブロックにも拡散するもの、Hor 2、Hor 5、Hor14などのように特定の石器ブロックのみ分布するものの3形態に分類できるが、分布範囲は比較的狭い。toolはナイフ形石器3点、この他石核4点が見られ、toolの比率は黒耀石やガラス質黑色安山岩に比して低い数値を示している。

#### (7) ガラス質黑色安山岩 (第17図)

10個体に分類できる。総点数は24点と少なく、各個体別の出土数もGAn10以外はすべて4個以下である。GAn10がL14グリッドに集中して分布し、石器ブロックを形成している他は、調査区全体に散漫に分布する。同じ石器ブロック内に同一の個体を数点含む形で分布するものが多く、個体の分布範囲は霧ヶ峰系

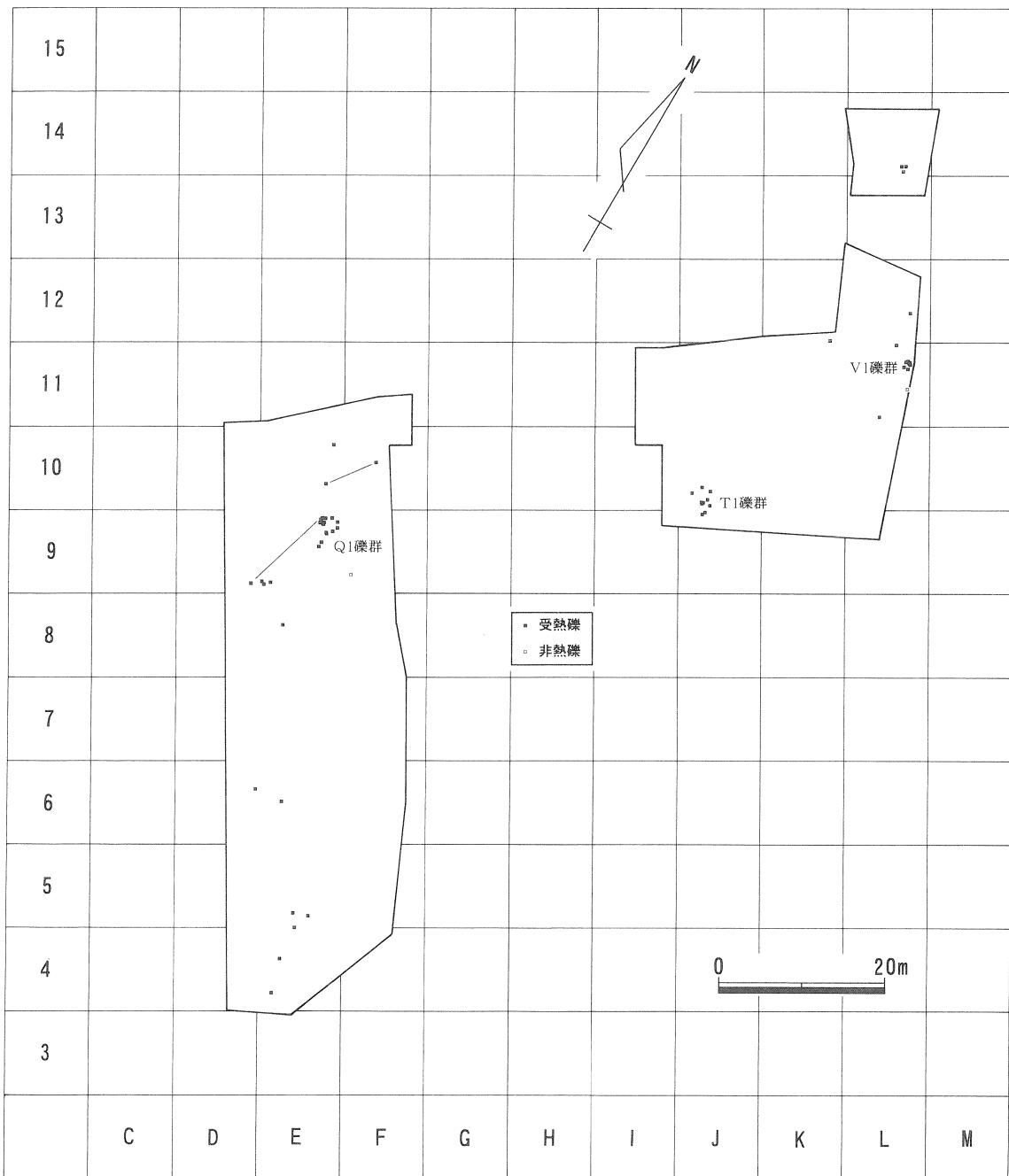


第17図 休場層個体別資料分布図（ガラス質黑色安山岩）

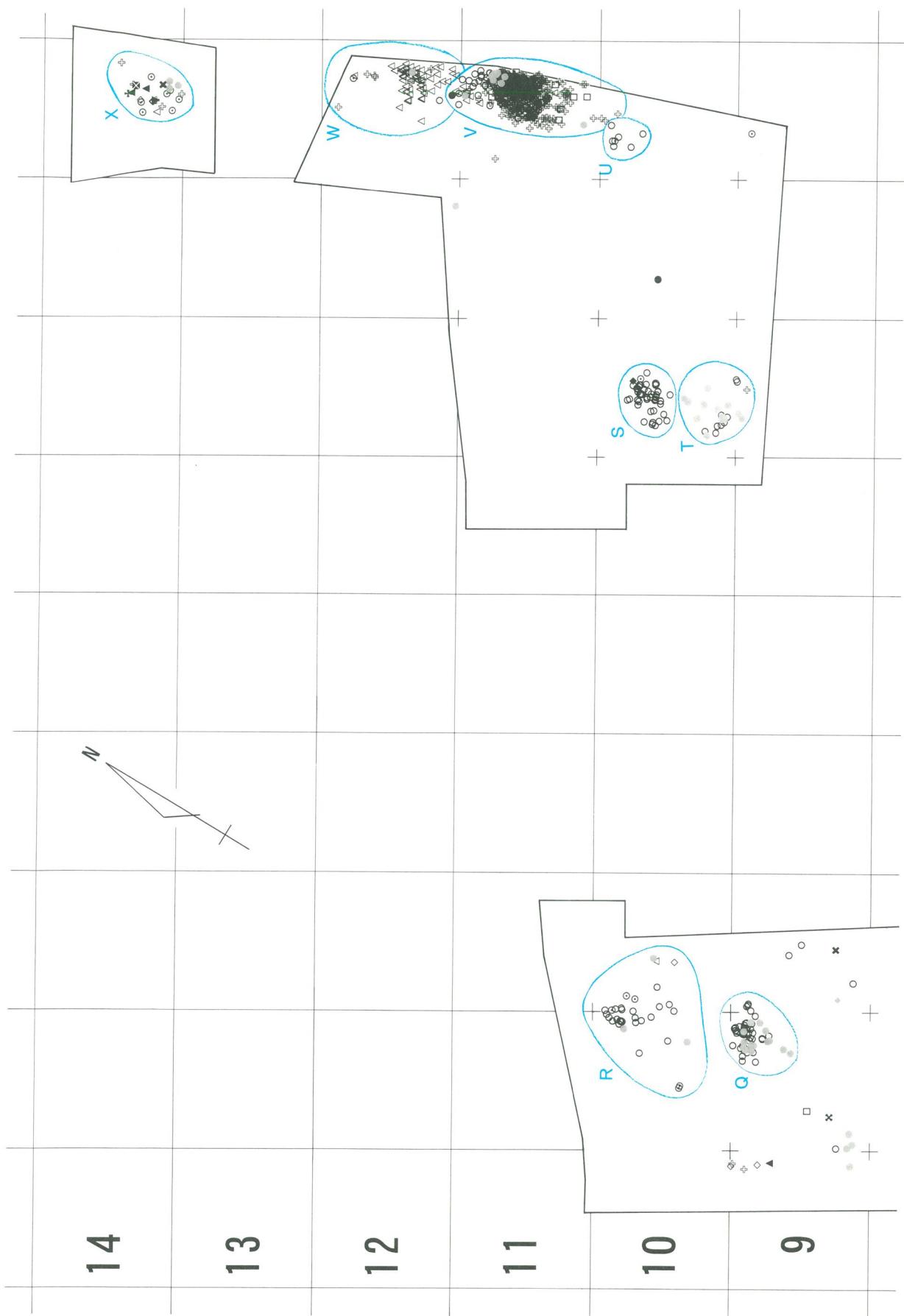
の黒耀石やホルンフェルスと同様比較的狭い。toolは楔形石器1点、この他使用痕のある剥片1点が見られる。なお、GAN 5は表採資料である。

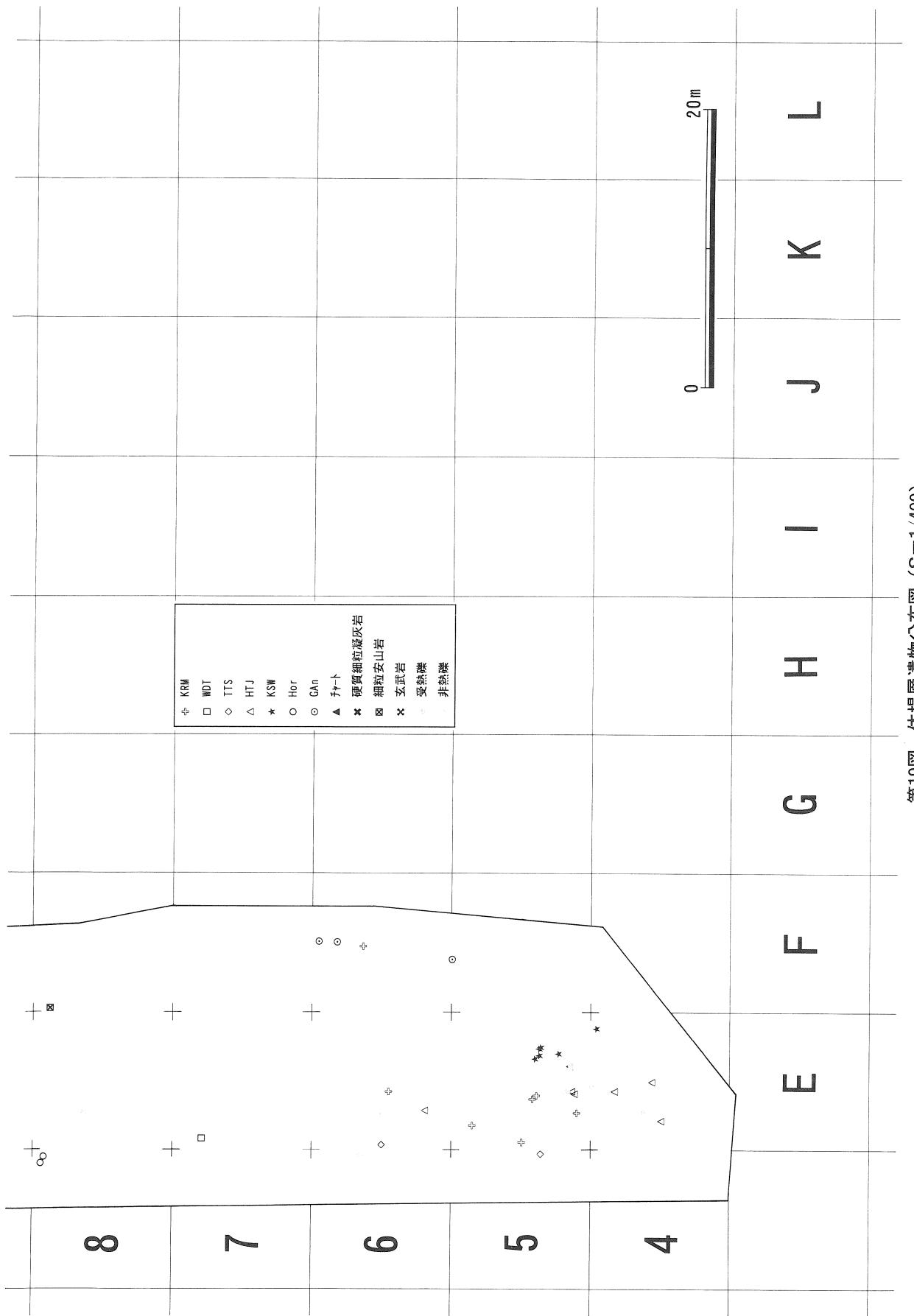
#### (8) 磴 (第18図)

休場層においては60点の磺が出土した。内訳は受熱磺58点、非熱磺2点と受熱磺の比率が高い。調査区全体に分布し、中には石器ブロックを伴う磺群を形成するものも見られる。4・5区ではQ1磺群、T1磺群、V1磺群の3ヶ所が認められる。出土した磺のうち34点が12点の同一個体に分類され、接合関係の認められる個体も存在する。



第18図 休場層磺分布図





第19図 休場層遺物分布図 (S=1/400)

### 3 遺物集中地点

遺物は4区北東隅と5区南西隅、5区東側に集中して出土した。しかし、5区については休場層が削平されていた部分も多く（第9図アミ掛け部）、実際はJ11、K11グリッドにも遺物が分布していたものと考えられる。

調査区全域は8ヶ所の石器ブロックとして捉えることができた。これらの石器ブロックは、全体に散漫な分布を示すもの、中心に向かって密になる求心的な分布を示すもの、複数の種類の石材で構成され、石材によるブロックの細分が可能なもの、同一種類の石材で構成されるもの、礫群を内在するものなどの形態が認められる。石器ブロックを構成する石材は、4区北西隅と5区南西隅はホルンフェルス中心、5区東側は霧ヶ峰系、和田峠系、畠宿産の黒耀石とホルンフェルスが混在する傾向が見られる。

ここでは、これら8ヶ所の石器ブロックを1・2区のA～Pブロックと同時存在していたものと仮定し、Q～Xブロックと呼称する。

#### （1） Qブロック（第20・21図）

37点の石器で構成され、Q1礫群を伴う。分布の中心はE9グリッド北東部にあり、東西約3.3m、南北約4.5mの範囲に密な分布を示すブロックである。石器石材はすべてホルンフェルスで、5個体に分類することができる。個体別の内訳はHor1とHor2が各40%を占め、このブロックの組成の主体を成している。器種はHor4の石核（56）と、Hor7の剥片2点から成る接合資料（65）を除いてすべて剥片またはチップである。

Q1礫群はすべて受熱礫で構成される。16点中11点の礫が5点の同一個体に分類されるが、いずれも拳大程度の小礫である。

表10 Qブロック石器組成表

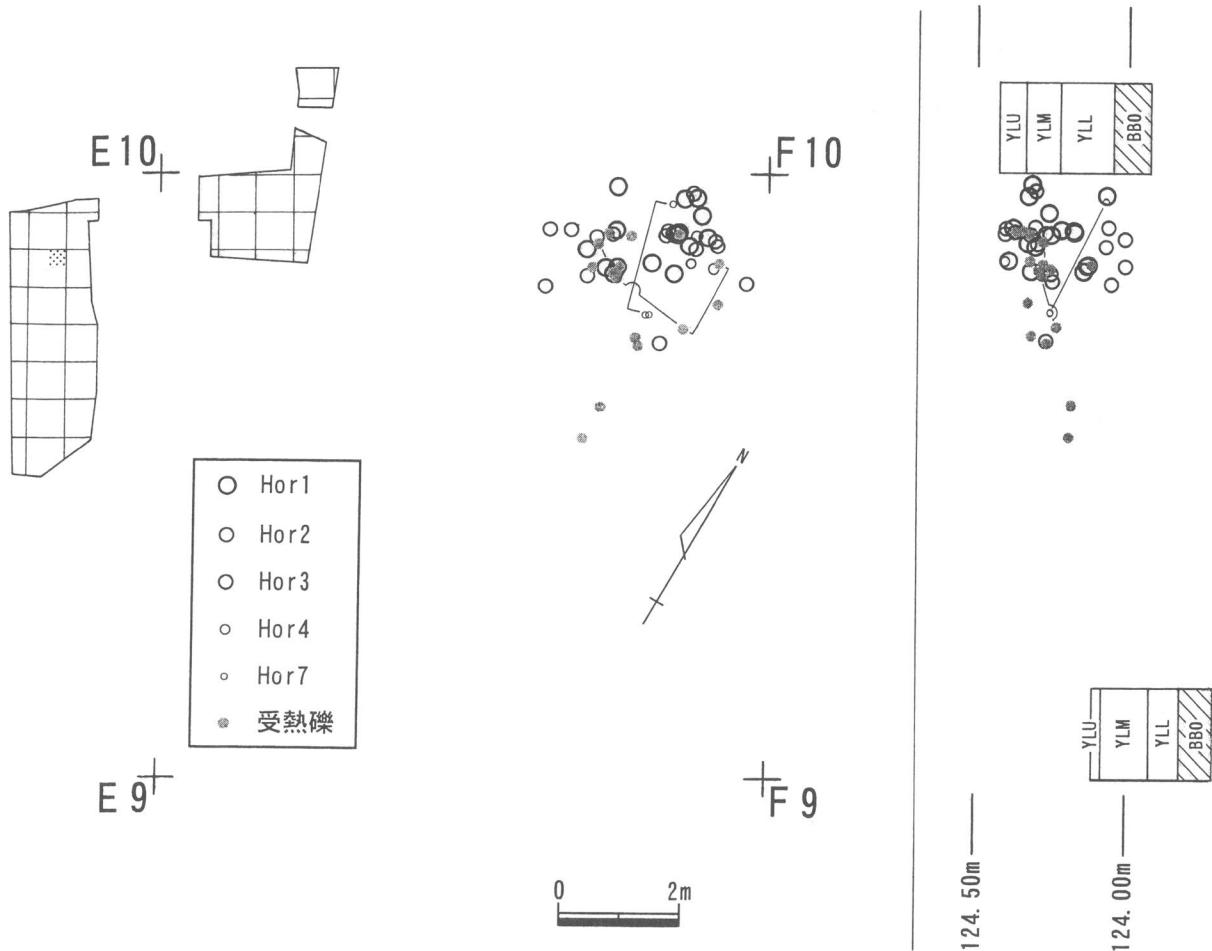
	ホルンフェルス					合計
	Hor1	Hor2	Hor3	Hor4	Hor7	
石核				1	1	2
剥片・チップ	17	14	2		2	35
合計	17	14	2	1	3	37

#### （2） Rブロック（第22・23図）

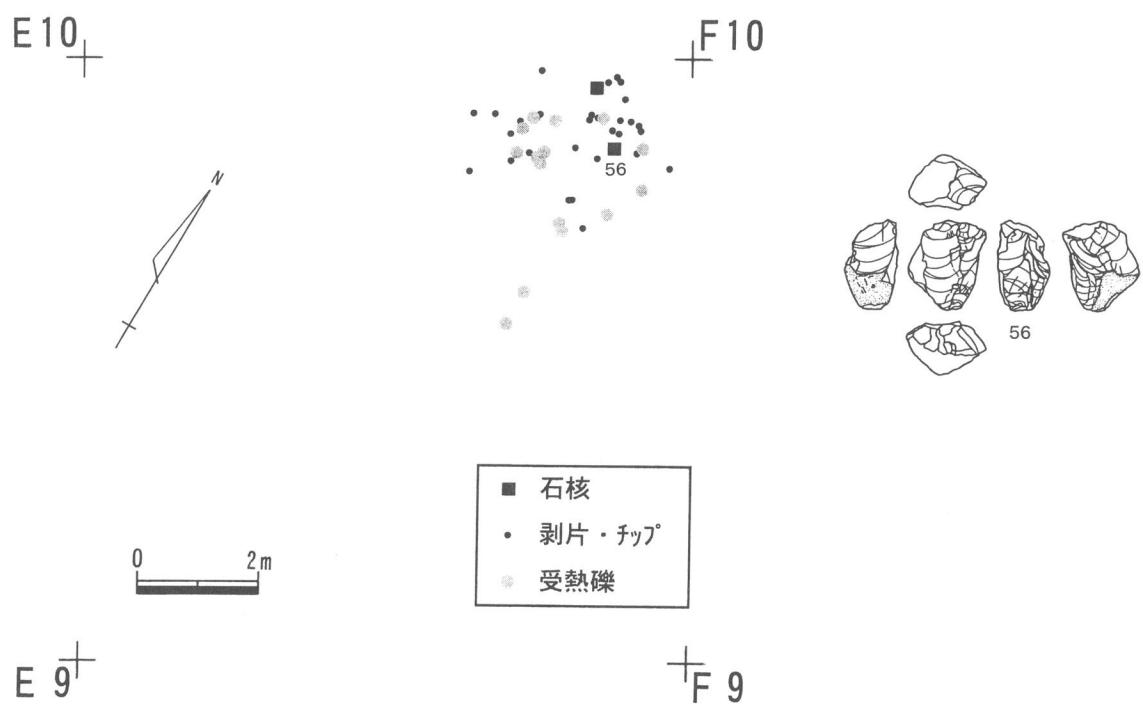
32点の石器と3点の礫で構成される。分布の中心はF11グリッド杭の南側にあり、東西約8.6m、南北約6mの範囲に、北側に向かって求心的な分布を示すブロックである。ブロック中央部に焼土が存在するが、焼土底面のレベルから考えて、このブロックより後出のものであると推定される。石器石材の内訳はホルンフェルスが全体の80%を占め、蓼科系、畠宿産の黒耀石とガラス質黒色安山岩が含まれる。個体別の内訳は、Hor5が全体の65%を占め、このブロックの組成の主体を成している。器種はHor1の石材を用いたナイフ形石器（10）とナイフ形石器と推定される剥片（36）、HTJ6の楔形石器（47）の3点が出土した他はすべて剥片またはチップである。ホルンフェルス製のtoolの石材はすべて南側に隣接するQブロックの組成の主体となるHor1である。礫は拳大の受熱礫が散漫に分布し、3点中2点の礫に接合関係が認められる。

表11 Rブロック石器組成表

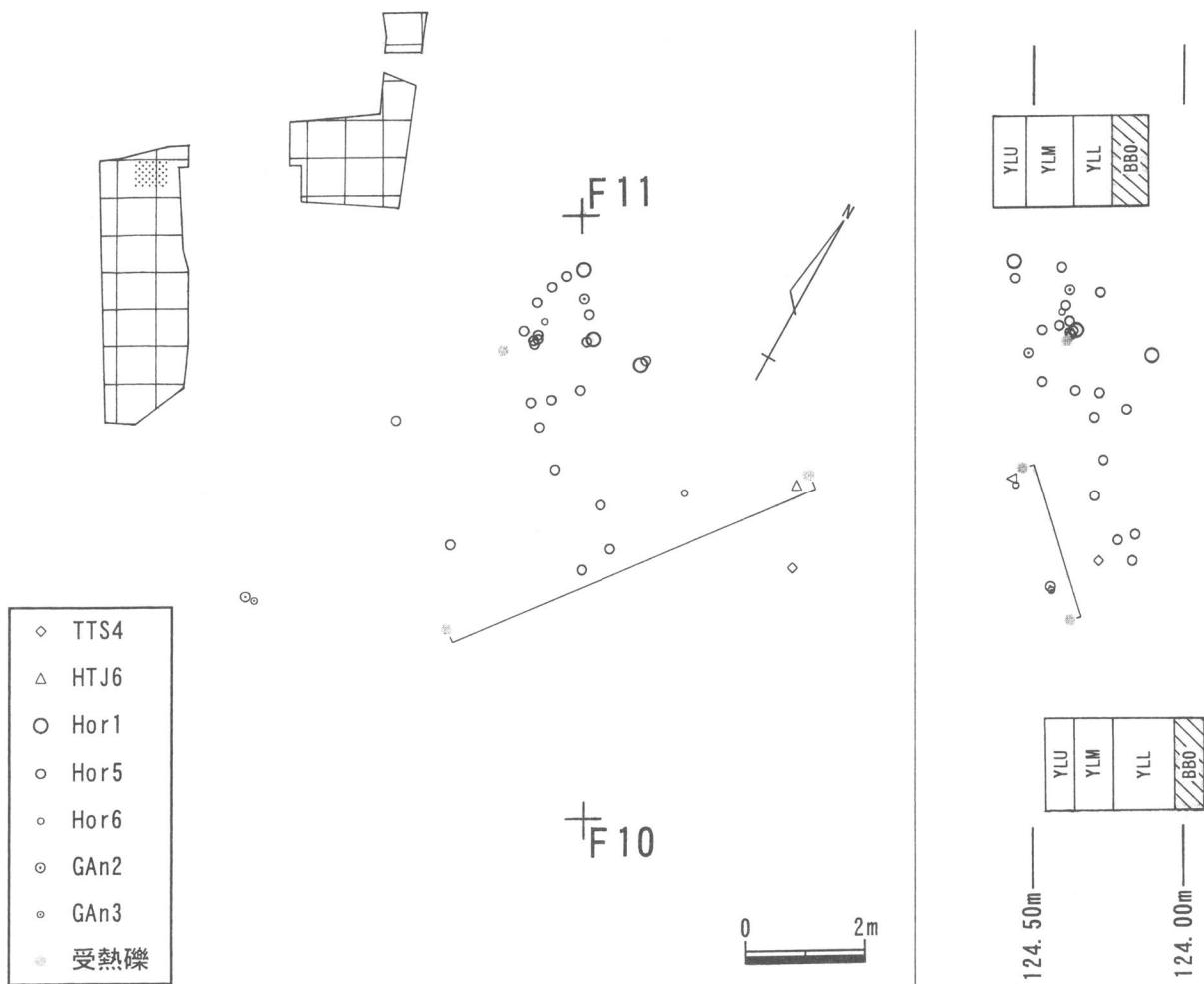
	黒耀石		ホルンフェルス			ガラス質黒色安山岩		合計
	TTS4	HTJ6	Hor1	Hor5	Hor6	GAn2	GAn3	
ナイフ形石器			2					2
楔形石器		1						1
剥片・チップ	1		1	21	2	3	1	29
合計	1	1	3	21	2	3	1	32



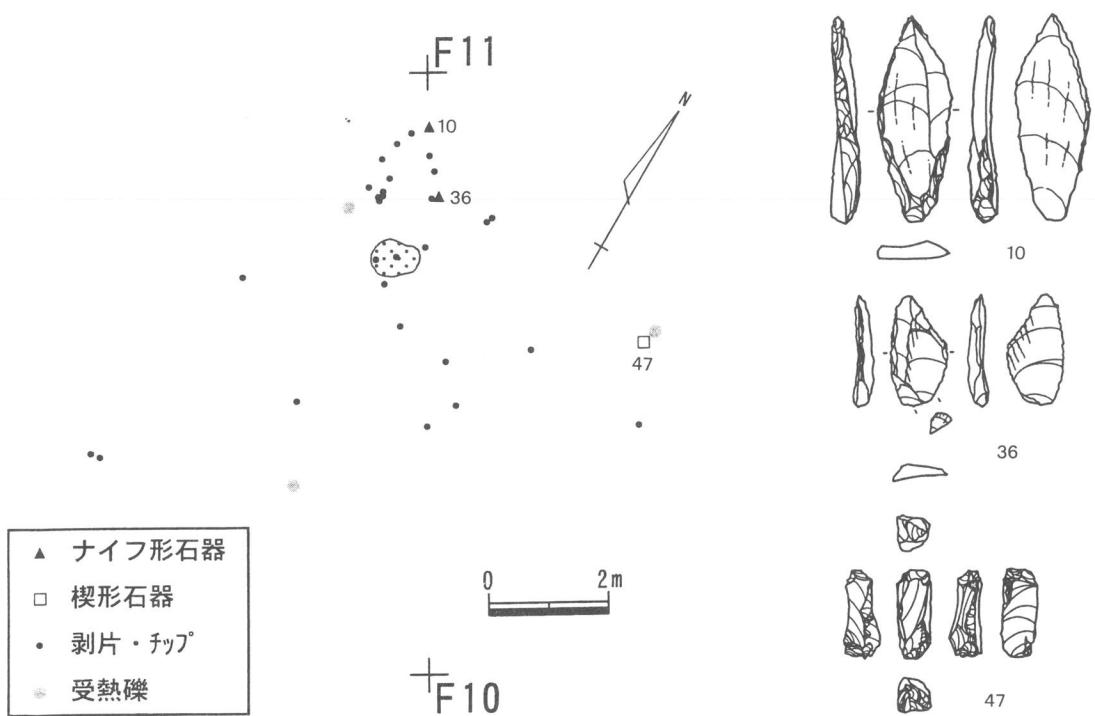
第20図 Qブロック個体別分布図 ( $S=1/120$ )



第21図 Qブロック器種別分布図 ( $S=1/120$ )



第22図 R ブロック個体別分布図 (S=1/120)



第23図 R ブロック器種別分布図 (S=1/120)

### (3) Sブロック (第24・25図)

52点の石器で構成される。分布の中心はJ10グリッド北部にあり、東西約5.4m、南北約3.2mの範囲に比較的密な分布を示すブロックである。石器石材の内訳はホルンフェルスが全体の95%を占める。個体別では全体の60%がHor15である。このブロックを構成するホルンフェルスは南側に隣接するTブロックを構成するものと同じ個体である。器種はガラス質黒色安山岩の石核1点が出土した他はすべて剥片またはチップである。

表12 Sブロック石器組成表

	ホルンフェルス					ガラス質黒色安山岩 GAN6	珪岩 GAN9	合計
	Hor9	Hor10	Hor11	Hor12	Hor15			
石核						1		1
剥片・チップ	1	7	6	4	32	1	1	52
合計	1	7	6	4	32	1	1	53

### (4) Tブロック (第26・27図)

15点の石器で構成され、T1礫群を伴う。分布の中心はJ10グリッド南部にあり、東西約5.4m、南北約3.8mの範囲にやや散漫な分布を示すブロックである。石器石材の内訳はホルンフェルス12点、霧ヶ峰系の黒耀石3点である。個体別の内訳はHor12が5点と最も多く、その他の個体の出土数はすべて2点以下である。このブロックを構成するHor13以外のホルンフェルスはすべて北側に隣接するSブロックを構成するものと同じ個体である。器種はHor12とHor13(54)の石核2点が出土した他はすべて剥片またはチップである。

T1礫群は9点の受熱礫で構成され、このうち6点の礫が推定で一辺約10cm以上、重量は現存で約1kgの角礫に接合する。

表13 Tブロック石器組成表

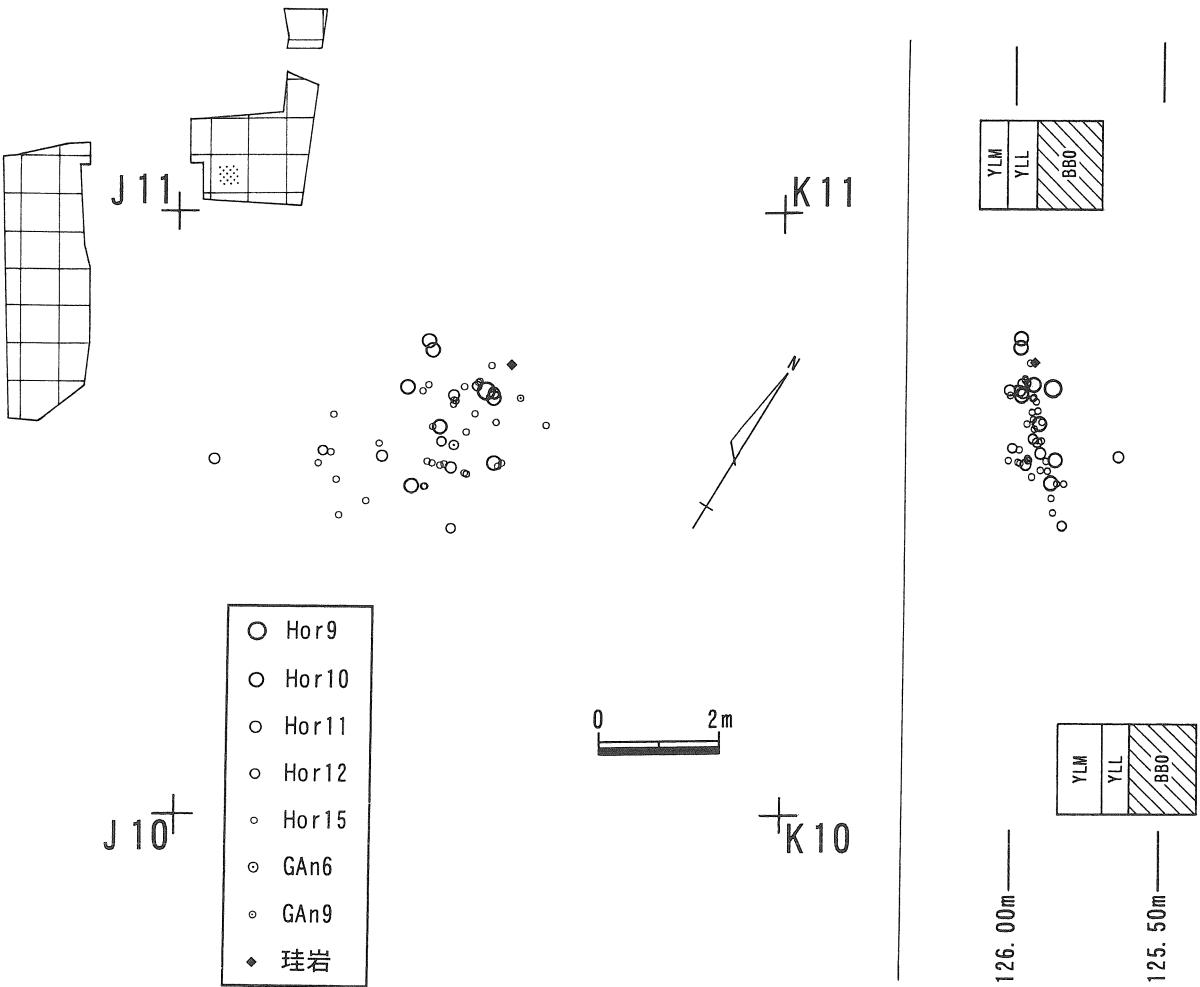
	黒耀石		ホルンフェルス						合計
	KRM4	KRM16	Hor9	Hor10	Hor11	Hor12	Hor13	Hor15	
石核						1	1		2
剥片・チップ	2	1	1	2	2	4		1	13
合計	2	1	1	2	2	5	1	1	15

### (5) Uブロック (第28・29図)

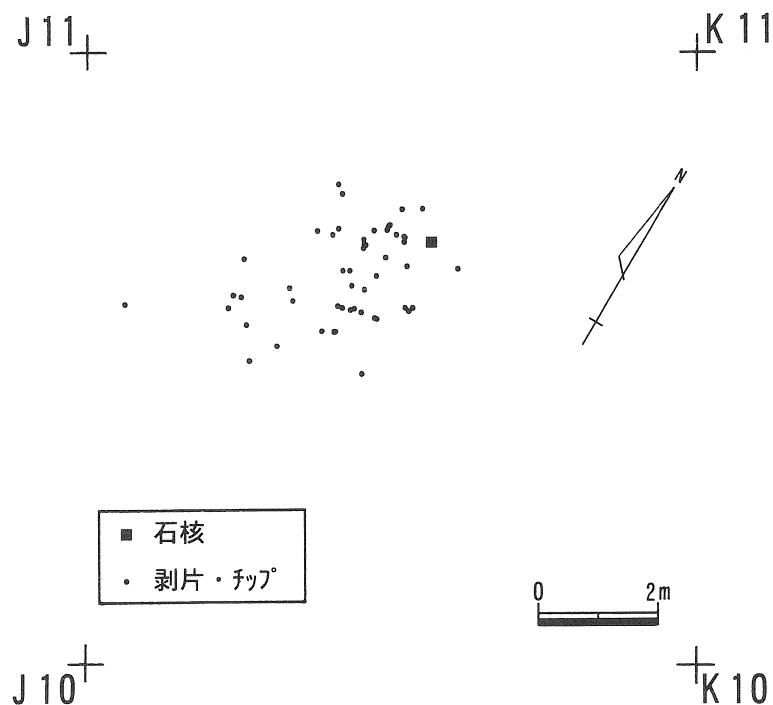
7点の石器で構成される。分布の中心はL10グリッド北西部にあり、東西約1.5m、南北約2.2mの範囲に散漫な分布を示す小規模なブロックである。石器石材と器種の内訳は、ホルンフェルスの石核1点(55)、剥片またはチップ5点、ガラス質黒色安山岩の剥片1点である。ホルンフェルスの個体別の内訳は、石核はHor16、剥片またはチップはすべてSブロックで出土した石核と同じHor13である。

表14 Uブロック石器組成表

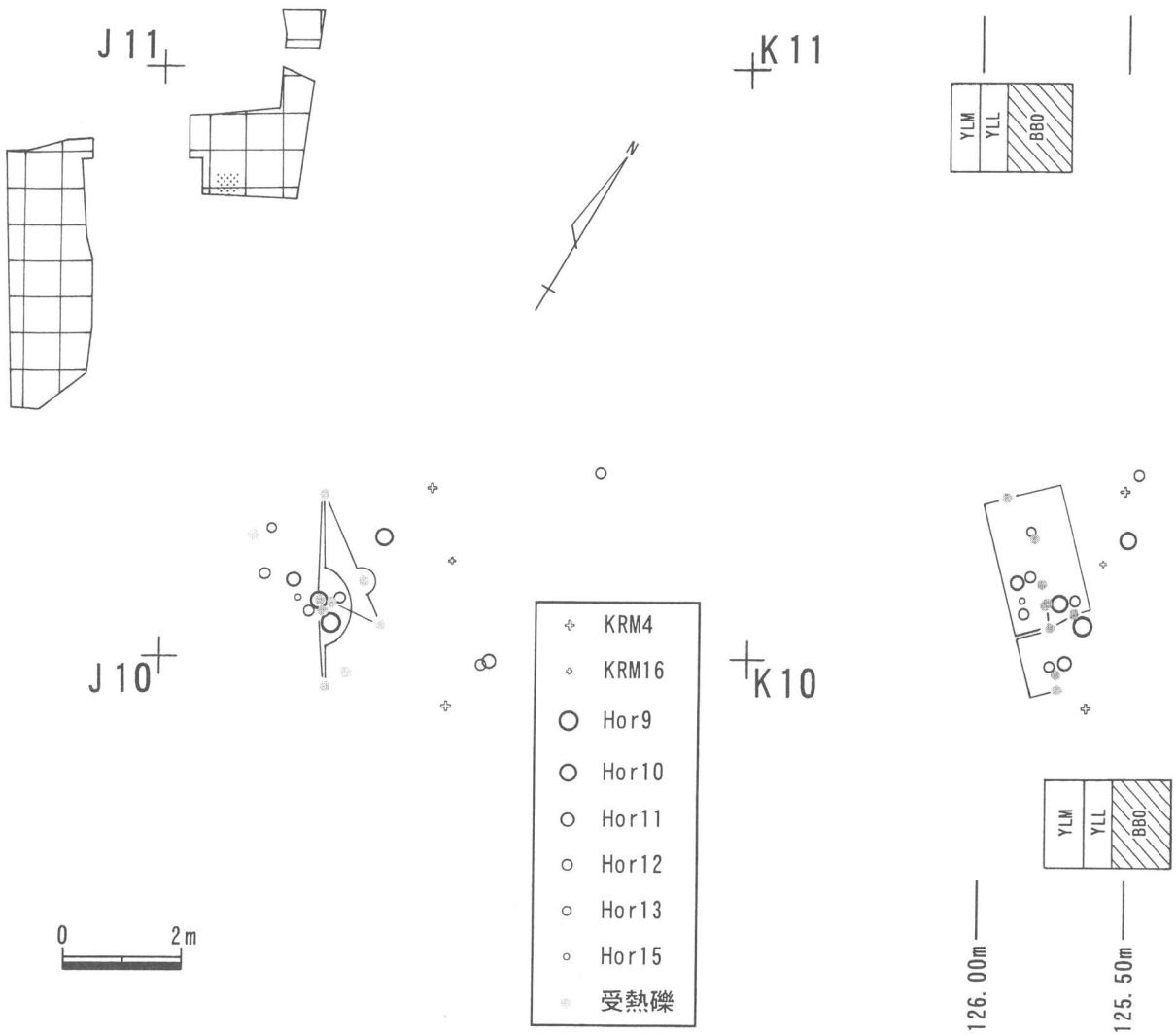
	ホルンフェルス		ガラス質黒色安山岩 GAN7	合計
	Hor13	Hor16		
石核		1		1
剥片・チップ	5		1	6
合計	5	1	1	7



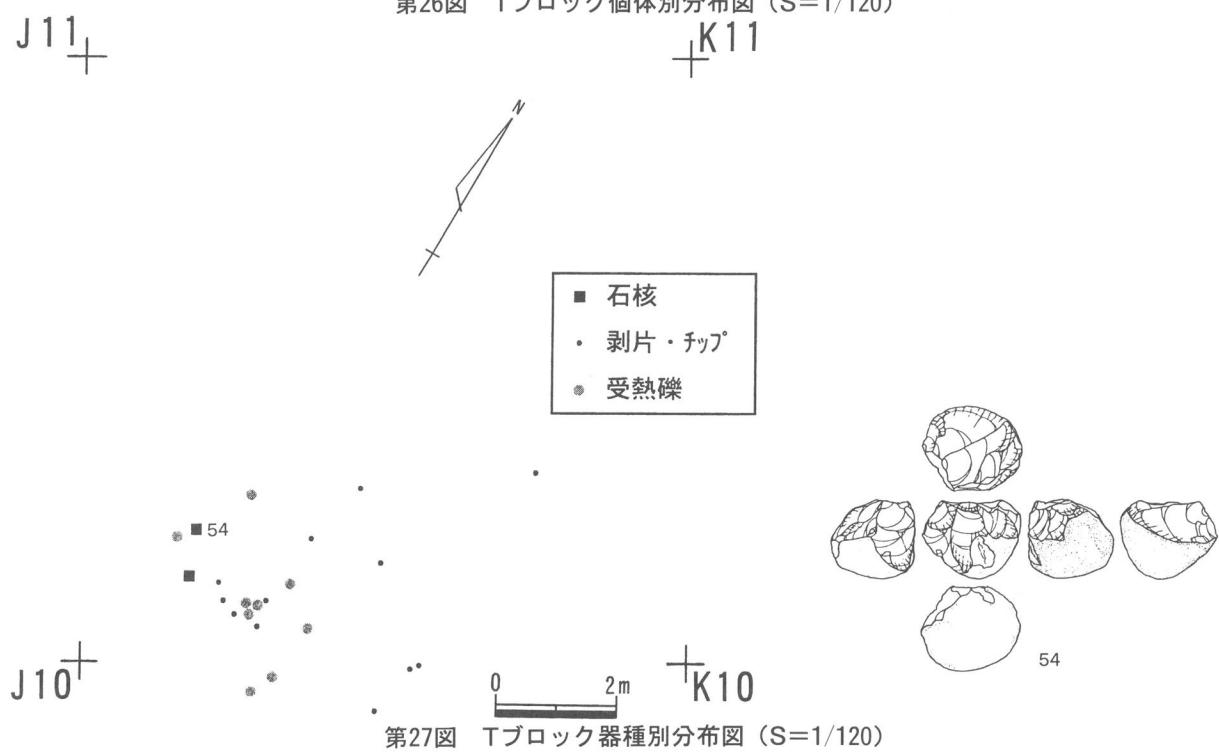
第24図 Sブロック個体別分布図 (S=1/120)



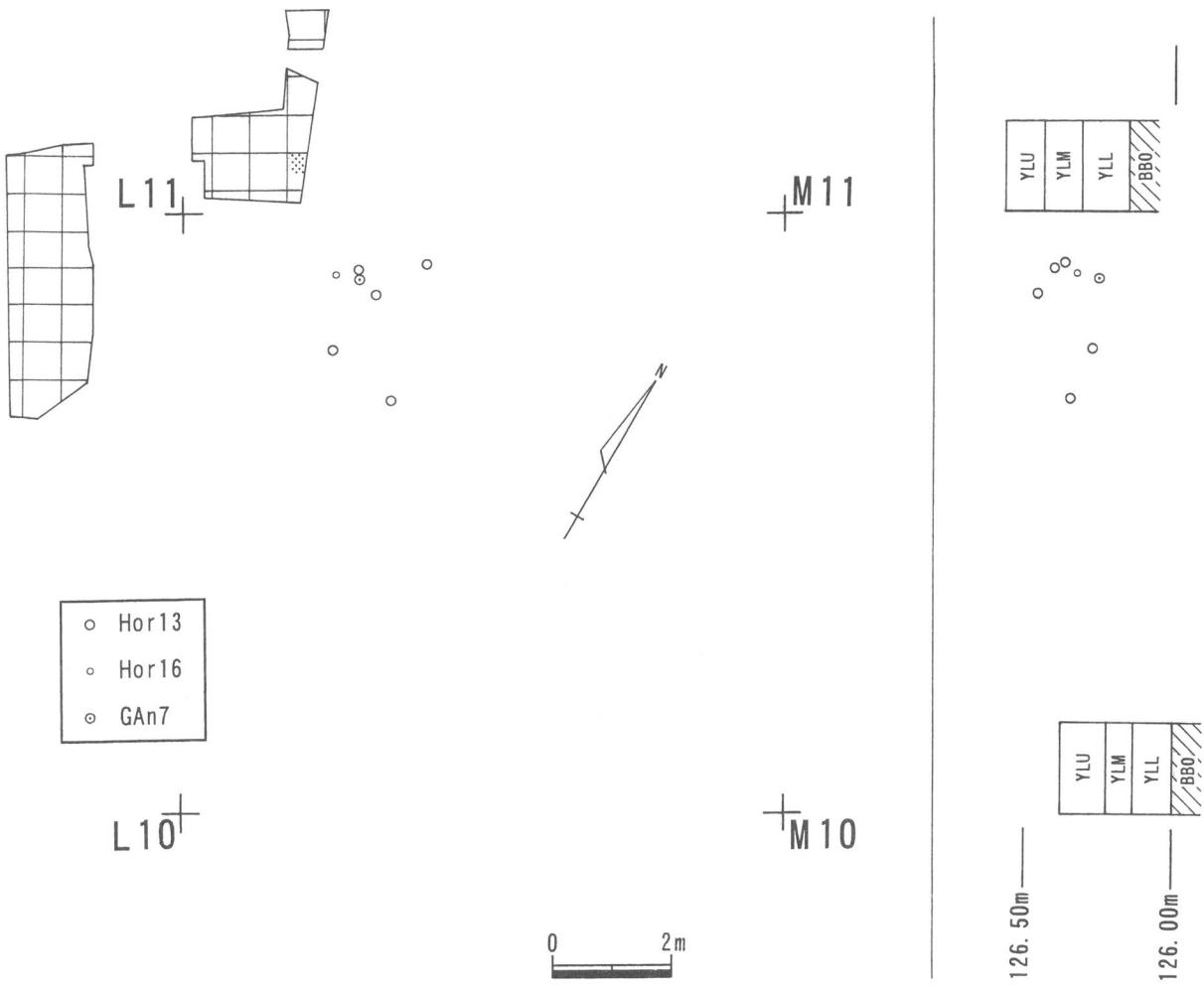
第25図 Sブロック器種別分布図 (S=1/120)



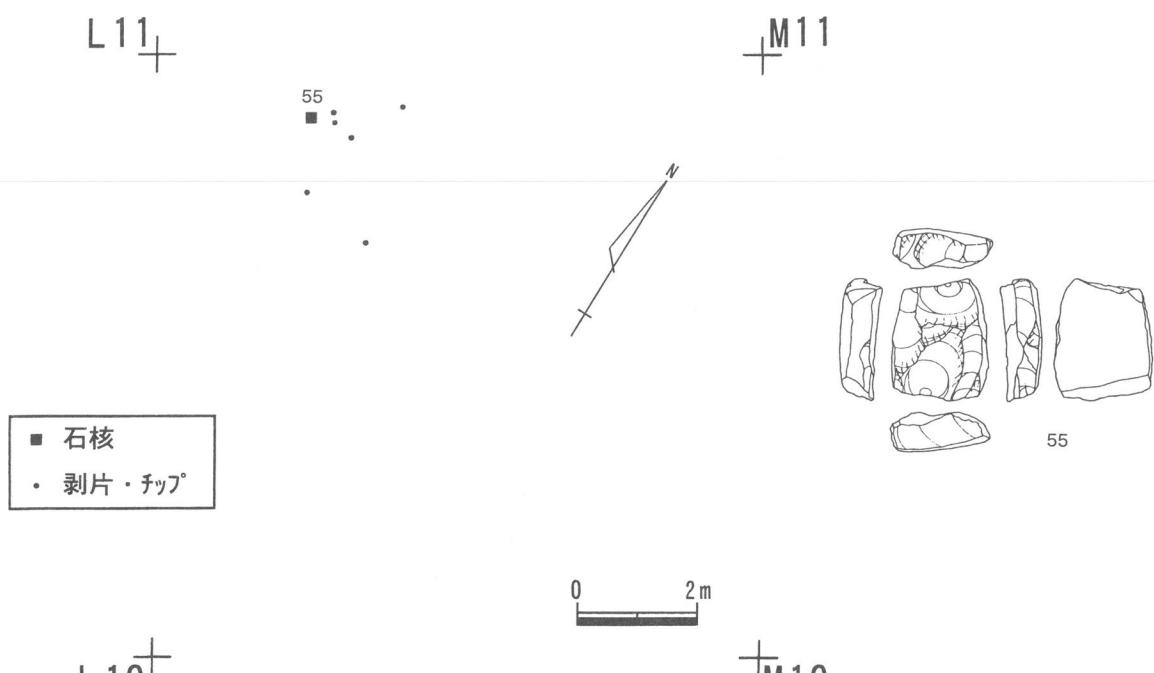
第26図 Tブロック個体別分布図 (S=1/120)



第27図 Tブロック器種別分布図 (S=1/120)



第28図 Uブロック個体別分布図 (S=1/120)



第29図 Uブロック器種別分布図 (S=1/120)

## (6) Vブロック (第30・31図)

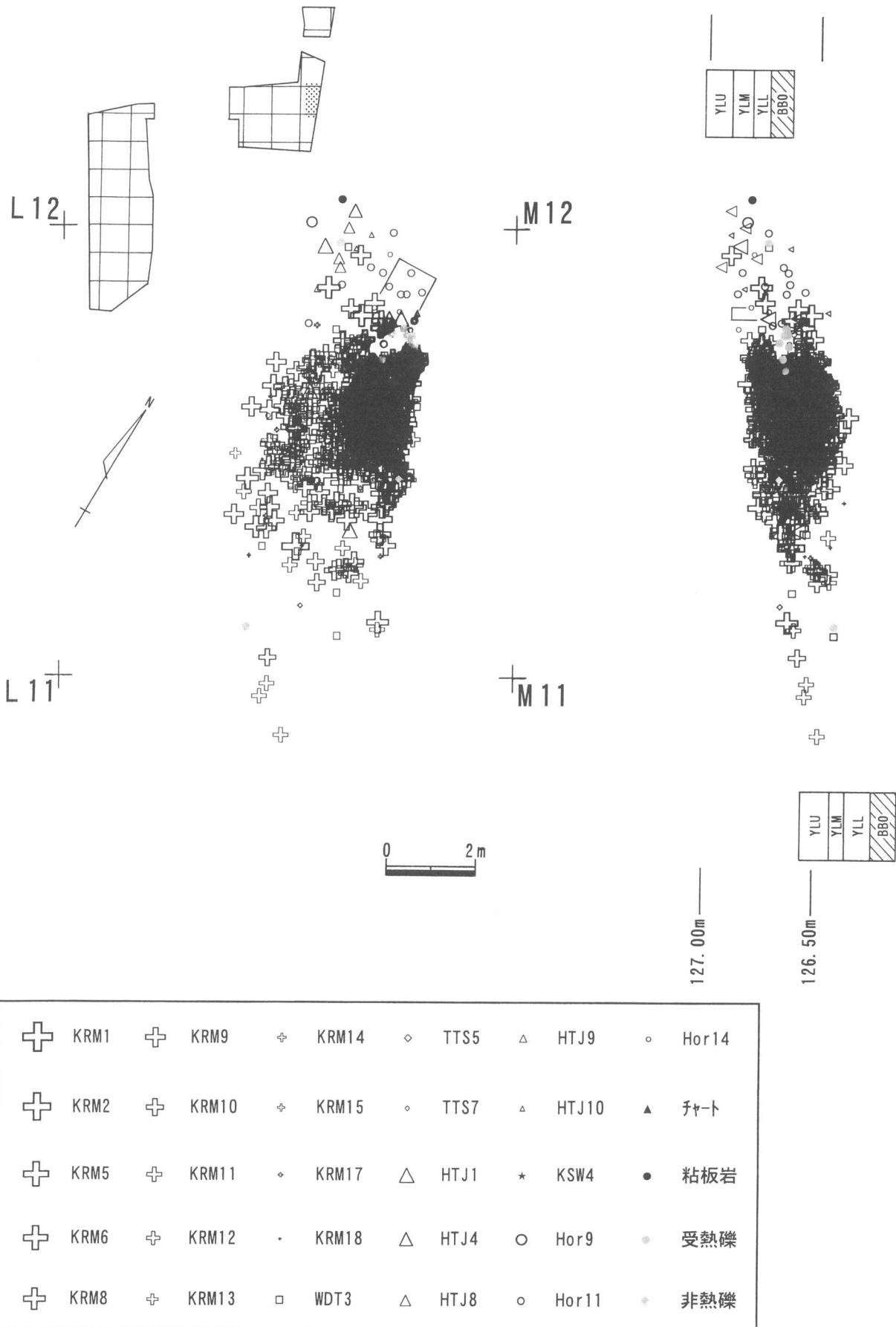
下原遺跡全調査区の中で最大の石器ブロックである。710点の石器で構成され、V1礫群を伴う。L11グリッド中央よりやや東の位置を中心とし、東西約6m、南北約11.4mの範囲にLラインとMラインの間を縦走するように分布する。石器石材の内訳は、黒耀石が全体の90%、残り7%をホルンフェルスが占める。ブロックの南側2/3は黒耀石、北側1/3はホルンフェルスが主に分布する。個体別では、KRM8、KRM9、KRM10、KRM11の4個体でブロック全体の75%を占め、WDT3とともに組成の中心を成している。石器集中域を中心に信州産の黒耀石が混在して分布しており、畠宿産の黒耀石は北側に隣接するWブロックにつながる形で分布している。ホルンフェルスはHor11とHor14が組成の中心であり、Hor14には石核と打面調整剥片各1点から成る接合資料(66)が含まれる。器種は尖頭器1点(8)、ナイフ形石器9点(11・16・17・21・24・25・26・28・29)、削器2点(40・42)のtoolの他、加工痕剥片1点(49)、打面

表15 Vブロック石器組成表

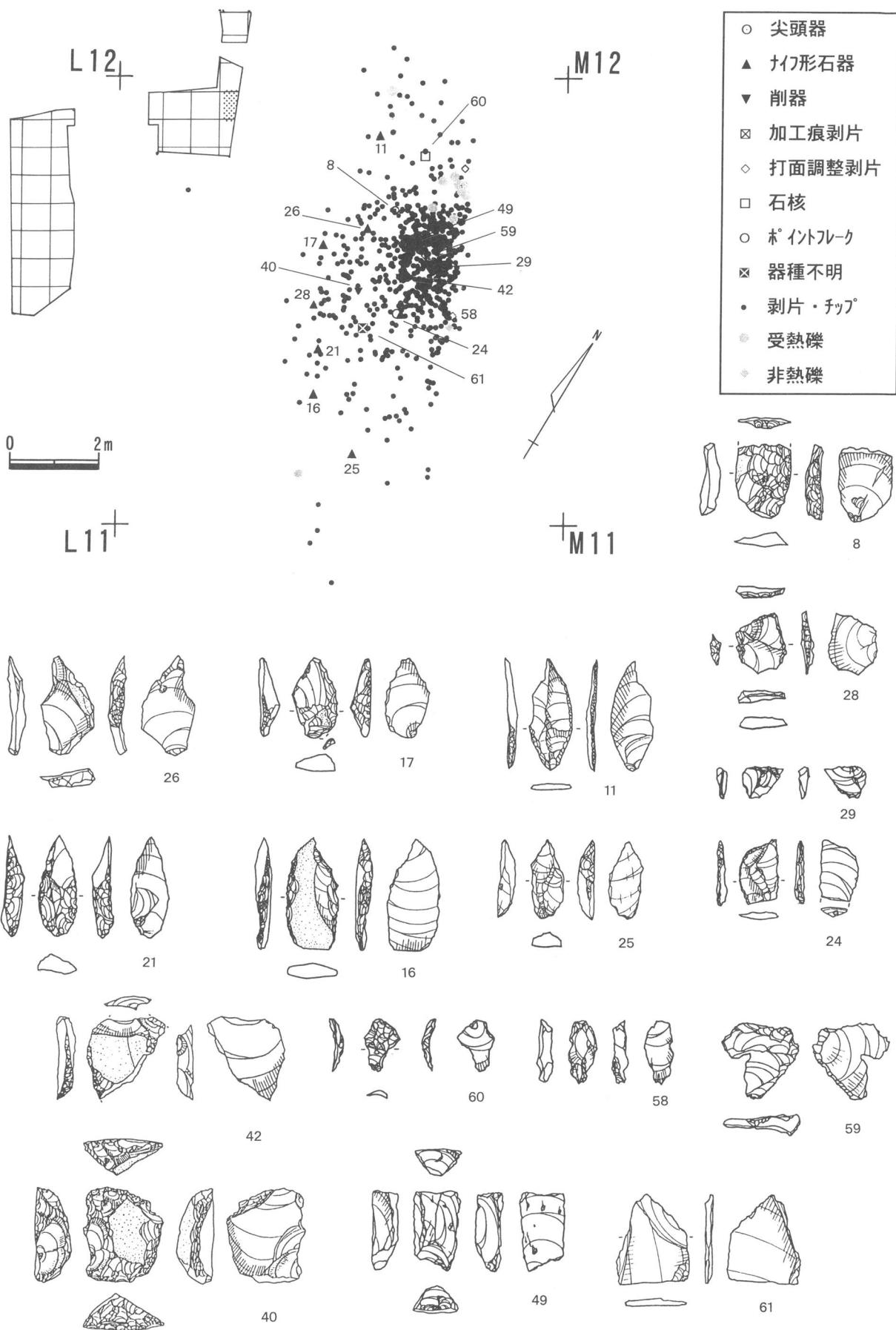
	黒耀石									
	KRM1	KRM2	KRM5	KRM6	KRM8	KRM9	KRM10	KRM11	KRM12	KRM13
尖頭器					1					
ナイフ形石器					2	1				1
削器								1		1
加工痕剥片										
石核										
打面調整剥片										
ホイントフレーカー						1				
器種不明										
剥片・チップ	2	2	1	1	53	290	84	92	8	7
合計	2	2	1	1	56	292	84	93	8	9

	黒耀石									
	KRM14	KRM15	KRM17	KRM18	TTS5	TTS7	WDT3	HTJ1	HTJ4	HTJ8
尖頭器										
ナイフ形石器			1	2		1	1			
削器										
加工痕剥片										
石核										
打面調整剥片			1				1			
ホイントフレーカー										
器種不明										
剥片・チップ	1	1	18	14	4		46	6	1	3
合計	1	1	20	16	4	1	48	6	1	3

	黒耀石			ホルンフェルス			チャート	粘板岩	合計
	HTJ9	HTJ10	KSW4	Hor9	Hor11	Hor14			
尖頭器									1
ナイフ形石器									9
削器									2
加工痕剥片	1								1
石核						1			1
打面調整剥片						1			3
ホイントフレーカー									1
器種不明								1	1
剥片・チップ		7	1	1	28	16	3	1	691
合計	1	7	1	1	28	18	3	2	710



第30図 Vブロック個体別分布図 (S=1/120)



第31図 Vブロック器種別分布図 (S=1/120)

調整剥片2点(58・59)、ポイントフレーク(60)、器種不明石器(61)が出土している。ほとんどのtoolはこの石器ブロックを組成する黒耀石で作られている。

V1礫群は受熱礫11点と非受熱礫1点で構成され、礫の大きさはいずれも拳大である。このうち受熱礫4点は同一個体で、一部接合が認められる。

#### (7) Wブロック(第32・33図)

75点の石器と1点の礫で構成される。分布の中心はL12グリッド南東部にあり、東西約4.2m、南北約8.3mの範囲に密な分布を示すブロックである。石器石材の内訳は黒耀石がブロック全体の90%を占める。個体別の内訳は畠宿産の黒耀石がブロック全体の80%を占め、この他霧ヶ峰系の黒耀石とホルンフェルスなどが少量含まれる。このブロックはVブロックとほぼ同じ個体で構成され、境界も不明瞭であるが、12ラインを境に黒耀石の分布傾向が変化するため、個別のブロックとして扱った。器種はナイフ形石器5点が出土している他はすべて剥片またはチップである。toolの石材別内訳は霧ヶ峰系黒耀石製2点(33・34)、畠宿産黒耀石製2点(30・32)、ホルンフェルス製1点(27)である。これらのtoolはすべてブロックの外縁部で出土しており、Vブロックの組成の中心となる霧ヶ峰系の黒耀石で作られたtoolはいずれもブロックの北縁部で出土している。

表16 Wブロック石器組成表

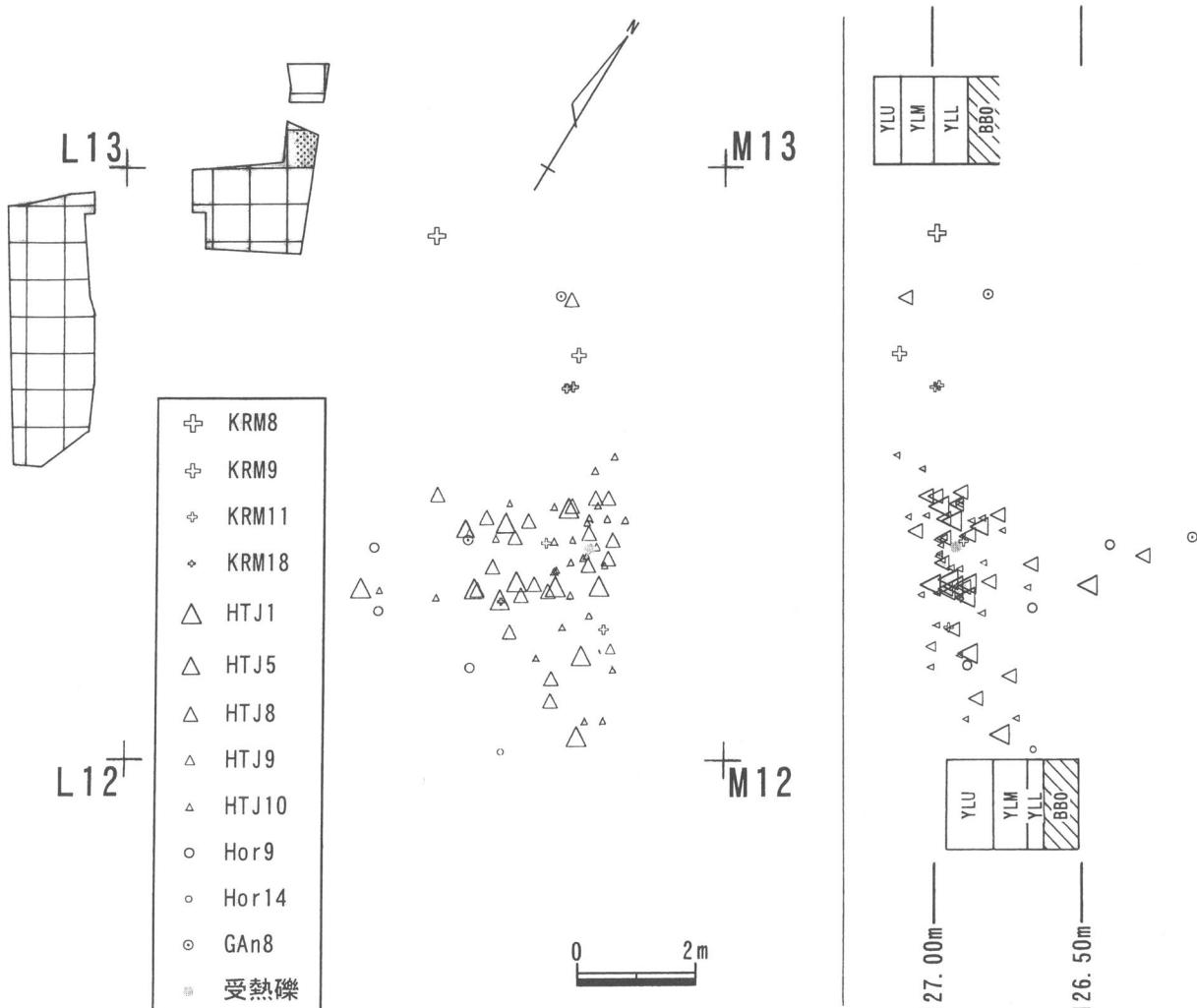
	黒耀石										ホルンフェルス	ガラス質黒色安山岩	合計
	KRM8	KRM9	KRM11	KRM18	HTJ1	HTJ5	HTJ8	HTJ9	HTJ10	Hor9			
ナイフ形石器	1		1				2			1			5
剥片・チップ <sup>o</sup>		1	3	1	10	1	18	1	30	2	1	2	70
合計	1	1	4	1	10	1	20	1	30	3	1	2	75

#### (8) Xブロック(第34・35図)

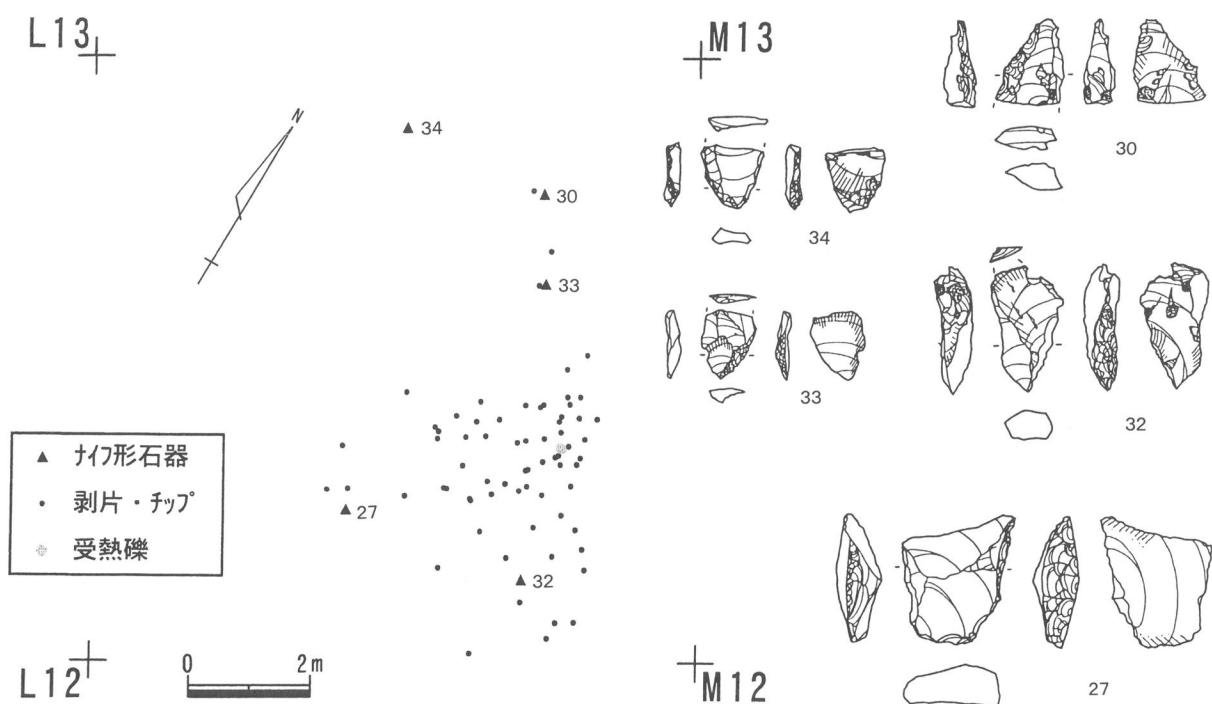
26点の石器と3点の礫で構成される。分布の中心はL14グリッド南東部にあり、東西約2.5m、南北約4.2mの範囲に密な分布を示すブロックである。石器石材の内訳は、黒耀石とガラス質黒色安山岩が組成の中心を成し、チャート、硬質頁岩、流紋岩など多種類の石材が単独または少量混じる。霧ヶ峰系の黒耀石はすべてVブロック、Wブロックの組成の中心を成す個体であり、蓼科系、畠宿産の黒耀石はすべて単独で出土している個体である。ガラス質黒色安山岩はすべて同一個体GA8であり、楔形石器1点(45)を含む。器種は硬質頁岩製の削器1点(41)、GA8と流紋岩製の楔形石器各1点(45・46)、楔形石器に転用した黒灰色チャート製の石核1点(57)、石皿状の加工礫1点(64)の他はすべて剥片またはチップである。ナイフ形石器は見られず、多種類の石材を素材としたtool、特に楔形石器が集中する。礫は拳大の受熱礫が集中して分布し、このうち2点に接合関係が認められる。

表17 Xブロック石器組成表

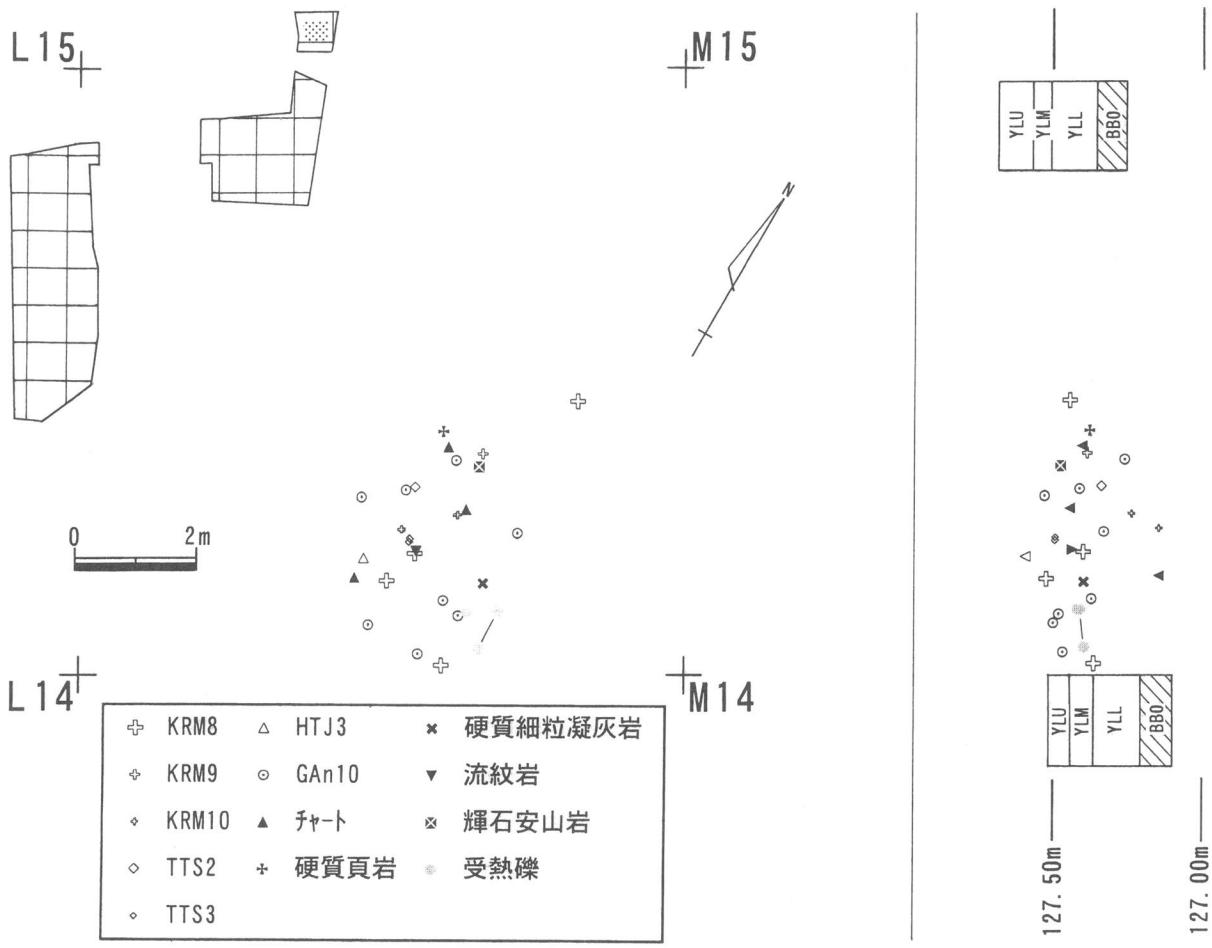
	黒耀石							ガラス質黒色安山岩	チャート	硬質頁岩	硬質細粒凝灰岩	輝石安山岩	流紋岩	合計
	KRM8	KRM9	KRM10	TTS2	TTS3	HTJ3	GA10							
削器										1				1
楔形石器							1						1	2
石核									1					1
石皿												1		1
剥片・チップ <sup>o</sup>	4	1	2	1	2	1	7	2			1			21
合計	4	1	2	1	2	1	8	3	1	1	1	1	1	26



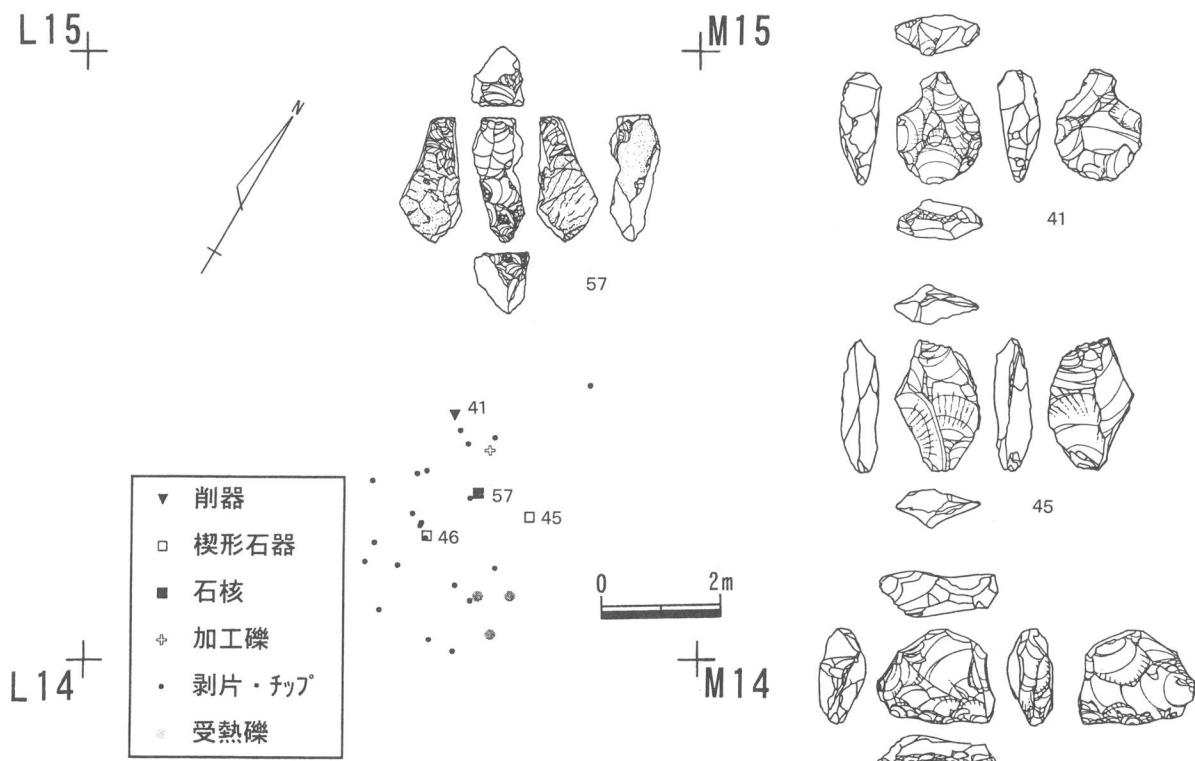
第32図 Wブロック個体別分布図 (S=1/120)



第33図 Wブロック器種別分布図 (S=1/120)



第34図 Xブロック個体別分布図 (S=1/120)



第35図 Xブロック器種別分布図 (S=1/120)

表18 ブロック別個体別資料分布表

個 体 別 番 号	ブ ロ ッ ク 外								個 体 別 番 号	ブ ロ ッ ク 外							
	Q	R	S	T	U	V	W	X		Q	R	S	T	U	V	W	X
KRM1					2				H T J 7								1
KRM2					2				1 H T J 8						3	20	1
KRM3									1 H T J 9						1	1	
KRM4				2					H T J 10						7	30	3
KRM5					1				1 K S W 1								1
KRM6					1				K S W 2								2
KRM7									1 K S W 3								1
KRM8					56	1	4	4	K S W 4							1	
KRM9					292	1	1	2	K S W 5								1
KRM10					84		2	8	K S W 6								6
KRM11					93	4		1	Hor1	17	3						14
KRM12						8			Hor2	14							2
KRM13						9			1 Hor3	2							
KRM14						1			Hor4	1							2
KRM15						1			Hor5	21							2
KRM16					1				Hor6	2							1
KRM17						20			Hor7	3							
KRM18						16	1		Hor8								1
TTS1								1	Hor9		1	1			1	3	
TTS2								1	Hor10		7	2					
TTS3								2	Hor11		6	2			28		
TTS4		1							Hor12		4	5					3
TTS5						5		2	Hor13			1	5				2
TTS6								1	Hor14						18	1	
TTS7							1		Hor15		32	1					
TTS8								1	Hor16						1		1
WDT1									1 GAn1								2
WDT2									1 GAn2		3						1
WDT3						48		1	1 GAn3		1						
H T J 1						6	10	1	1 GAn4								2
H T J 2								3	1 GAn5								1
H T J 3								1	1 GAn6		1						1
H T J 4							1		1 GAn7						1		
H T J 5							1		1 GAn8							2	
H T J 6		1							1 GAn9		1						8
									1 GAn10								

## 4 遺物

休場層から出土した石器の総点数は66点を数える。石器と石材の関係は表9に示した。

### (1) 尖頭器（第36図8）

1点が出土している。先端部は欠損している。基部は丸く、片面のみ平坦剥離調整を施している。

### (2) ナイフ形石器

29点が出土している。刃部の長さや加工部位などにより7形態に分類することができる。

#### 1類 二側縁に調整を施し、刃部が全長の1/2以上のもの（第36図9～15）

8点が該当する。基本的には縦長剥片を縦位に用いているが、14・15のように横長剥片を素材として用いたものも見られる。これら2点はいずれも畠宿産の黒耀石を使用しており、剥片の形状に応じて細部調整を施したものと考えられる。10はホルンフェルス製で風化が著しいが、基部加工を施していると考えられる。13の基部右側縁は両面からの対向調整を施していると考えられる。14の刃部は裏面からの破損を受けている。

#### 2類 二側縁に調整を施し、刃部が全長の1/2以下のもの（第36図16～17）

2点が該当する。16は縦長剥片を縦位に用いている。刃部が非常に短く、両側縁は表皮の残る剥片の形状をあまり変えずに調整を施している。打点が先端部にあり、基部はヒンジフラクチャーを生じた剥片の末端部を加工せずに用いている。17は小型の製品である。

#### 3類 1類のうち、基部加工を両面に施すもの（第36図18～20）

3点が該当する。3点とも縦長剥片を縦位に用い、打点を先端部側に置く。いずれの製品も基部は尖る。18は小型の製品である。

#### 4類 基部片面に平坦剥離を施すもの（第36図21）

1点が該当する。刃部は全長の1/2以下と短い。基部は円形を呈し、尖頭器の製作技術を意識して作られた製品であると考えられる。

#### 5類 部分的に調整を施したもの（第37図22～26）

5点が該当する。22、23は小型の縦長剥片を縦位に用いた製品で、22は左側縁の先端部と基部に、23は右側縁の先端部のみ加工が見られる。24は上部から左側縁にかけて加工が見られる。25、26は一側縁加工の製品である。25は非常に細かい基部裏面加工が見られる。

#### 6類 切出形のもの（第37図27）

1点が該当する。縦長剥片を横位に用い、両側縁に調整を施している。

#### 7類 台形を呈する小型のもの（第37図28～29）

2点が該当する。28は縦長剥片を横位に用い、打面側に調整を施している。29は左側縁下部に使用痕が見られる。

#### その他（第37図30～37）

30～35は分類不可能な欠損品を集めた。30はナイフ形石器の先端部であるが、打点の位置から考えて、削器である可能性が考えられる製品である。31は右側縁に刃部を持ち、左側縁は丁寧なプランティングを施している。32～35は基部である。34、35は両面に加工を施している。36～37はナイフ形石器に似た形状を呈するが、調整の曖昧な剥片を集めた。

表19 休場層尖頭器・ナイフ形石器計測表

図版番号	器種	層位	登録番号	石材	原産地	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
8	尖頭器	YLU	5S0353	黒耀石	KRM8	(20.3)	14.9	4.3	(1.4)	基部片面調整 先端部欠損
9	ナイフ形石器	表採	4S0002	黒耀石	WDT1	(41.5)	13.8	4.9	(2.6)	1類
10	ナイフ形石器	YLM	4S0142	ホンフェルス	Hor1	46.3	16.4	5.4	4.1	1類 基部加工あり?
11	ナイフ形石器	YLU	5S0373	黒耀石	KRM8	30.7	11.7	2.7	0.7	1類
12	ナイフ形石器	YLL	4S0046	黒耀石	TTS1	(27.6)	15.1	4.5	(1.8)	1類
13	ナイフ形石器	FB	4S0027	黒耀石	HTJ8	(27.7)	17.6	5.7	(2.5)	1類
14	ナイフ形石器	YLU直上	4S0030	黒耀石	HTJ10	32.6	(13.3)	3.9	(1.4)	1類 横長剥片使用
15	ナイフ形石器	YLM	4S0041	黒耀石	HTJ10	(31.7)	14.9	4.2	(2.2)	1類 横長剥片使用
16	ナイフ形石器	YLU直上	5S0022	黒耀石	WDT3	31.6	15.0	4.3	2.0	2類
17	ナイフ形石器	YLL	5S0698	黒耀石	KRM17	21.4	11.7	5.2	1.0	2類
18	ナイフ形石器	YLM	4S0033	黒耀石	KRM3	26.9	12.0	4.1	1.3	3類
19	ナイフ形石器	YLL	4S0129	黒耀石	WDT2	43.0	14.1	6.6	3.7	1類
20	ナイフ形石器	YLM	4S0024	黒耀石	WDT3	(29.2)	12.6	4.1	(1.5)	3類
21	ナイフ形石器	YLL	5S0910	黒耀石	KRM18	28.2	10.8	5.5	1.5	4類
22	ナイフ形石器	YLM	4S0049	黒耀石	KRM8	(29.8)	8.8	2.5	(0.6)	5類
23	ナイフ形石器	BBO	4S0096	黒耀石	KRM13	19.7	8.0	2.7	0.5	5類
24	ナイフ形石器	YLU直上	5S0061	黒耀石	KRM8	(17.6)	11.2	2.2	(0.5)	5類
25	ナイフ形石器	FB	5S0016	黒耀石	TTS7	21.3	9.6	4.0	0.7	5類 基部裏面加工あり
26	ナイフ形石器	YLM	5S0692	黒耀石	KRM13	27.4	14.7	4.7	1.1	5類
27	ナイフ形石器	BBO	5S0885	ホンフェルス	Hor9	26.4	22.6	8.0	5.1	6類
28	ナイフ形石器	YLU直上	5S0070	黒耀石	KRM18	(13.5)	17.3	3.2	(0.6)	7類
29	ナイフ形石器	BBO	5S0911	黒耀石	KRM9	8.7	11.8	3.1	0.3	6類
30	ナイフ形石器	YLU	5S0235	黒耀石	HTJ8	(16.9)	(14.8)	6.4	(1.2)	欠損品 削器の可能性あり
31	ナイフ形石器	表採	5S0943	黒耀石	KSW5	(10.8)	19.2	5.6	(1.4)	欠損品
32	ナイフ形石器	YLL	5S0837	黒耀石	HTJ8	(26.3)	15.1	5.9	(1.9)	欠損品
33	ナイフ形石器	YLU	5S0390	黒耀石	KRM11	(13.7)	(11.0)	2.5	(0.3)	欠損品
34	ナイフ形石器	YLL	5S0845	黒耀石	KRM8	(13.3)	(12.2)	3.0	(0.5)	欠損品
35	ナイフ形石器	YLL	4S0042	黒耀石	HTJ2	(32.0)	17.7	4.9	(2.8)	欠損品 基部加工あり?
36	ナイフ形石器	YLM	4S0153	ホンフェルス	Hor1	(25.0)	12.9	3.7	(1.2)	ナイフ?
37	ナイフ形石器	YLM	4S0081	ガラス質黒色 安山岩	GAN1	24.1	11.9	2.1	0.6	ナイフ?

## (3) 鋼器 (第38図38)

1点が該当する。縦長剥片を素材とし、右側縁上部に2条の彫刻刀面を作出している。

## (4) 削器 (第38図39~42)

4点が該当する。39は右側縁に加工が見られるが、その加工が曖昧であることから使用痕のある剥片である可能性も高い。40は両側縁と下部に刃部を作出しており、左側縁下半を削器として、右側縁から下部にかけてを搔器として使用している。右側縁の刃部の角度は左側縁と下部に比して鋭角である。さらに、上下には打撃痕が残ることから、楔形石器としての使用も考えられる。41は硬質頁岩を素材として用い、打点を刃部側に置き、上部は抉入削器と同じ手法で柄状の突起を作り出している。円形の形状から、搔器である可能性が高い製品であるが、刃部下部断面の角度が両側縁に比して鋭角であることから削器として扱った。42は剥片の左側縁に加工が見られる。

(5) 挟入削器 (第38図43~44)

2点が該当する。43は縦長剥片を素材として用い、左側縁中位に刃部を作り出し、右側縁全体には使用痕が見られる。44は右側縁下部に細かい鋸歯状の加工を施して刃部を作出している。

(6) 楔形石器 (第38図45・第39図46~47)

3点が該当する。45はガラス質黒色安山岩を用いている。46は流紋岩を素材とし、下部の剥離面は打撃によりヒンジフラクチャーを生じているが、両極石核である可能性も高い個体である。47は小型の角柱状を呈する。

(7) 刃部再生剥片 (第39図48)

1点が該当する。搔器の刃部再生剥片であると考えられる。

(8) 加工痕のある剥片 (第39図49~50)

2点が該当する。49は打点側にノッチ状の加工を施している。50は部分加工のナイフ形石器とも考えられる製品で、右側縁は剥片を斜めに切断して加工を施し、左側縁には使用痕が認められる。

(9) 使用痕のある剥片 (第39図51~52)

2点が該当する。51、52とも剥片の末端に使用痕が認められる。

表20 休場層彫器・削器・挟入削器・楔形石器・刃部再生剥片・加工痕剥片・使用痕剥片計測表

図版番号	器種	層位	登録番号	石材	原産地	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
38	彫器	YLL	4S0084	硬質細粒凝灰岩		(36.0)	20.3	8.4	(6.0)	
39	削器	YLM	4S0028	黒耀石	HTJ10	(41.3)	41.6	8.2	(14.1)	使用痕剥片の可能性あり
40	削器	YLM	5S0502	黒耀石	KRM11	34.3	27.5	12.2	9.8	削器として使用後、搔器として使用し、楔形石器に転用
41	削器	YLL	5S0474	硬質頁岩		30.5	23.6	10.3	7.3	搔器の可能性あり
42	削器	YLM	5S0531	黒耀石	KRM13	(35.0)	(26.7)	6.3	(5.3)	
43	挟入削器	YLM	4S0026	黒耀石	KRM11	(55.4)	28.7	3.6	(5.6)	
44	挟入削器	表採	4S0011	黒耀石	HTJ7	(24.3)	25.2	8.6	(5.9)	
45	楔形石器	YLL	5S0469	ガラス質黒色 安山岩	GAN10	36.4	23.6	10.0	7.2	
46	楔形石器	YLM	5S0466	流紋岩		37.1	45.1	17.7	31.2	両極石核の可能性あり
47	楔形石器	YLM	4S0083	黒耀石	HTJ6	19.2	7.6	7.2	1.1	
48	刃部再生剥片	表採	5S0003	黒耀石	KRM8	16.7	4.4	3.7	0.2	削器の刃部再生剥片か?
49	加工痕剥片	YLM	5S0602	黒耀石	HTJ9	22.3	13.1	7.3	2.2	
50	加工痕剥片	YLL	4S0039	黒耀石	HTJ2	29.8	34.3	6.9	4.5	部分加工のナイフ形石器の可能性あり
51	使用痕剥片	表採	5S0007	黒耀石	KRM2	22.5	23.0	5.1	2.0	
52	使用痕剥片	YLL	4S0145	ガラス質黒色 安山岩	GAN1	57.6	55.4	12.5	35.9	

(10) 石核（第40図53～54・第41図55～57）

5点が該当する。53は拳大の細粒安山岩の円礫を素材とし、縦長剥片を剥離した单設打面石核である。上面は繰り返し打面調整を施している。54はホルンフェルスの円礫を素材とし、幅広の縦長剥片を剥離した石核で、打面の転位が認められる。55はホルンフェルスを素材とする。自然面が残るが、剥片剥離が進んでいるため礫の形状は不明である。打面を180度転位した両設打面石核である。56はホルンフェルスの円礫を素材とし、小型の縦長剥片を剥離した両設打面石核と考えられるが、剥片剥離が進み、風化が著しいことからその詳細は不明である。57は黒灰色チャートを素材とし、現状では单設打面と推定される石核である。下部に潰れが見られることから、剥片剥離後に楔形石器に転用したものと考えられる。

(11) 打面調整剥片（第41図58～59）

2点が該当する。58の剥離面は打撃によりヒンジフラクチャーを生じている。

表21 休場層石核・打面調整剥片計測表

図版番号	器種	層位	登録番号	石材	原産地	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
53	石核	YLM	4S0146	細粒安山岩		60.0	52.1	46.6	181.6	上設打面
54	石核	YLM	5S0292	ホルンフェルス	Hor13	45.2	55.3	46.9	137.0	打面90° 転位
55	石核	YLM	5S0800	ホルンフェルス	Hor16	51.4	41.9	14.5	51.8	両設打面
56	石核	YLL	4S0061	ホルンフェルス	Hor4	35.1	31.1	21.6	21.0	両設打面?
57	石核	YLM	5S0470	黒灰色チャート		49.8	19.8	23.5	19.5	上設打面?楔形石器に転用か?
58	打面調整剥片 FB		5S0049	黒耀石	WDT3	17.6	8.2	4.5	0.4	
59	打面調整剥片 YLL		5S0813	黒耀石	KRM17	21.7	21.3	6.0	1.2	

(12) ポイントフレーク（第42図60）

1点が該当する。平坦剥離調整の際に生じた剥片であると考えられる。

(13) 器種不明剥片（第42図61）

1点が該当する。粘板岩製の剥片で、器種、用途等は不明である。

(14) 磨器（第42図62）

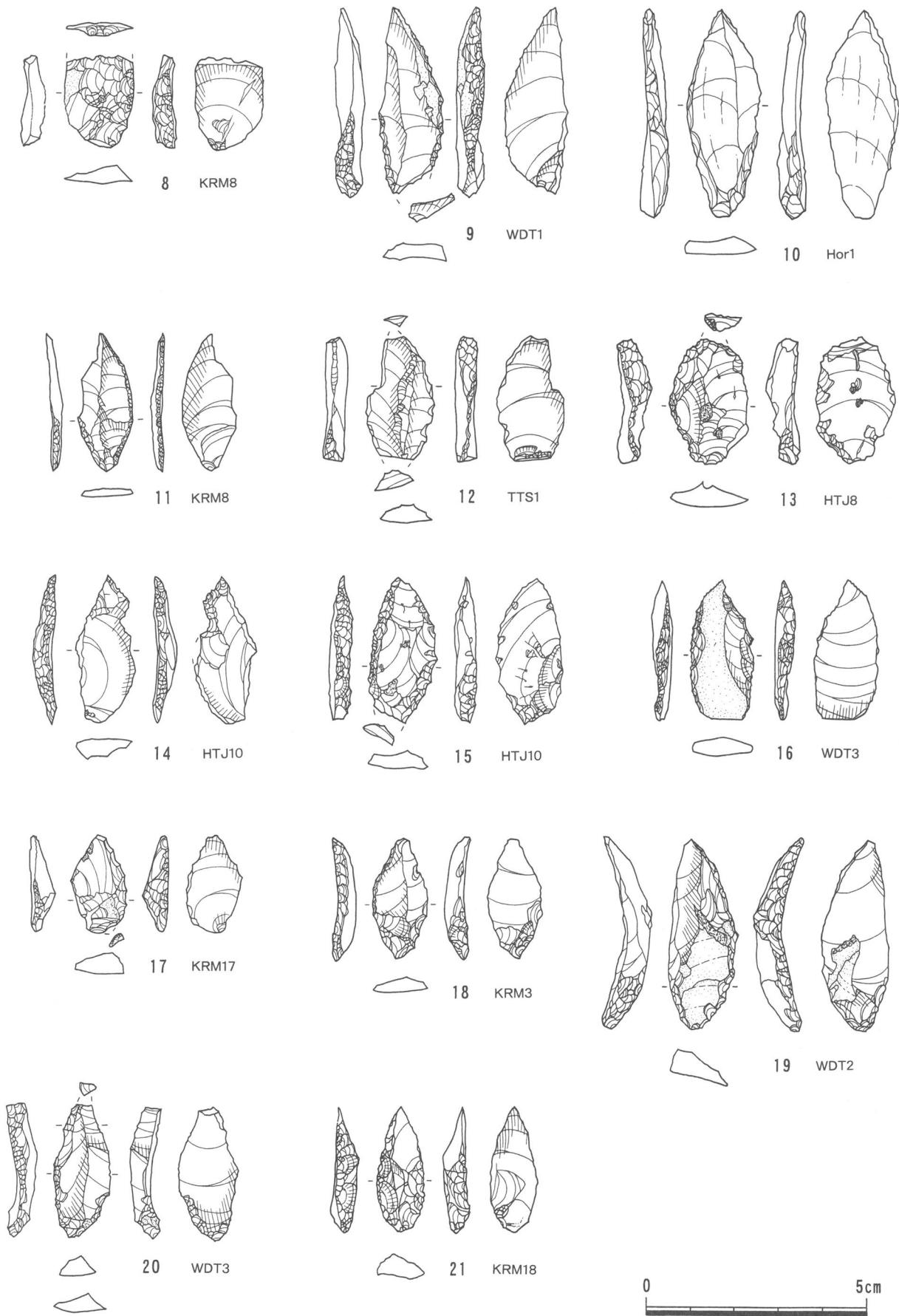
1点が該当する。細粒安山岩の横長の剥片を用いている。右側縁に刃部と思われる剥離が認められ、摩耗している。

(15) 敲石（第42図63）

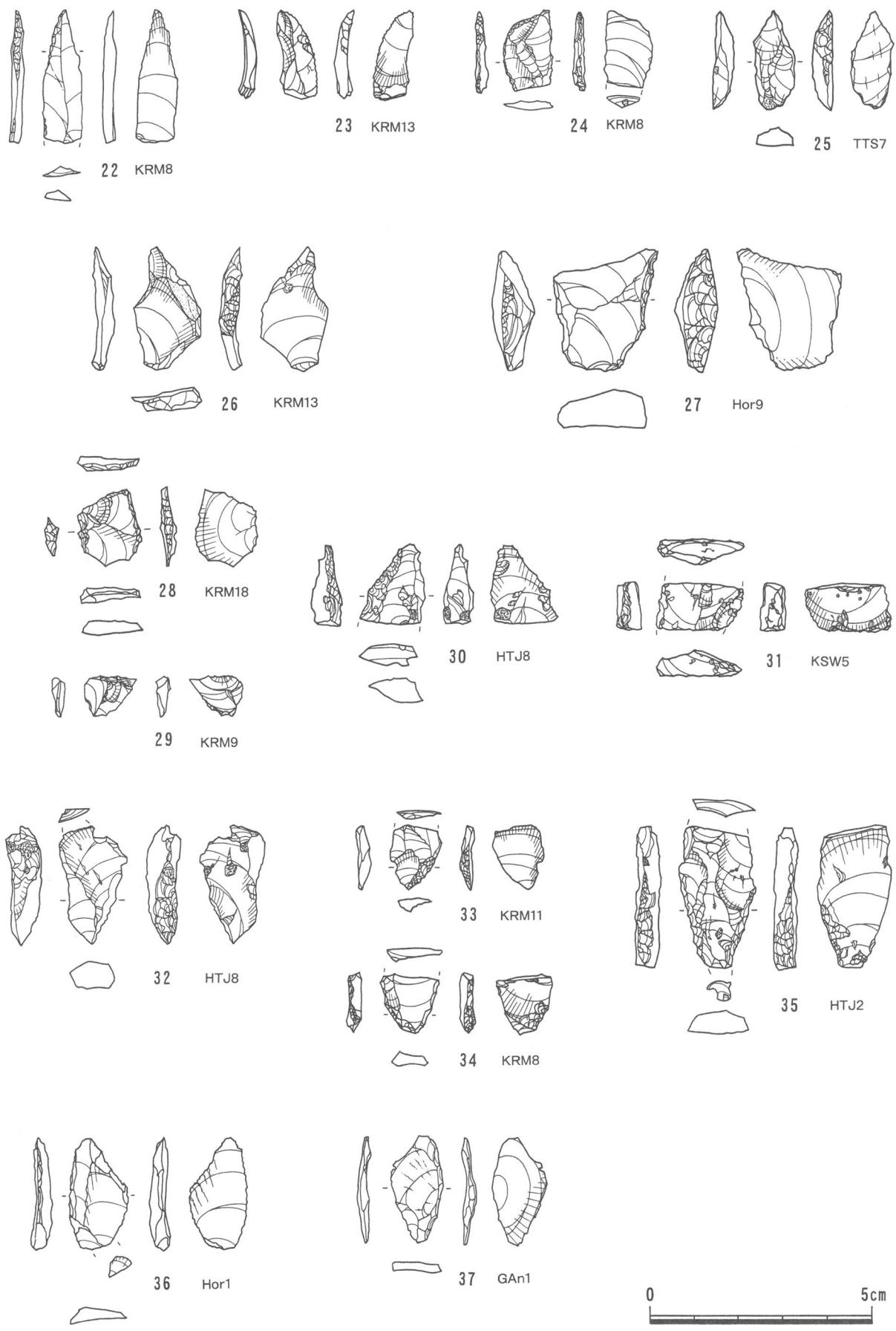
1点が該当する。輝石安山岩の円礫を用いた小型の敲石で、上下に打痕が認められる。

(16) 加工礫（第43図64）

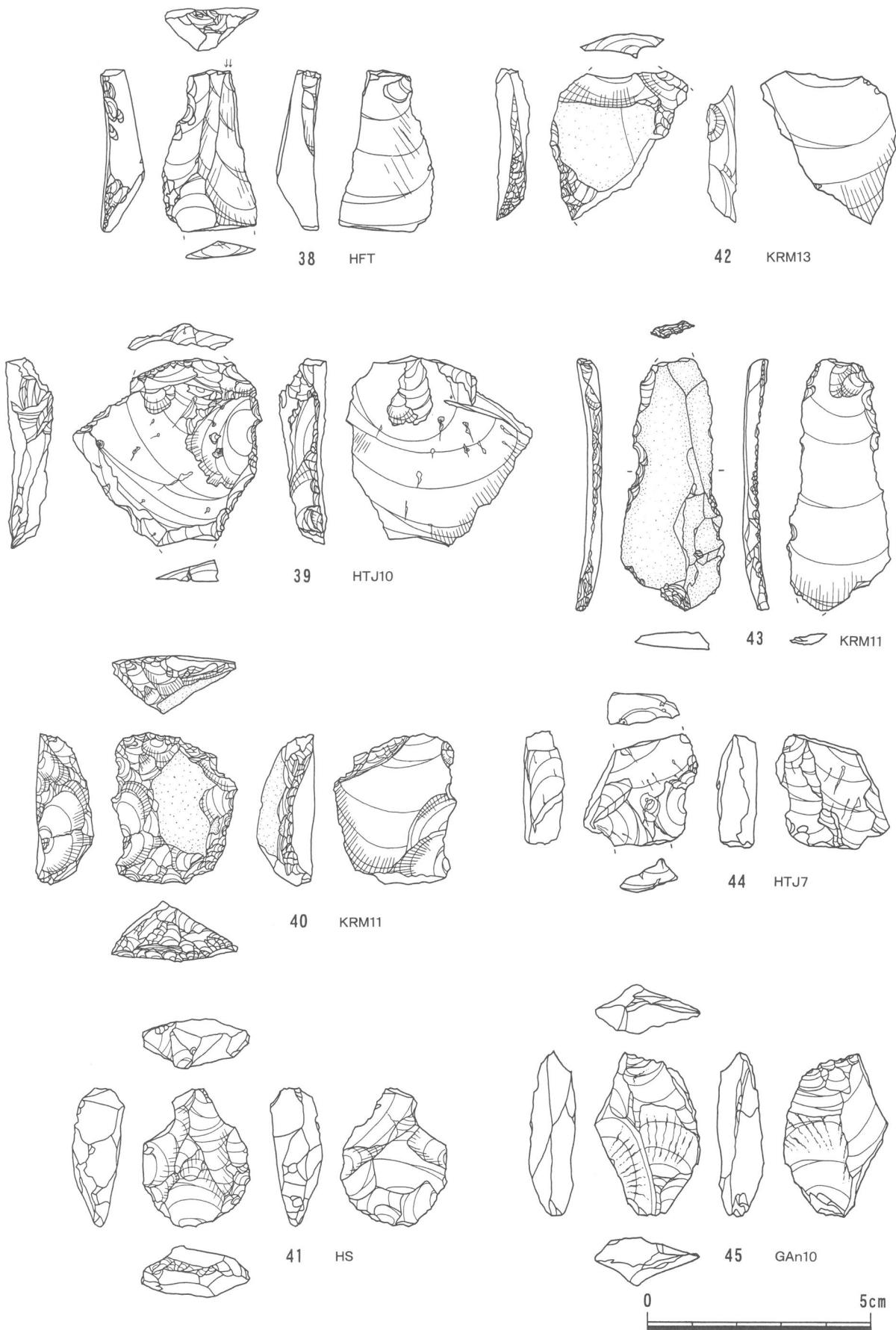
1点が該当する。輝石安山岩の円礫を用いている。表裏両面に磨面が認められることから、石皿として使用されていた可能性が高い製品で、赤化している。



第36図 休場層尖頭器・ナイフ形石器 (S=4/5)



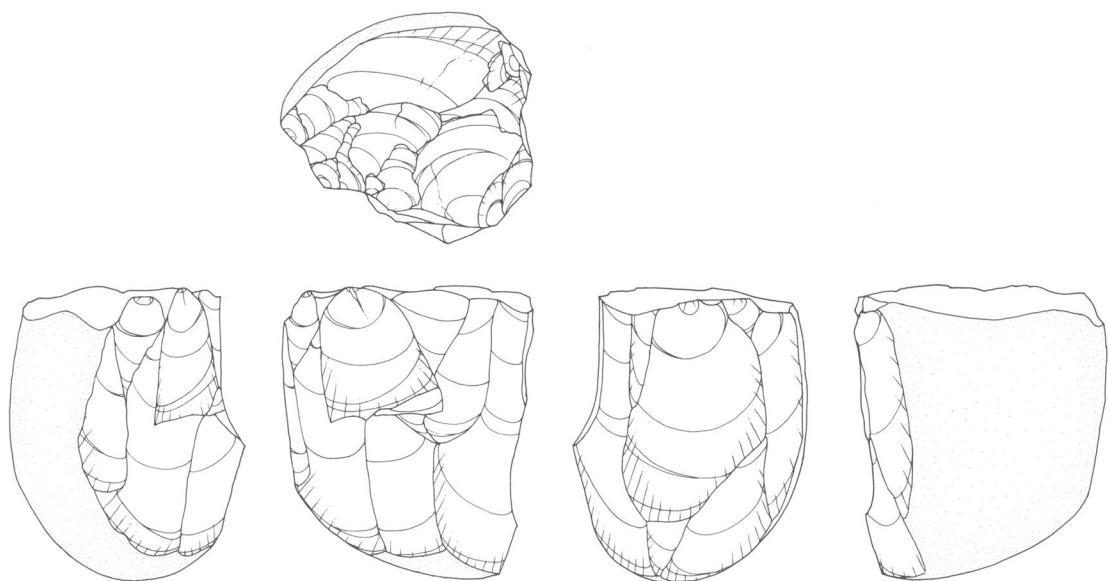
第37図 休場層ナイフ形石器 (S=4/5)



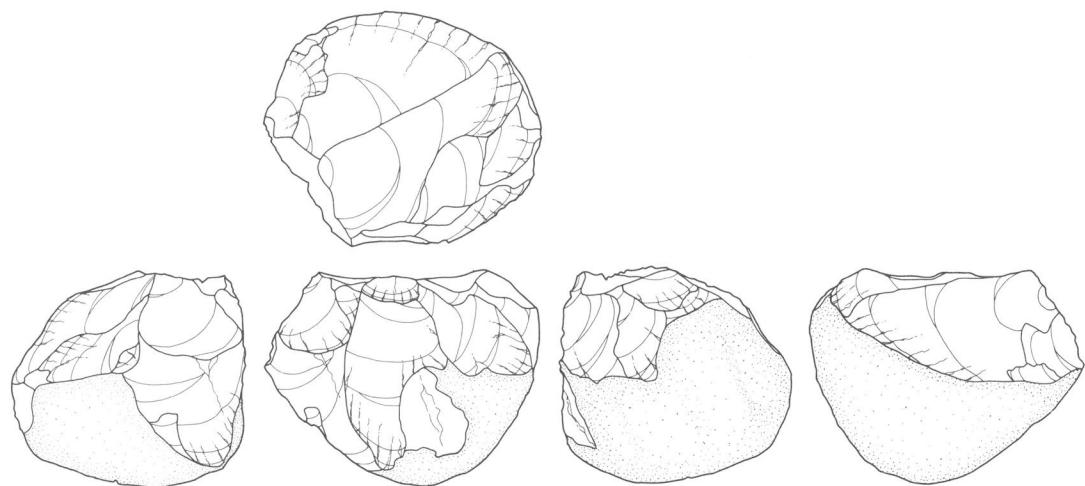
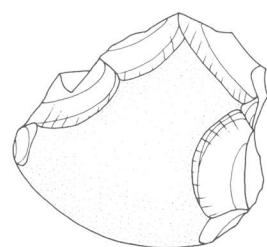
第38図 休場層影器・削器・抉入削器・楔形石器 (S=4/5)



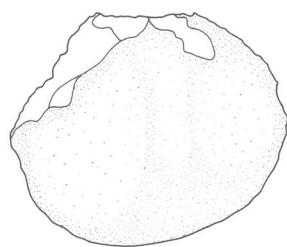
第39図 休場層楔形石器・刃部再生剥片・加工痕剥片・使用痕剥片 (S=4/5)



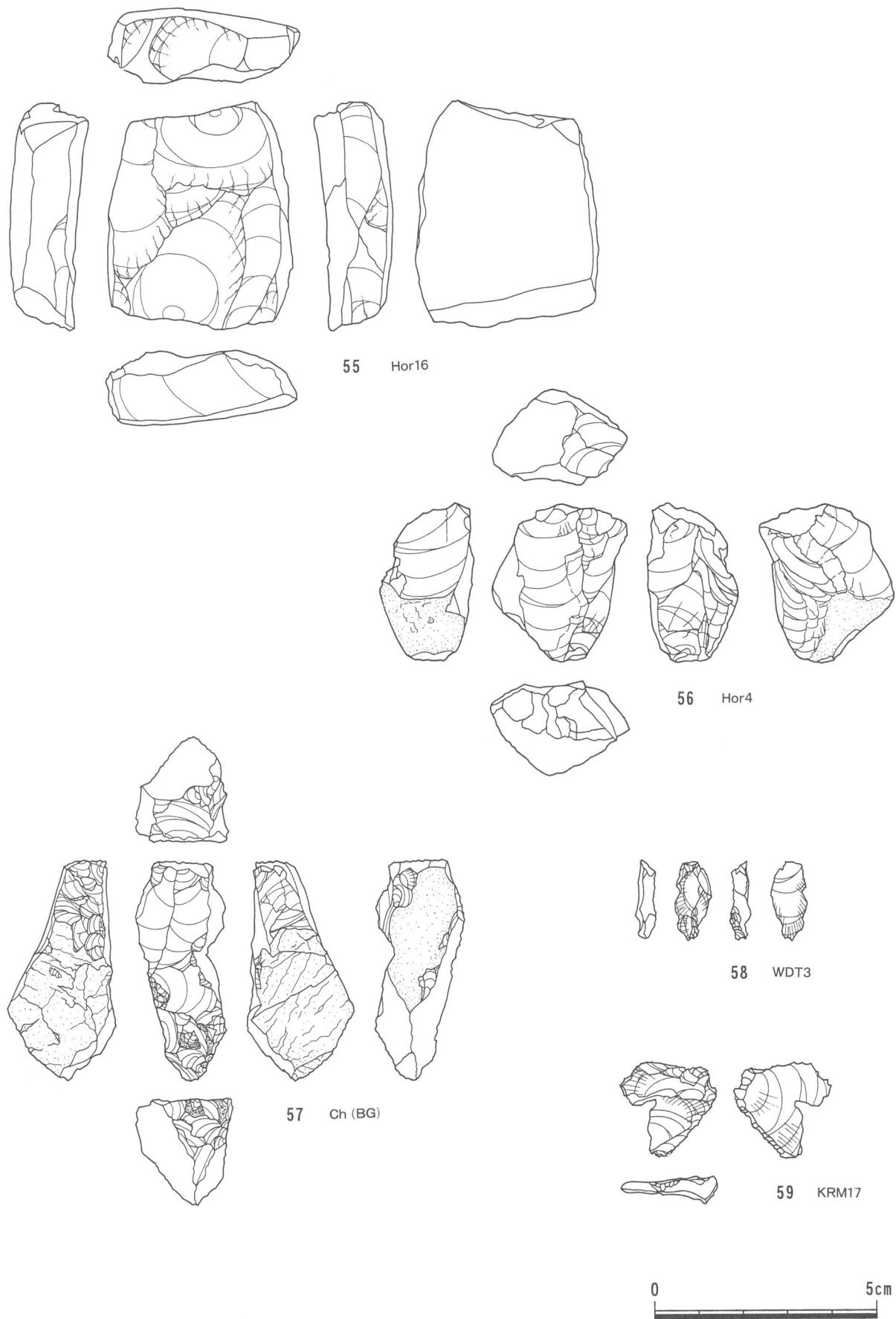
53 FAn



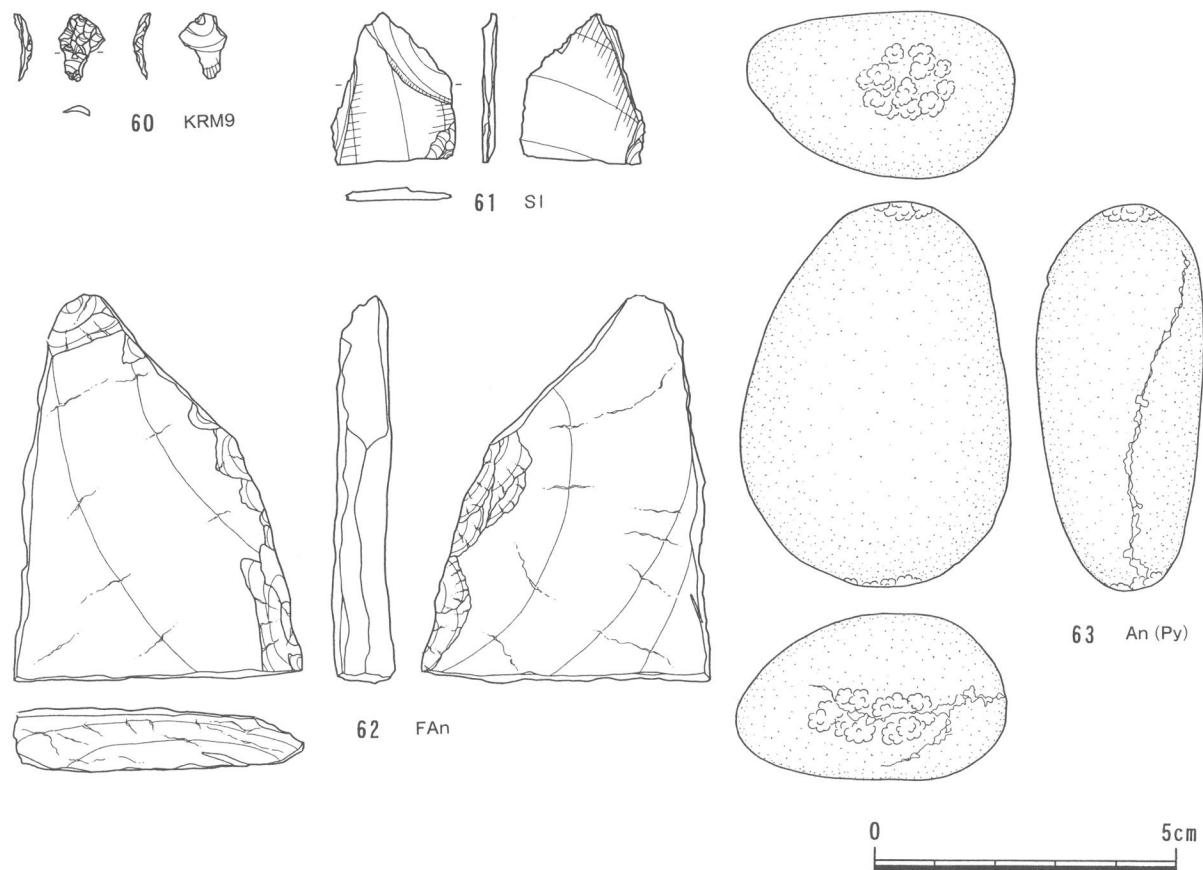
54 Hor13



第40図 休場層石核 (S=3/4)



第41図 休場層石核・打面調整剥片 (S=4/5)



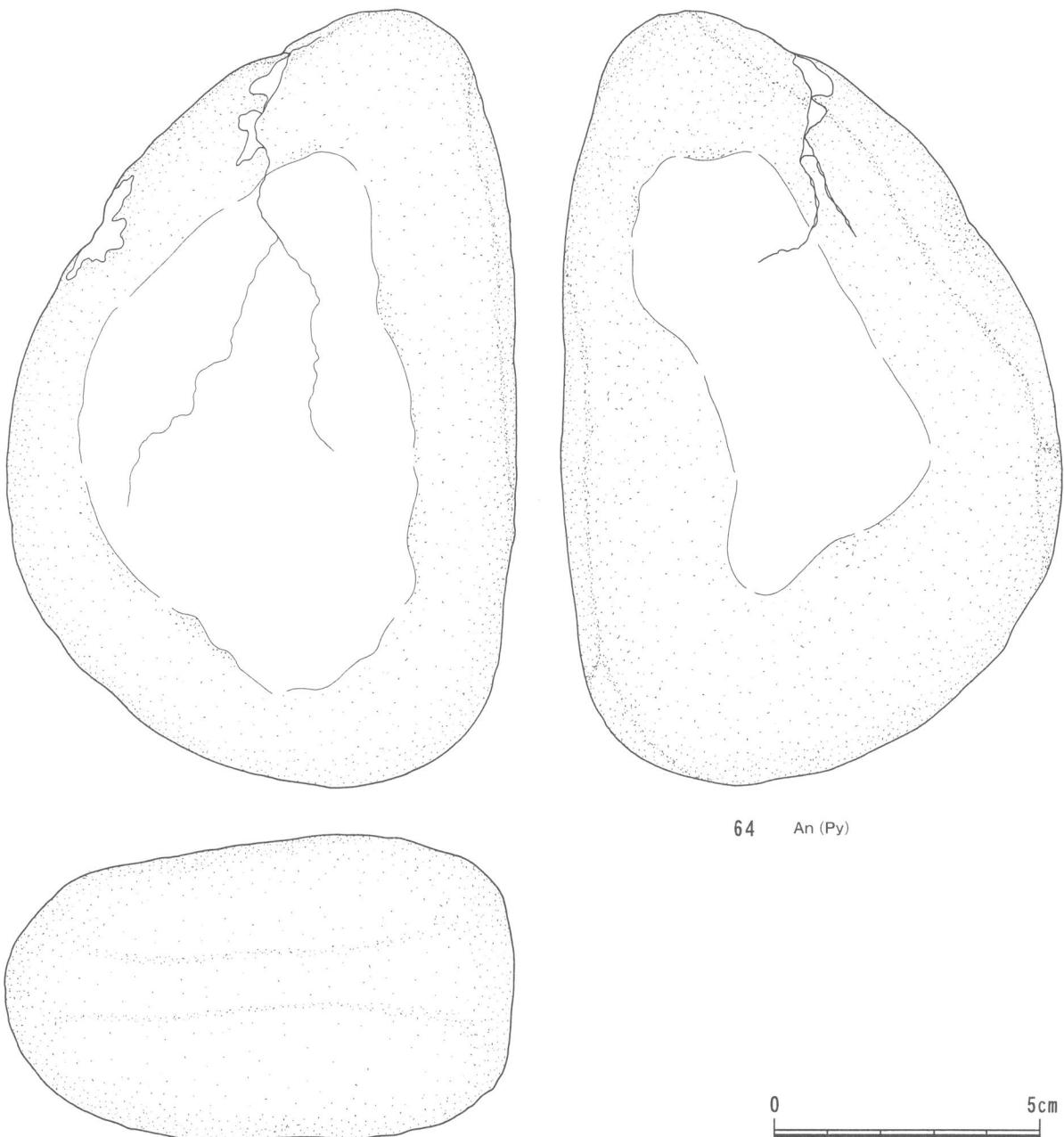
第42図 休場層ポイントフレーク・器種不明石器・礫器・敲石 (S=4/5)

表22 休場層礫石器等計測表

図版番号	器種	層位	登録番号	石材	原産地	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
60	ポイントフレーク	YLL	5S0653	黒耀石	KRM9	11.1	7.6	1.7	0.1	
61	器種不明	YLL	5S0644	粘板岩		24.8	20.3	2.1	1.5	
62	礫器	YLU	4S0015-2	細粒安山岩		64.7	48.1	10.1	41.6	
63	敲石	表採	4S0009	輝石安山岩		63.7	44.3	27.1	102.1	
64	加工礫	YLM	5S0944	輝石安山岩		143.4	95.0	56.4	1163.0	磨石の可能性あり

#### (17) 接合資料 (第44図65・66)

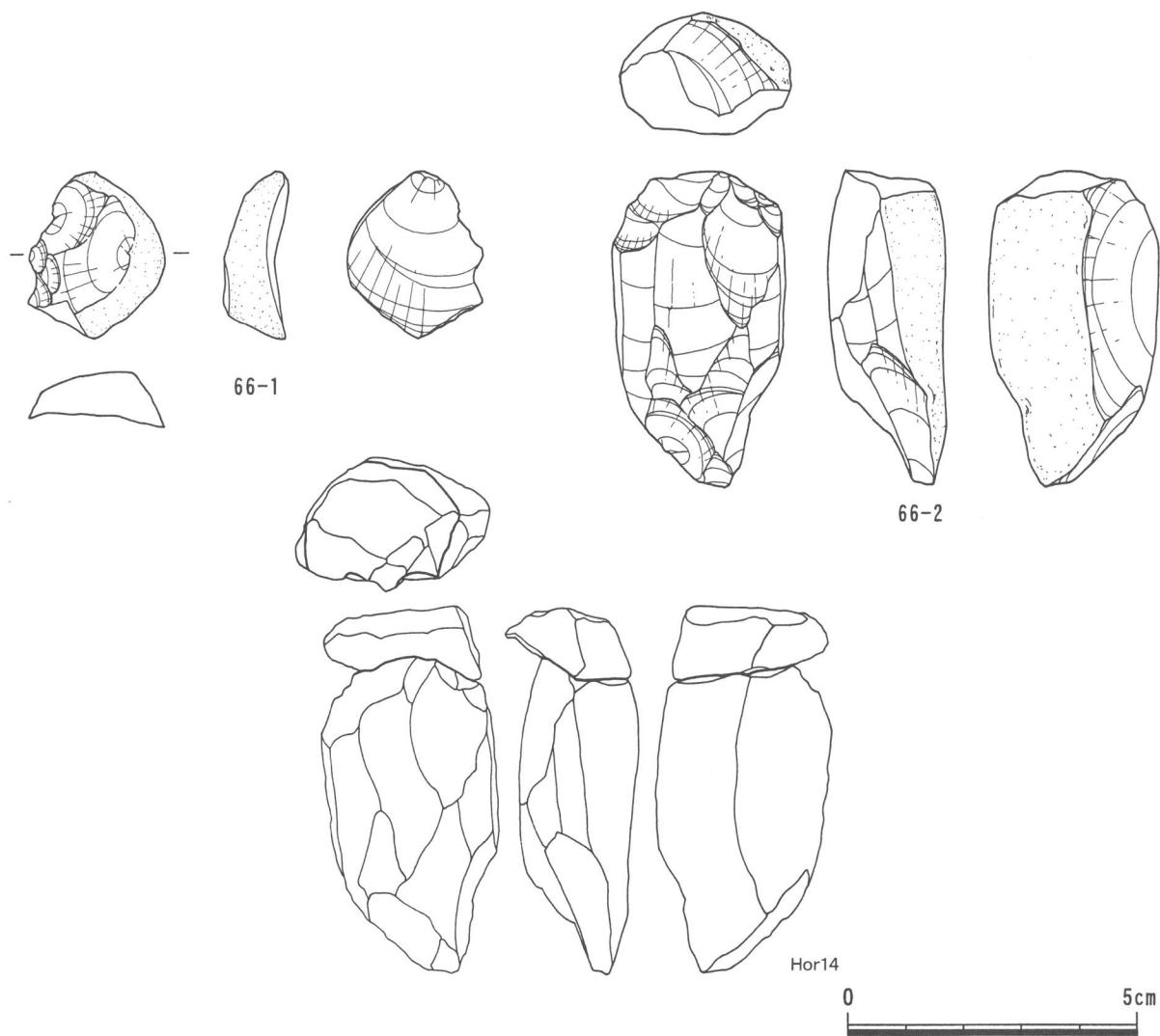
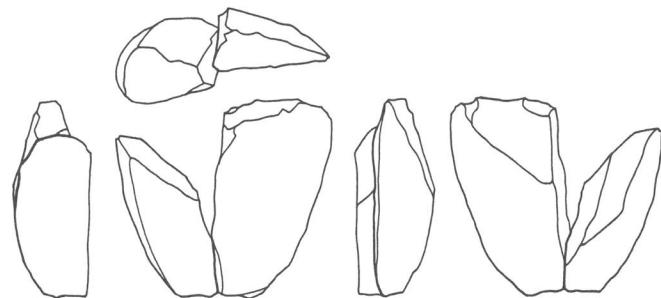
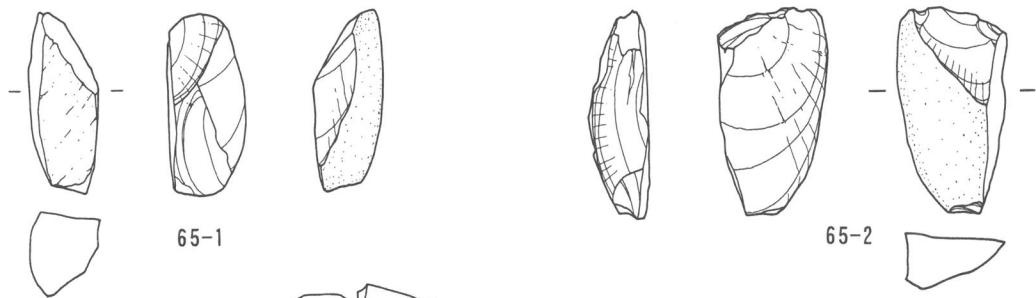
2点が該当する。65はホルンフェルスの剥片2点で構成される接合資料である。剥片は2点とも自然面が残り、風化が著しい。66はホルンフェルスの縦長剥片を剥離した石核と打面調整剥片の接合資料である。石核は自然面が残り、剥片剥離作業がかなり進行している。打面調整は現状では上方からのみ行われているが、石核には下方からの剥離も認められる。打面調整剥片は、数回の調整剥離が行われている。その後、石核は調整面から数回剥片剥離作業を行っている。



第43図 休場層加工礫 (S=4/5)

表23 休場層接合資料計測表

図版 番号	器種	層位	登録 番号	石材	原産地	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
65-1	剥片	YLM	4S0053	ホルンフェルス	Hor7	30.5	11.8	12.8	5.9	
65-2	剥片	YLL	4S0133	ホルンフェルス	Hor7	34.3	18.2	10.4	6.0	
66-1	打面調整剥片	YLM	5S0867	ホルンフェルス	Hor14	28.7	24.0	9.1	7.2	
66-2	石核	YLU直上	5S0196	ホルンフェルス	Hor14	56.4	30.1	21.1	42.7	



第44図 休場層接合資料 (S=4/5)

## 第2節 休場層直下黒色帶の遺構と遺物

### 概要

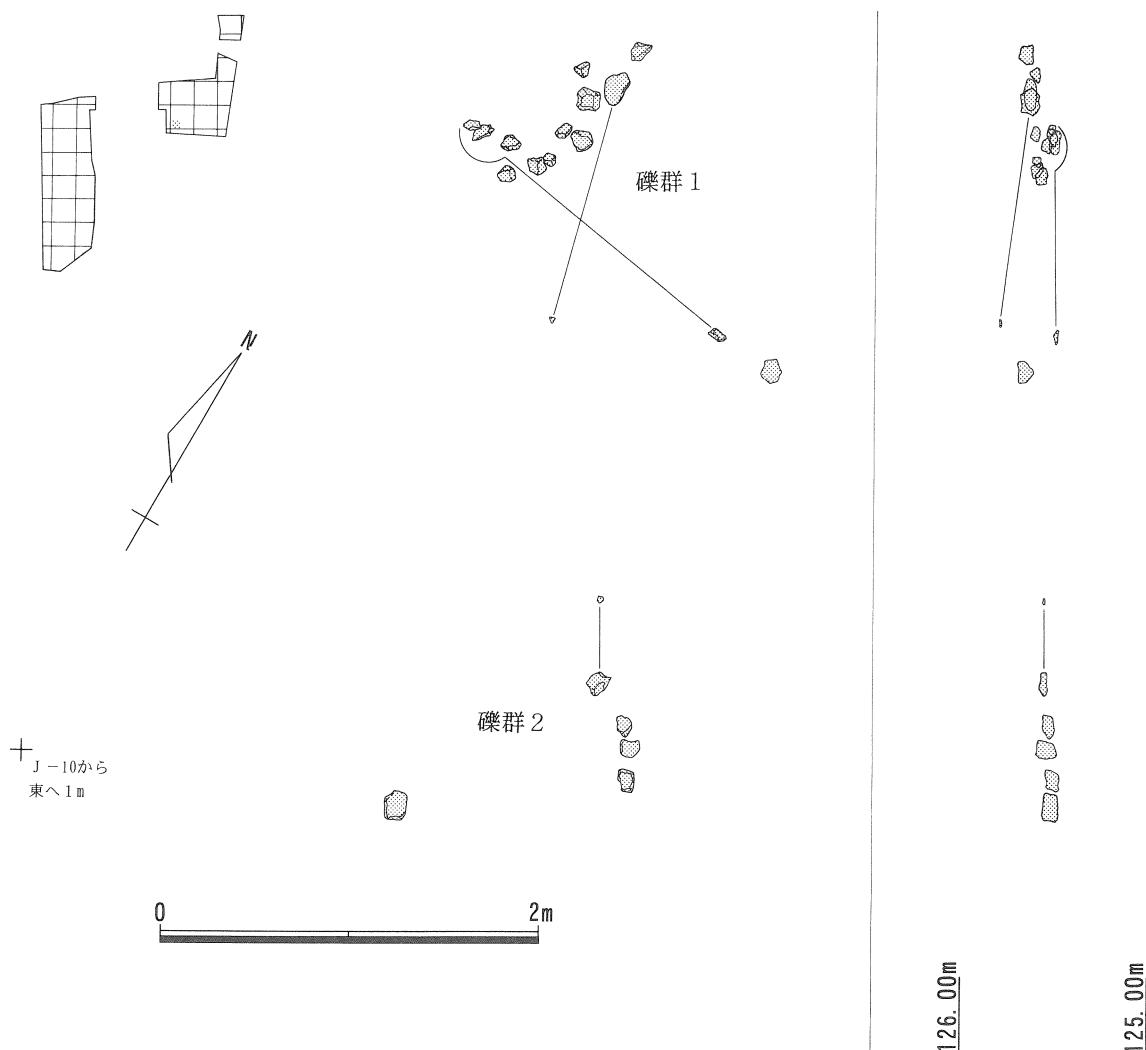
J 10グリッド南西部で礫群2基が検出された。これらの礫群のレベルは休場層中層のSブロック、Tブロック、T 1 級群より約10cm下がった位置にある。

#### (1) 級群1 (第45図)

15個の受熱礫で構成され、このうち12個の礫が集中して分布する。礫群の範囲は東西約1.6m、南北約1.7mをはかる。垂直分布は、一部を除いてほぼ一平面を構成している。礫はすべて割石で、碎片と接合する個体が2点存在する他は接合関係は認められない。

#### (2) 級群2 (第45図)

級群1より南へ約1.2m離れた位置にあり、一部はJ 9グリッドにもまたがって分布する。6個の受熱礫で構成され、このうち4個の礫が集中して分布する。礫群の範囲は東西約1.2m、南北約70cmをはかる。垂直分布は、ほとんど上下幅がなく、一平面を構成している。礫はすべて割石で、碎片と接合する個体が1点存在する他は接合関係は認められない。



第45図 BB0層礫群1・2 (S=1/40)

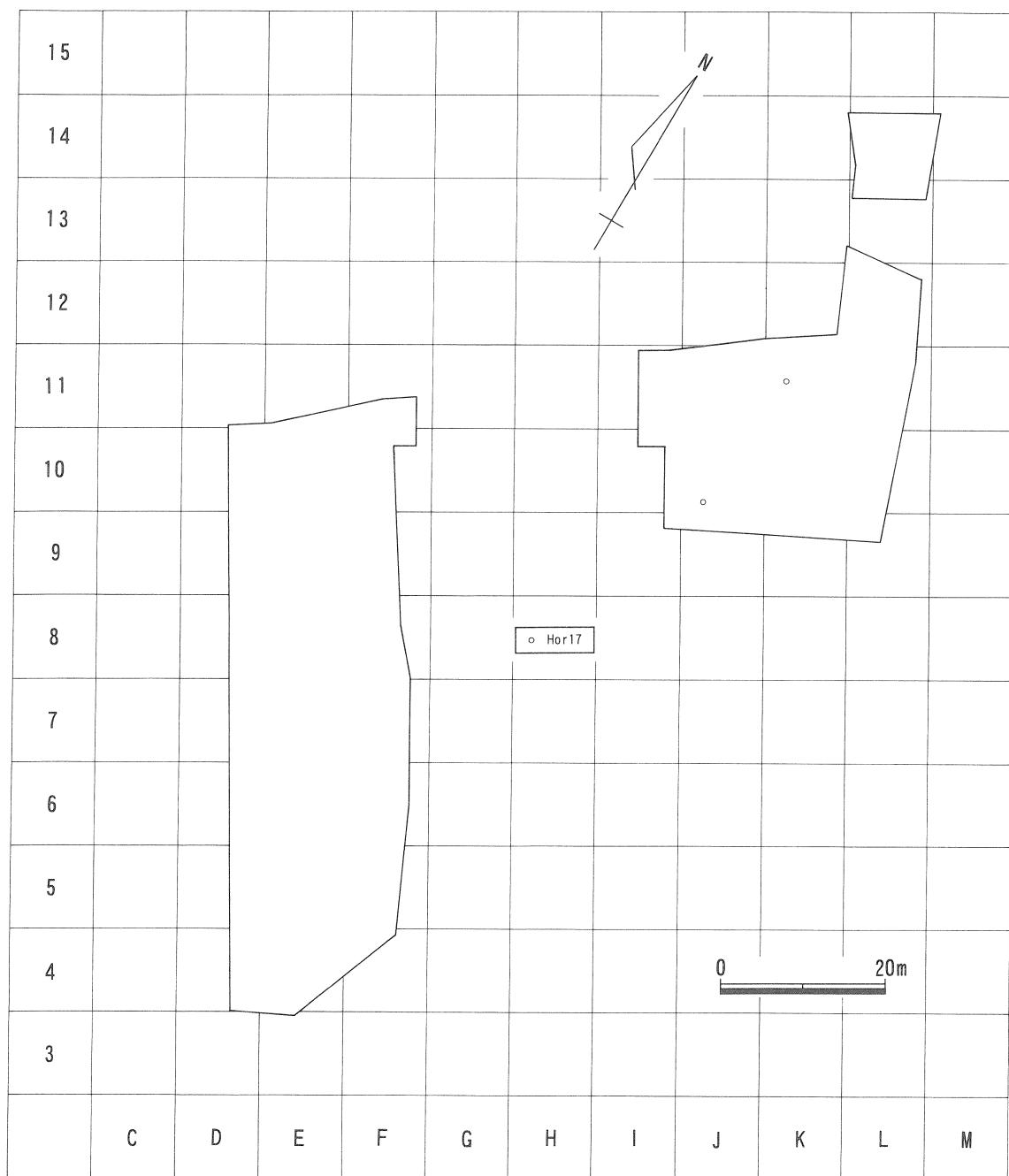
### 第3節 第I黒色帶の遺構と遺物

#### 概要

J10グリッド南西部とK11グリッド中央部でホルンフェルスの剥片2点が出土した。個体別分類の結果、同一の石材Hor17であることが明らかになった。所見を表24に、出土位置を第45図に示す。

表24 BB I層個体別資料分類一覧

個体番号	特長	交差組織	鉄サビ状粒子	自然面・その他	個体数
Hor17	淡黄灰色粘土様物質に覆われ、新鮮面は不明。 塊状。	なし	少し	不明	2



第46図 BB I層遺物分布図 (S=1/800)

## 第4節 第II黒色帯の遺構と遺物

### 概要

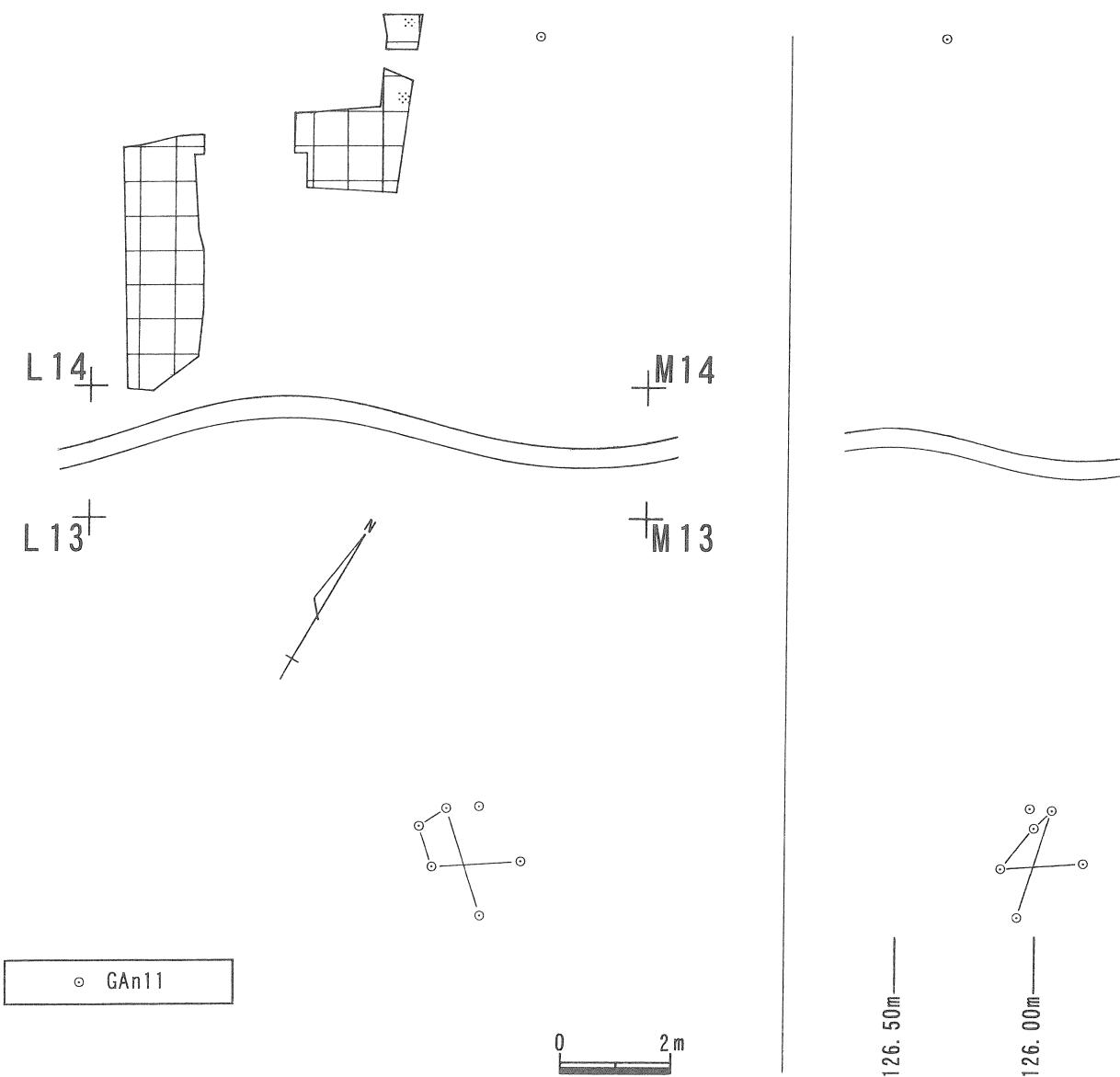
L12グリッドを中心とした石器ブロック1基が検出された。

#### 1 遺物集中地点（第47図）

同一母岩のガラス質黒色安山岩GAN11の剥片・チップ7点で構成される。このうち6点はL12グリッド南部に集中し、1点はL14グリッドまで拡散する。各遺物は層位の浮き沈みが著しいが、剥片67-3の出土層位からBBⅡ層の石器ブロックと認定した。7点中5点の剥片に接合関係が認められる。

表25 BBⅡ層個体別資料分類一覧

個体番号	特長	含有物	気泡	自然面・その他	個体数
GAN11	風化面は灰黒色。新鮮面は黒色。 少し粗粒。	黄褐色岩片を含む	偏平状の気泡や球状の 気泡が目立つ	溶岩状のギザギザ した面	7

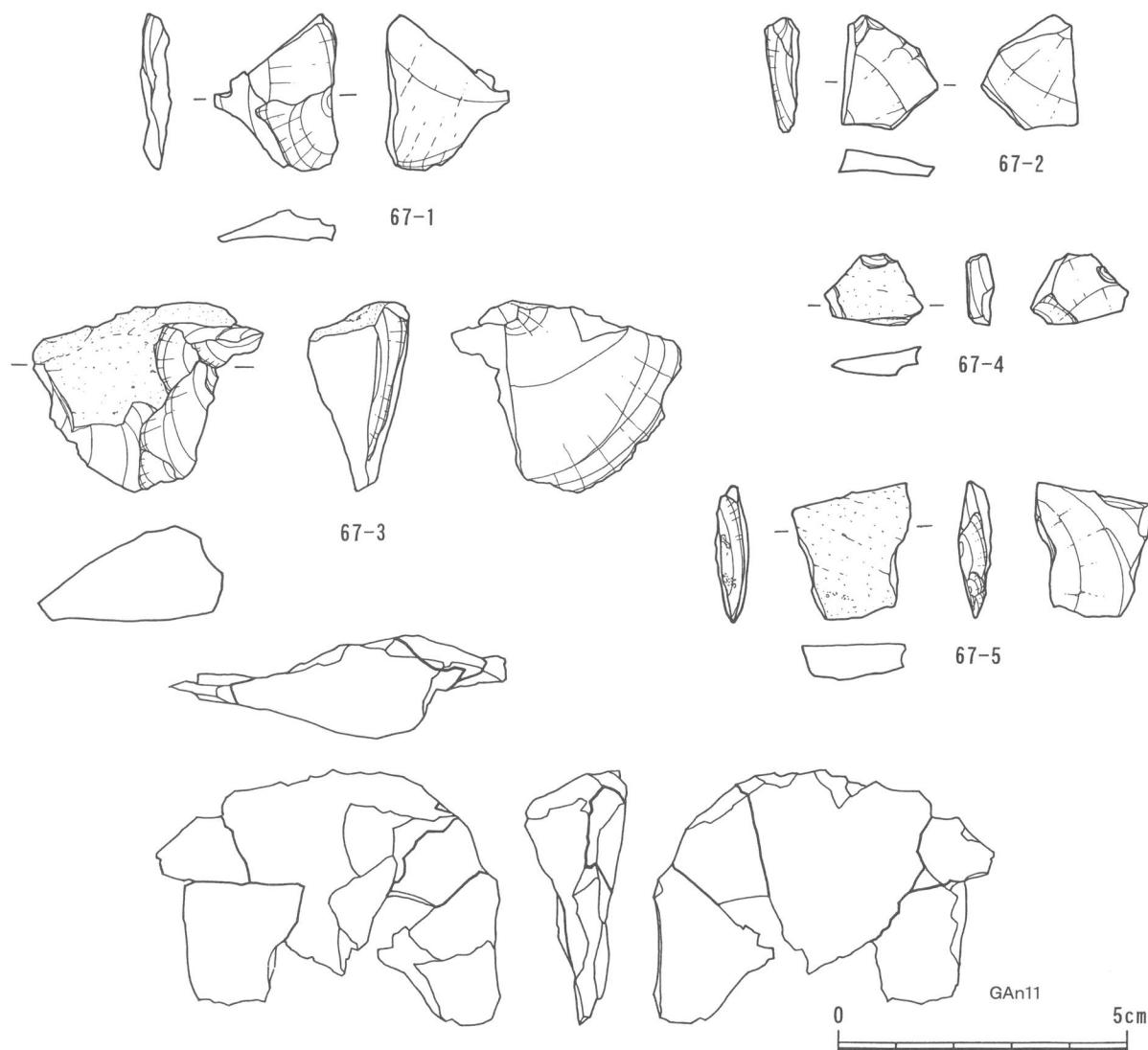


第47図 BBⅡ層石器ブロック個体別分布図 (S=1/120)

## 2 遺物

### 接合資料（第48図67）

剥片5点で構成される。剥片採取時の衝撃で破碎したものと考えられる。



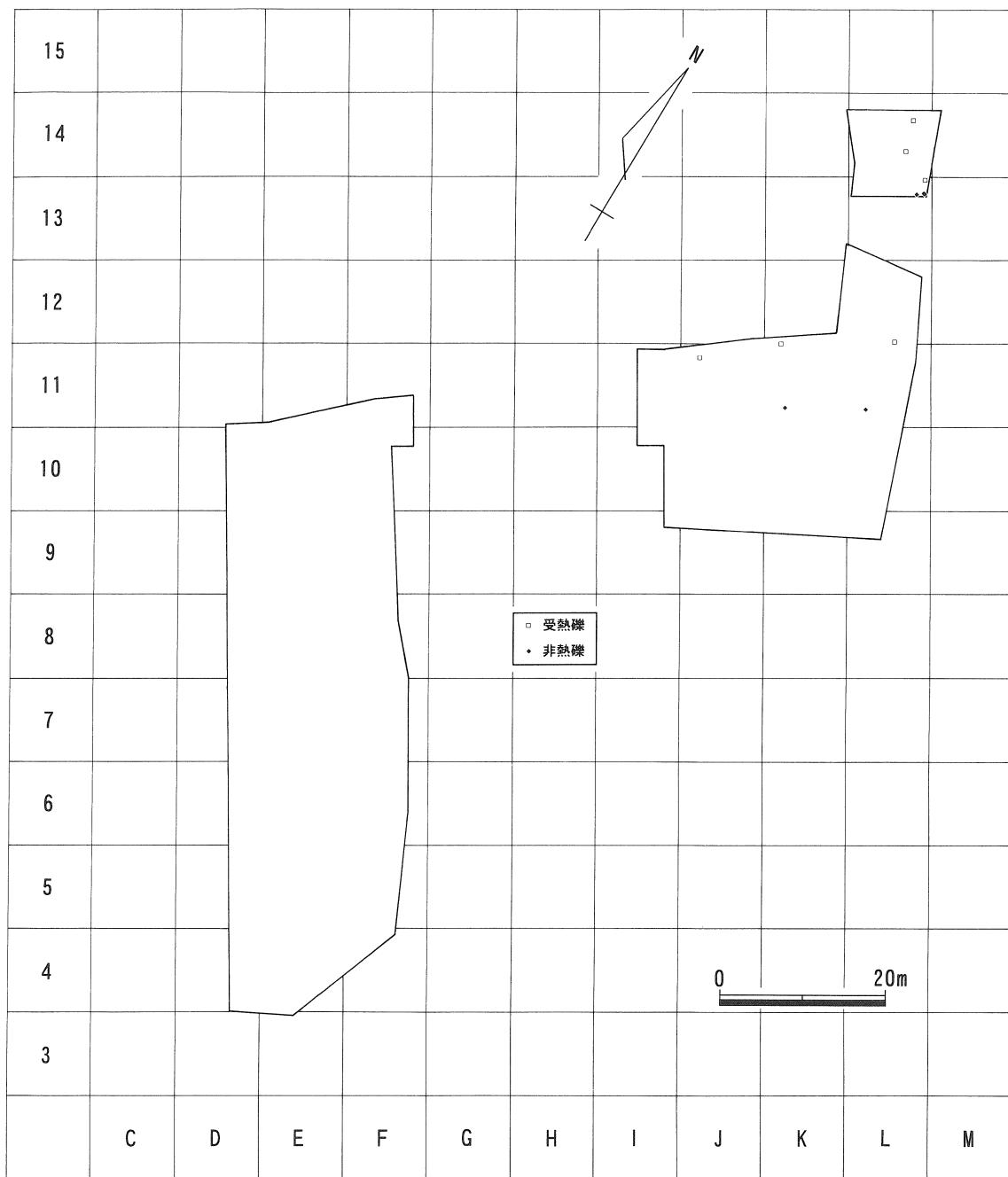
第48図 BB II層接合資料 (S=4/5)

表26 BB II層接合資料計測表

図版番号	器種	層位	登録番号	石材	原産地	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
67-1	剥片	BB III	5S0937	ガラス質黒色安山岩	GAn11	27.3	21.3	4.4	2.0	
67-2	剥片	NLA	5S0933	ガラス質黒色安山岩	GAn11	19.6	16.1	5.3	1.4	
67-3	剥片	BB II	5S0934	ガラス質黒色安山岩	GAn11	32.5	40.2	19.8	16.6	
67-4	剥片	BB II	5S0935	ガラス質黒色安山岩	GAn11	12.4	17.0	4.6	1.0	
67-5	剥片	NLB	5S0932	ガラス質黒色安山岩	GAn11	21.5	20.6	5.6	3.1	

## 第5節 第III黒色帶の遺構と遺物

1区・2区で検出されたものと同形態の土坑は検出されず、5区において、一部SCIII s 1層上面にまたがるものも含めて11点の礫が散逸して出土したのみである。



第49図 BB III層遺物分布図 (S=1/800)

# 第V章 調査の成果と課題

今回の調査では、縄文時代、休場層、BBⅠ層、BBⅡ層から遺物が出土した。休場層中層での遺物出土量が最も多く、その他の層位からの出土量が微量であったため、本書ではこの層位についてのみ、調査の結果、新たに得ることができた成果と課題について記述する。

## 1 休場層中層における石器石材組成と遺物分布状況について

4・5区の休場層中層から出土した石器の石材別の内訳は、剥片・チップの数量では黒耀石が全体の約75%と最も多く、次いでホルンフェルスが約20%、ガラス質黒色安山岩が約3%で、順は1区～3区と同じである。しかし、黒耀石はチップで、ホルンフェルスは剥片での出土が多いことから、重量比ではホルンフェルスが約65%、黒耀石が約13%、ガラス質黒色安山岩が約16%となる。また、石核は数量的にもホルンフェルスのものが最も多く、黒耀石のものは4・5区では出土しなかった。

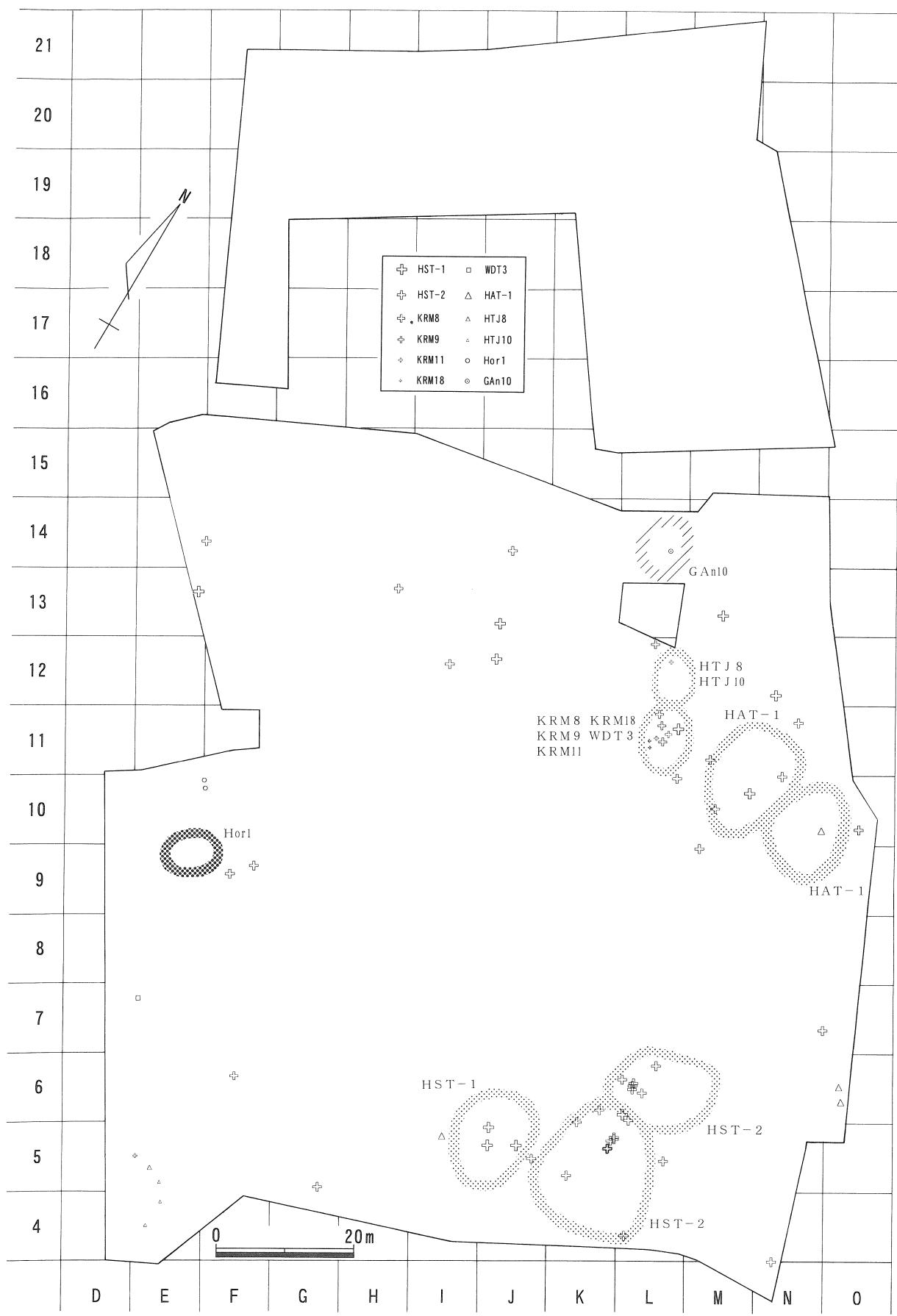
休場層中層から出土した4・5区の石器は8ヶ所のブロックとして認識することができ、1・2区で検出された石器ブロックとの合計は24ヶ所となる。『下原遺跡I』では、A～Pブロックは石器石材や器種組成によって全体を4群に分割できることが報告されている（静埋文研1995）。4・5区で検出された石器ブロックをこれらの群に当てはめてみると、4区Q・Rブロックと5区S・T・XブロックはI群に、5区U・V・WブロックはII群に、4区8ラインより南はIV群に該当する（第51図）。

ガラス質黒色安山岩とホルンフェルスが主体を成し、蓼科系の黒耀石が搬入されているI群に属している、5区Xブロック以外の石器ブロックの組成の中心はすべてホルンフェルスである。従ってI群は西に進むほどガラス質黒色安山岩の分布は希薄になり、ホルンフェルスが密に分布するようになる。II群はホルンフェルスと畠宿産の黒耀石が主体を成し、霧ヶ峰系の黒耀石が搬入されている。しかし、Vブロックの組成の中心は、III群に多く見られる霧ヶ峰系、和田峠系の黒耀石であり、これまで指摘された分布傾向と異なる。また、Vブロックを構成する黒耀石はIII群で分布する個体別資料とは別個体である。4区

ライン以南は搬入されたtoolが多く分布し、IV群の分布と同じ様相を示している。また、ナイフ形石器等のtoolは1・2区と同様、各群から平均的に出土している。

石器ブロックの組成を見ると、同一個体の剥片・チップが集中して出土しているブロックが普遍的に存在することから、遺跡内で剥片剥離作業が行われていたことが推定される。全調査区において、特に出土量が多い個体（HST1・HST2・HAT1・KRM8・KRM9・KRM10・KRM11・KRM18・WDT3・HTJ8・HTJ10・Hor1・GAn10）の集中する地点と、これらの個体を素材としたtoolの位置を第50図に示してみた。個体別資料の中には、複数の群にまたがって分布しているものも多く存在することから、下原遺跡の石器ブロックが短期間のうちに形成されたものであることが考えられる（表18）。また、toolは素材と同一の個体で構成されるブロック内から出土するものと、ブロックから離れた位置で出土するものに大別されることから、遺跡内において石器石材の加工地点が移動していたことが推察される。その移動も、ホルンフェルス及びガラス質黒色安山岩はtoolと石器ブロックの移動範囲が約10m以内と狭いのに対し、黒耀石は最大約180mと広範囲であることが特徴的である。

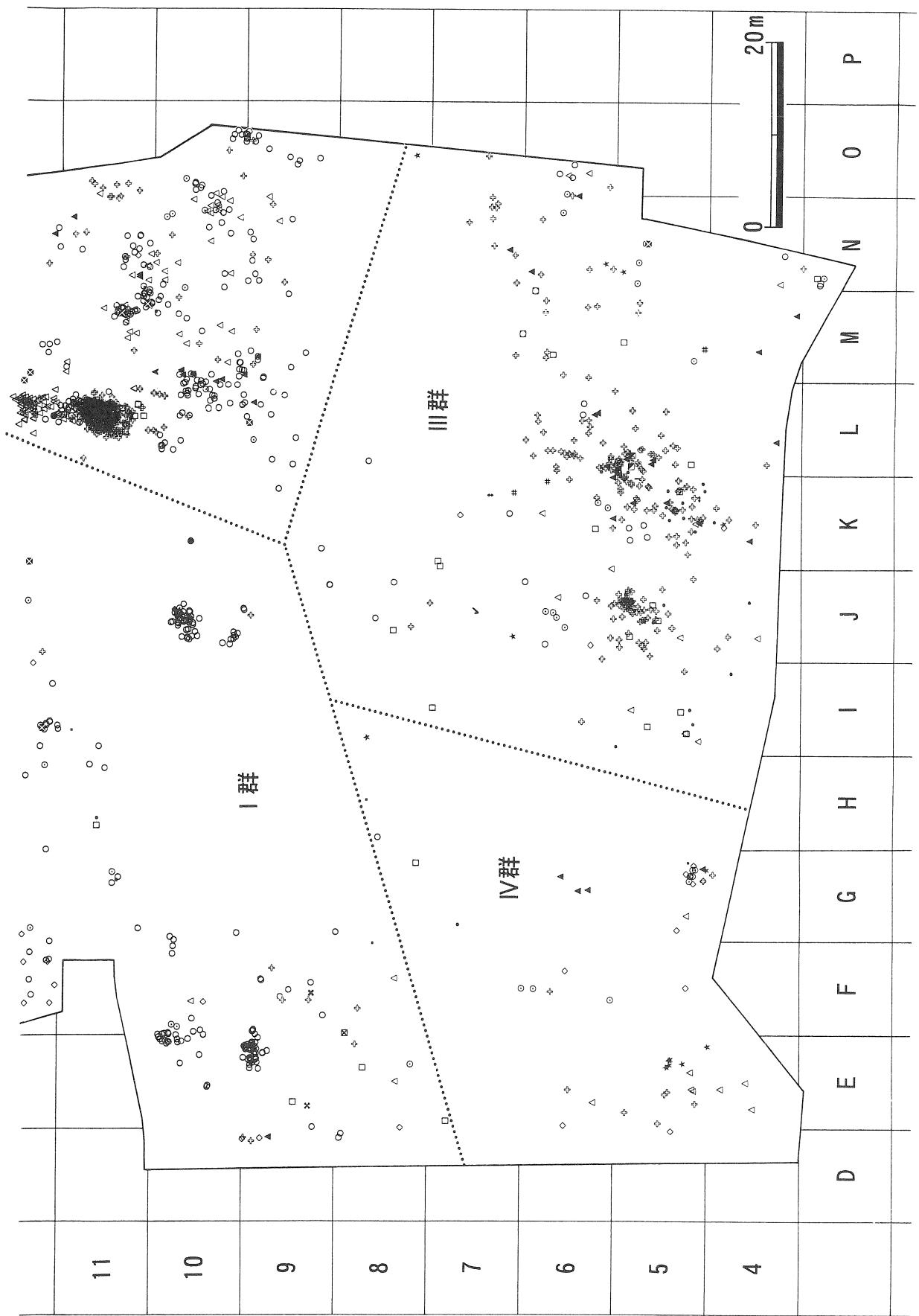
また、最大の石器ブロックであるVブロックは数量、堆積状況、器種構成、そして複数個体が混じり合って出土している点が非常に特異なブロックであり、その性格の検討が今後の課題であろう。



第50図 個体別資料集中地点とtoolの分布 (S=1/800)



第51図 下原遺跡全調査区休場層遺物分布図 ( $S=1/600$ )



## 2 出土石器について

1・2区から出土した休場層中層の石器群は、大型と小型の槍先形尖頭器と、中、小型のナイフ形石器、搔器、削器、彫器などで構成される。槍先形尖頭器は周縁加工や片面、半両面加工の小型のものが、ナイフ形石器は小型の石刃を素材とした二側縁加工のものが主体を占めている。これらの石器は、石器群の組成や形態から、ナイフ形石器文化の中でも終末期にあたり、1995年の『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年』シンポジウムでは、諏訪間氏の編年（諏訪間 1988）によると相模野段階Ⅶに並行する第4期b段階に当たる（前嶋 1995）、南関東では「砂川期」と呼ばれる時期の終末期に相当するものと指摘されている（笹原 1997）。

4・5区では、休場層中層において接合資料も含めて計66点の石器が出土した。石器の組成は、小型の尖頭器の基部と、中、小型のナイフ形石器、削器、彫器などで構成されている。ナイフ形石器は縦長剥片を素材とした二側縁加工のものが主体を占めている。その中には両面に基部調整を施したものや、基部の形状が円形を呈し、平坦剥離調整を施したもの（第36図21）、7類として分類した小型の台形を呈するものが含まれていることから、これらの石器は1・2区で出土した石器群とほぼ同時期に比定することができる。toolの素材に関しては、黒耀石製のものが圧倒的に多く、4・5区では全体の約80%を占める。黒耀石製のtoolの原産地は、霧ヶ峰系が19点と最も多く、畠宿産の10点がこれに次ぐ。1・2区では見られなかった畠宿産の黒耀石を素材とした二側縁加工のナイフ形石器が4・5区で新たに出土し、器種組成の空白を埋めている。その他の原産地系の黒耀石と、黒耀石以外の石材を素材とするtoolは比較検討を行ううえで十分な量は出土しなかったが、彫器、削器については、硬質細粒凝灰岩、硬質頁岩等の石材が選択的に使用されている点が特徴的である。

## 3 まとめ

今回の調査では、個体別資料分類をもとに、出土層位を越えて文化層を認定し、遺跡内における各個体の動きを把握した。休場層中層の石器ブロックが短期間のうちに形成されていたこと、遺跡内で石器の剥片剥離作業が行われていたこと、その加工地点が移動していること、完成品の状態で搬入されたtoolと遺跡内で加工を行ったtoolが存在することは、個体別資料操作によって明らかにされた結果である。

蛍光X線分析による黒耀石の原産地同定を実施したところ、肉眼観察のみでは困難であった一部の原産地系の判定が可能になった。この結果、肉眼観察による分類の取り扱いに慎重さが求められるところとなった。今後調査される旧石器時代の遺跡についても、黒耀石に関しては極力この分析を導入し、より精度の高い分類と資料操作が可能になることが強く望まれる。

### 〈参考文献〉

- 笹原芳郎 1997 「箱根西麓下原遺跡の分析（黒耀石原産地分析と個体別資料操作をもとにして）」『沼津市博物館紀要』21
- 諏訪間順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について一層位別出土例の検討による石器群の段階的把握」『神奈川考古』24
- 前嶋秀張 1995 「第4・第5期の石器群」『愛鷹・箱根山麓の旧石器編年 予稿集』 静岡県考古学会シンポジウムIX
- 県埋文研 1995 『下原遺跡 I』

# 蛍光 X 線分析 結果一覽表



# 出土遺物一覽表













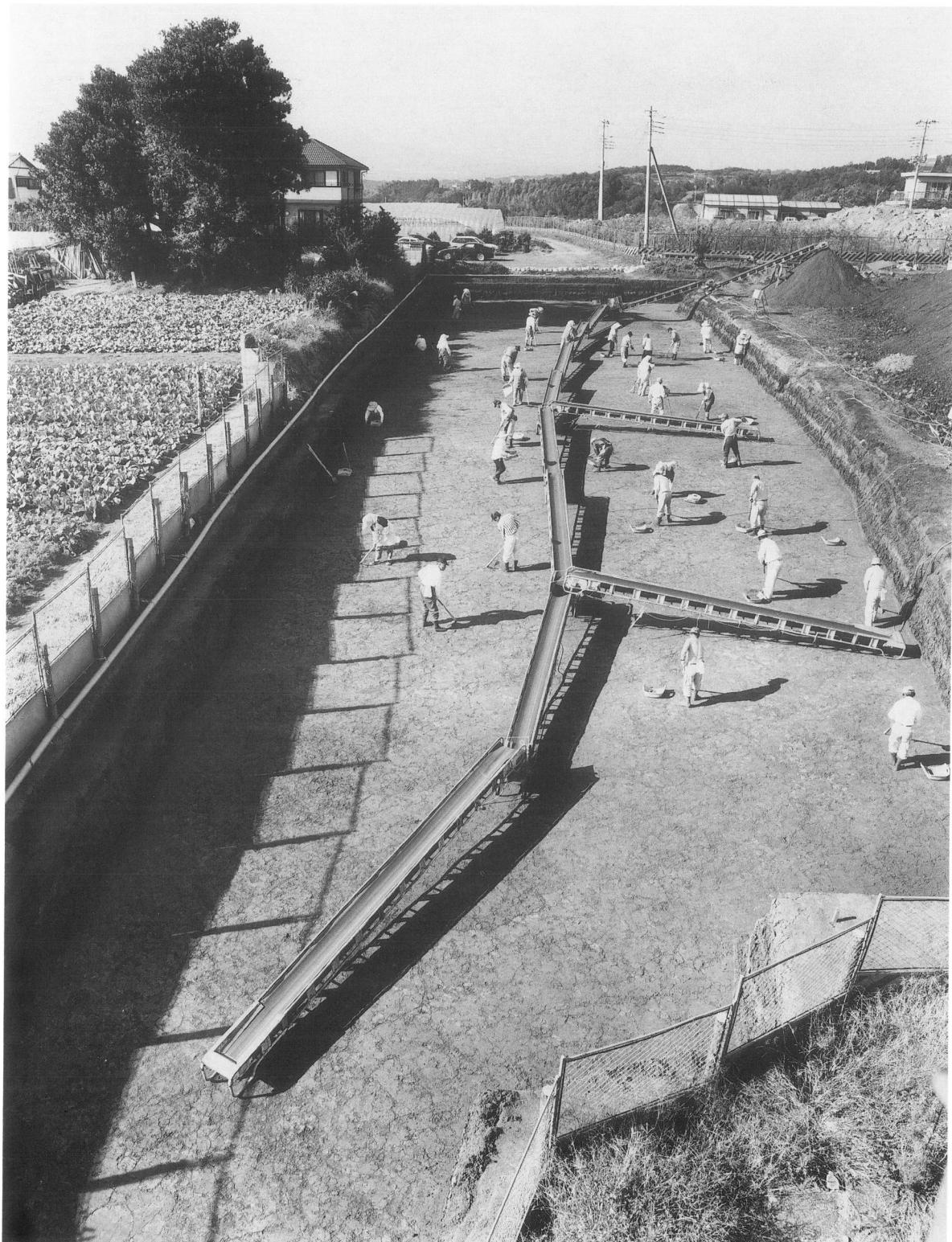








# 写 真 図 版



4区全景（南より）

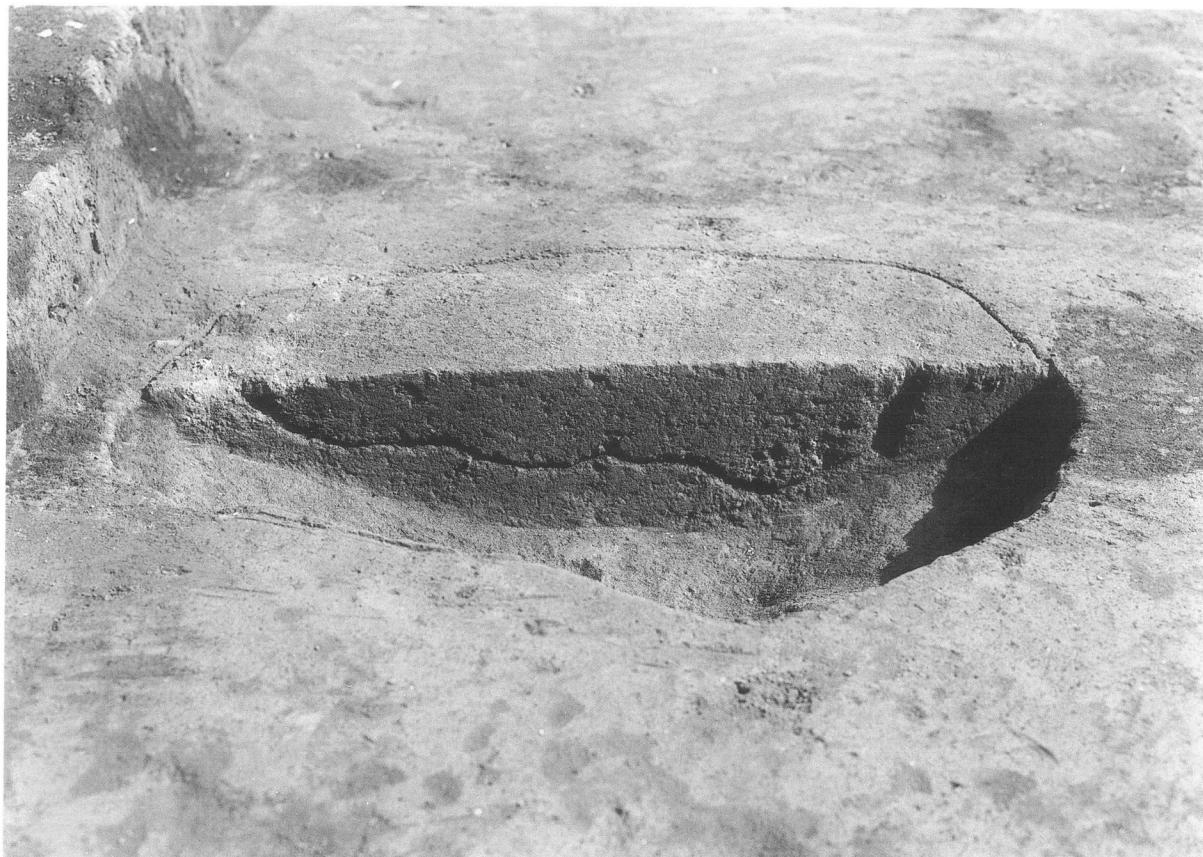
## 図版 2



(1) 5区全景（南より）



(2) 基本層序



(1) 4区焼土土層断面（北より）



(2) 4区1号土坑完掘状況（南より）

図版 4



(1) 4区休場層Qブロック（南より）



(2) 5区休場層Sブロック（西より）



(1) 5区休場層Tブロック（西より）

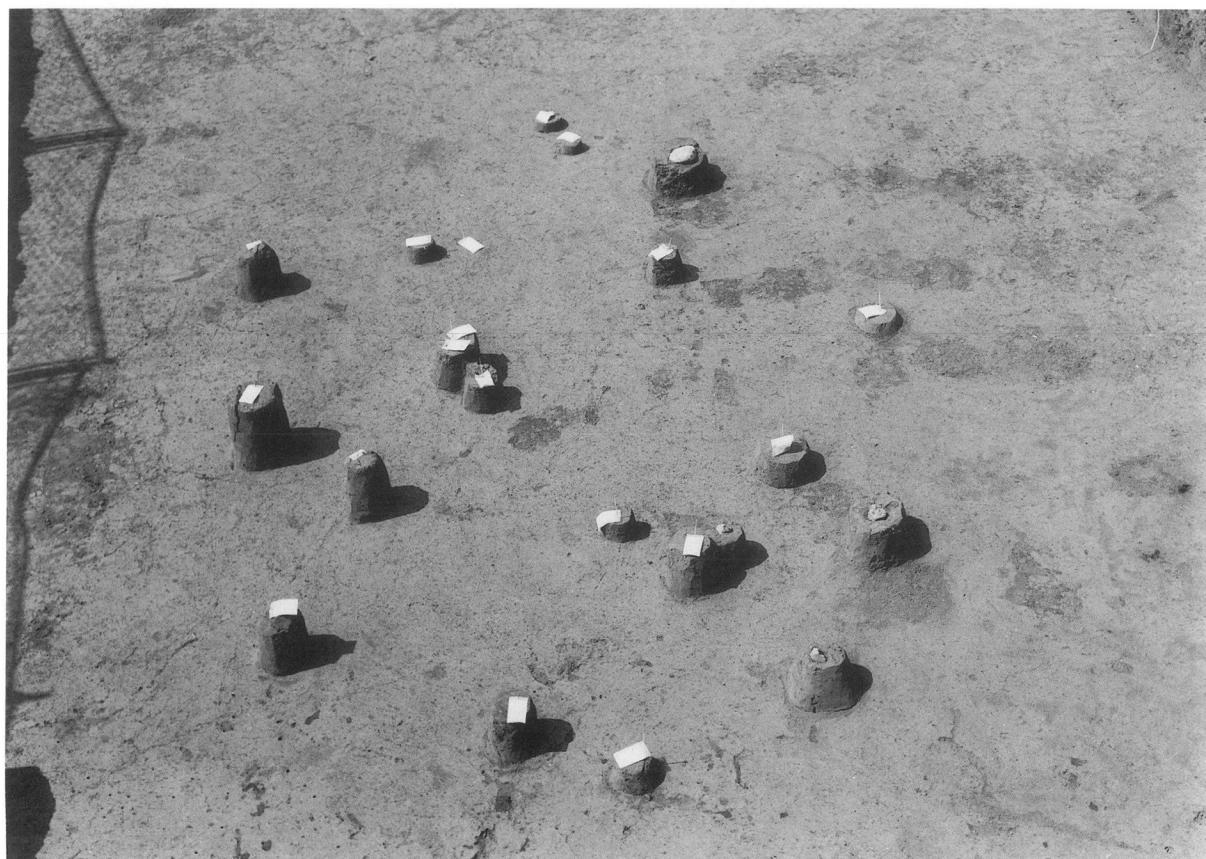


(2) 5区休場層Vブロック（西より）

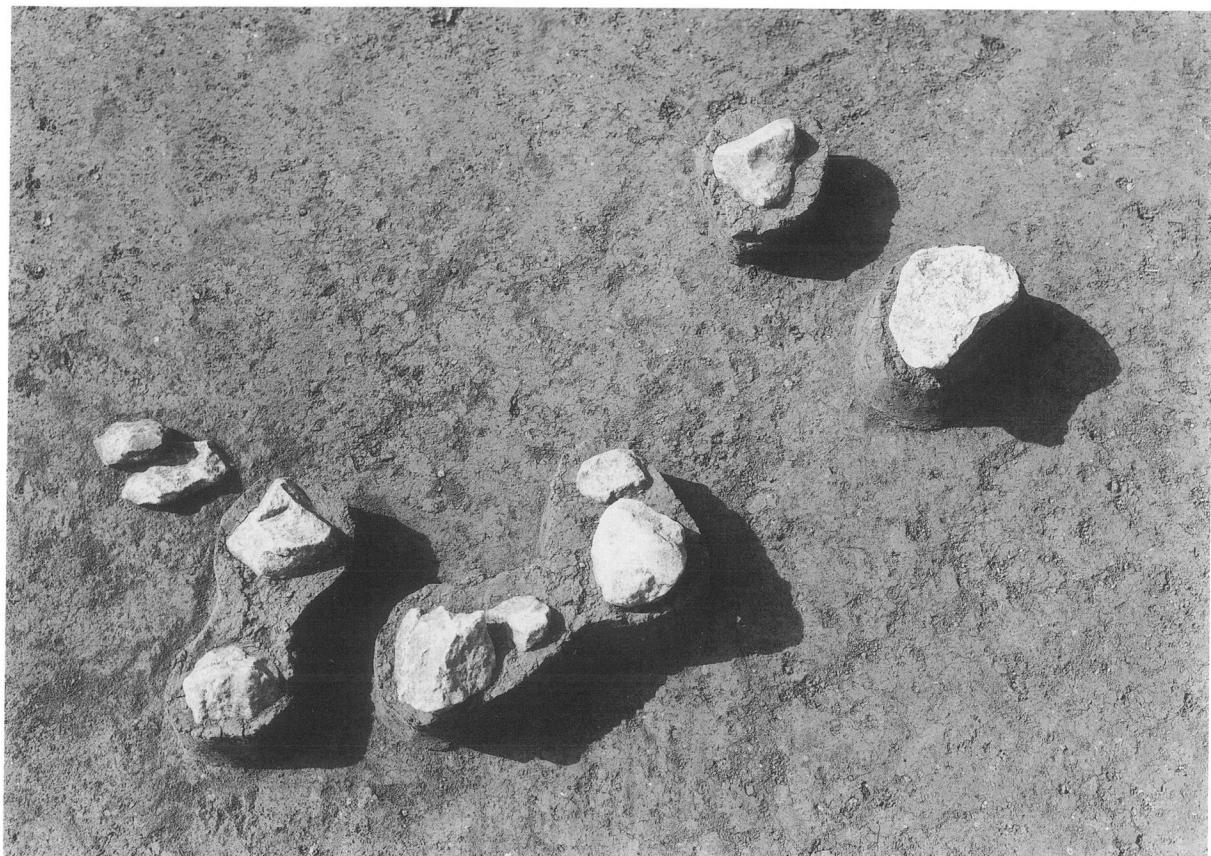
## 図版 6



(1) 5区休場層Wブロック（南西より）



(2) 5区休場層Xブロック（南より）

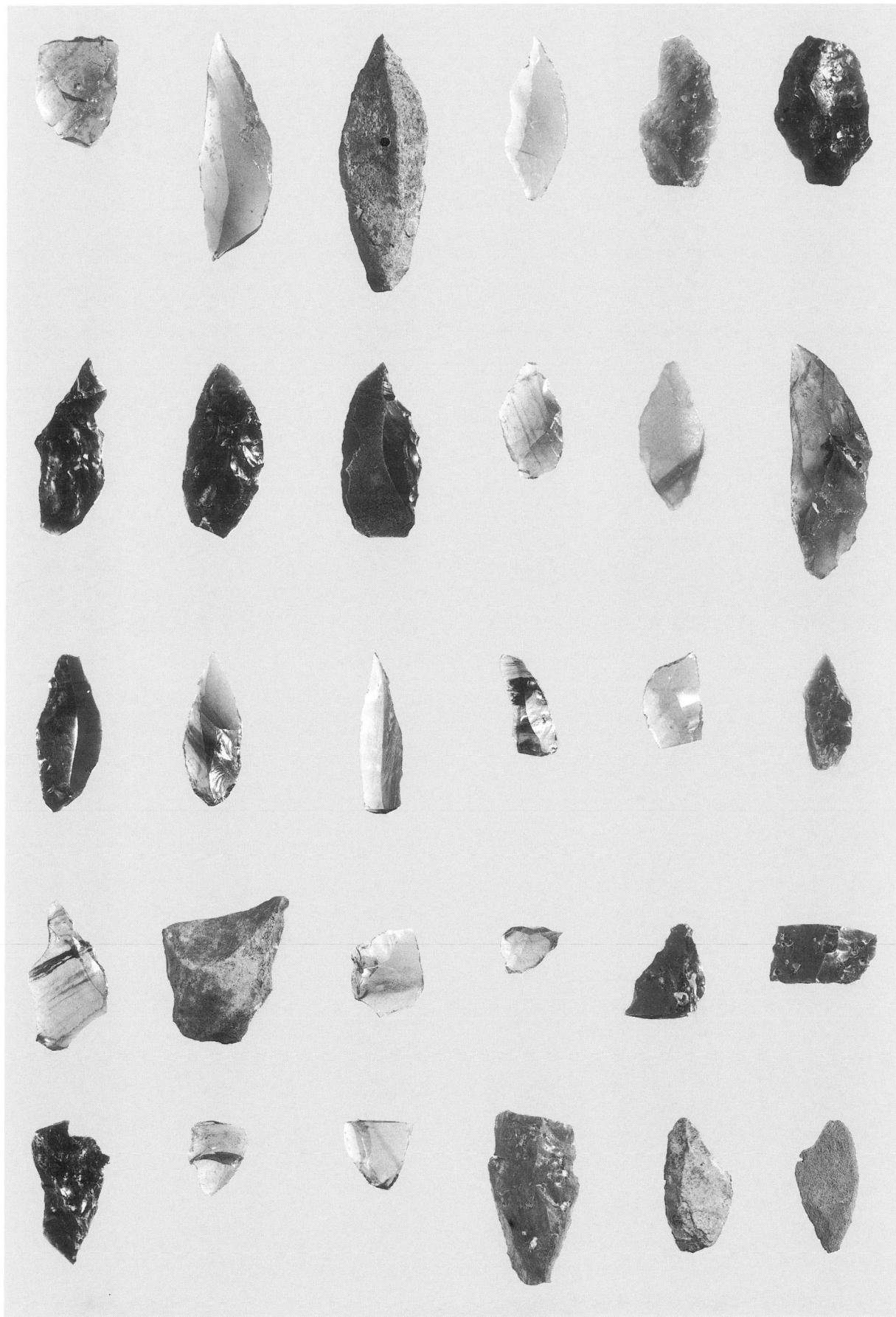


(1) 5区BB0層礫群1 (南より)



(2) 5区BBII層石器ブロック (東より)

## 図版 8

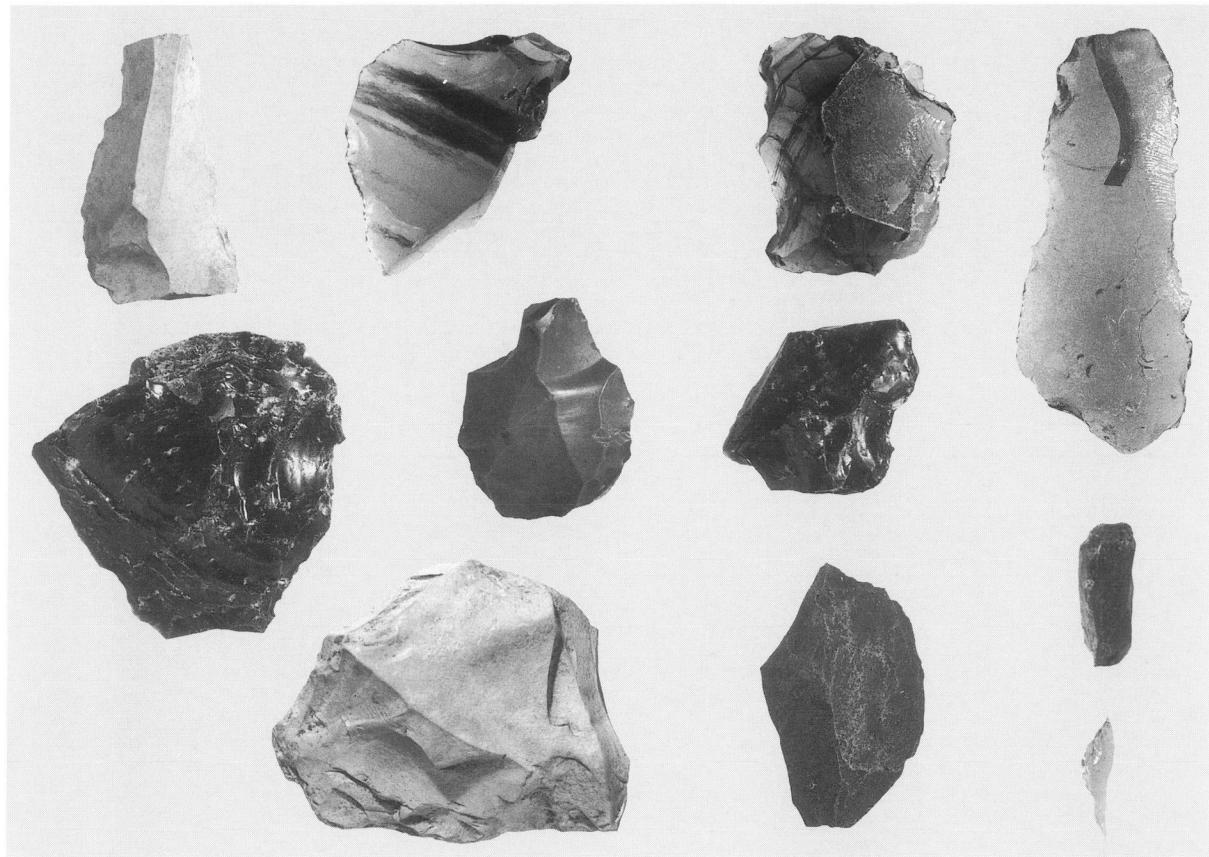


休場層尖頭器・ナイフ形石器（表）

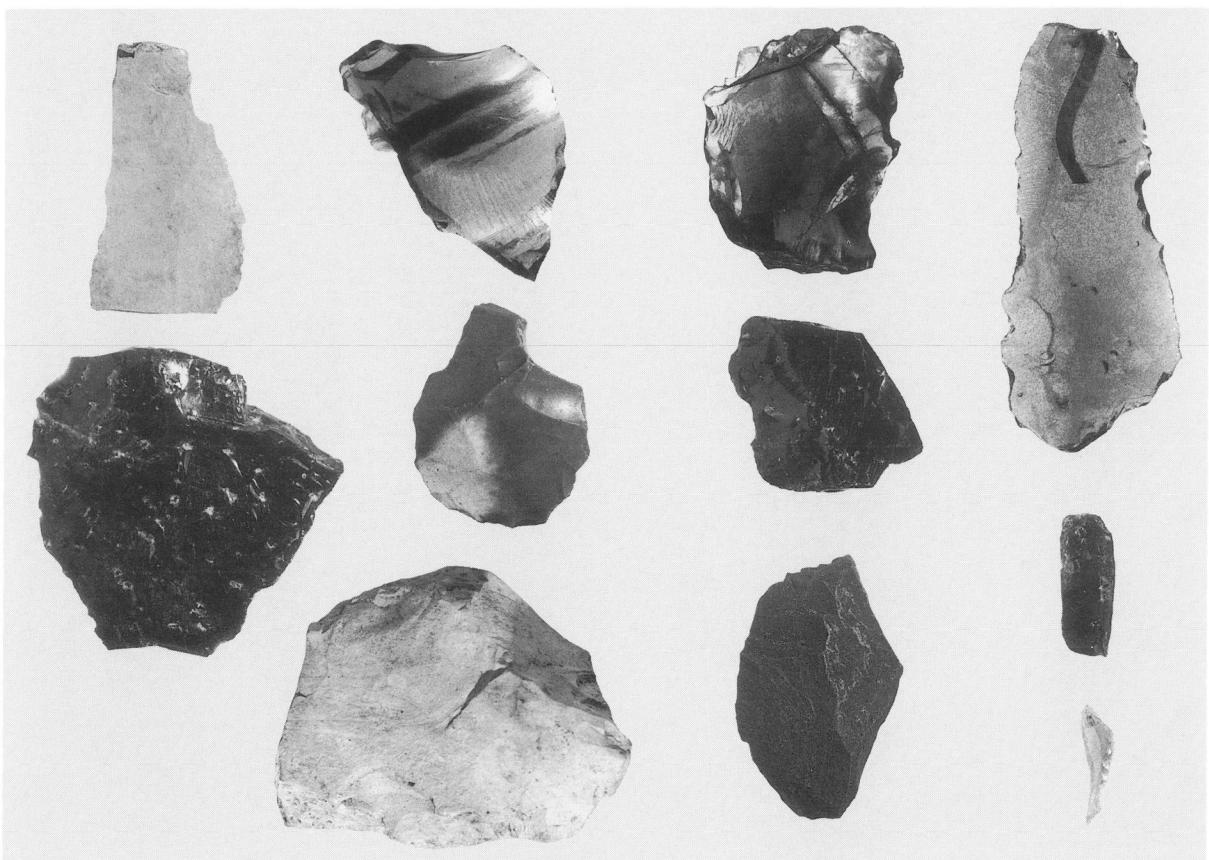


休場層尖頭器・ナイフ形石器（裏）

図版 10

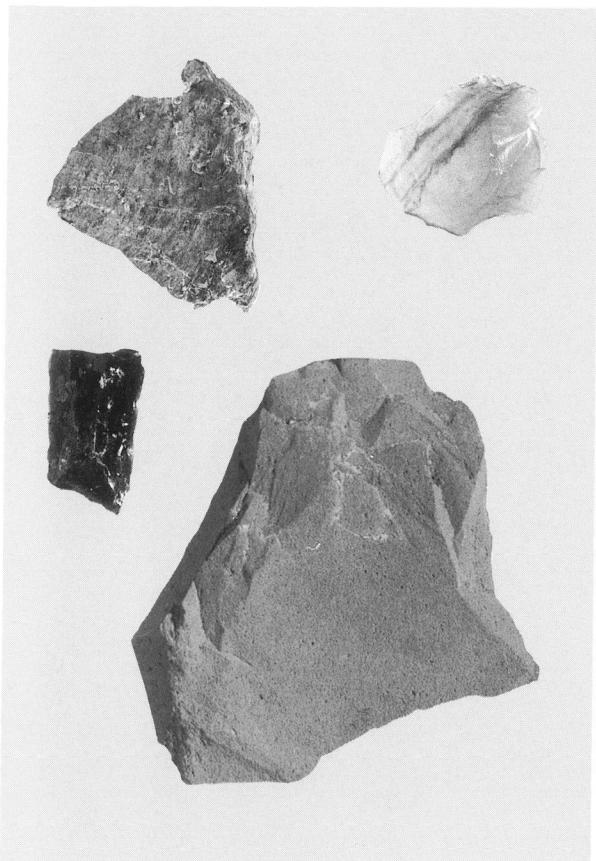


(1) 休場層彫器・削器・抉入削器・刃部再生剥片（表）

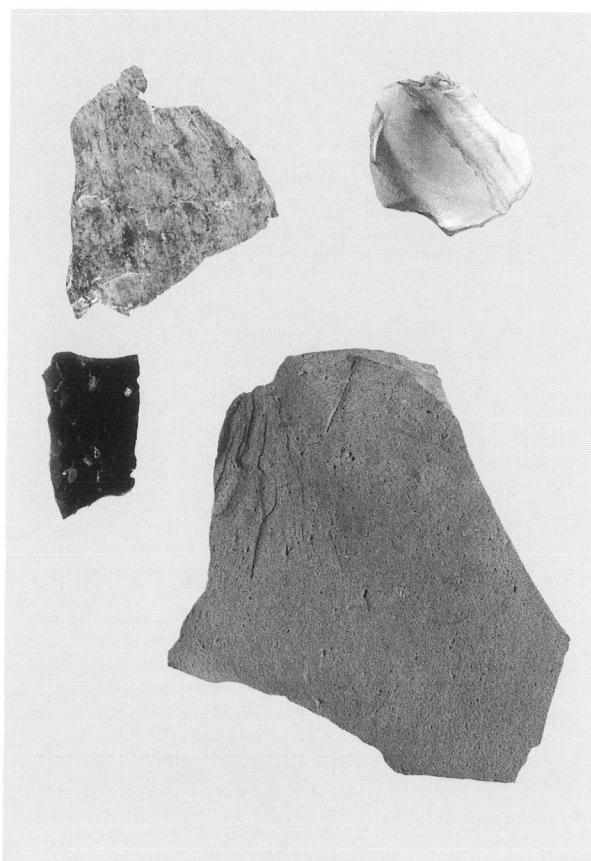


(2) 休場層彫器・削器・抉入削器・刃部再生剥片（裏）

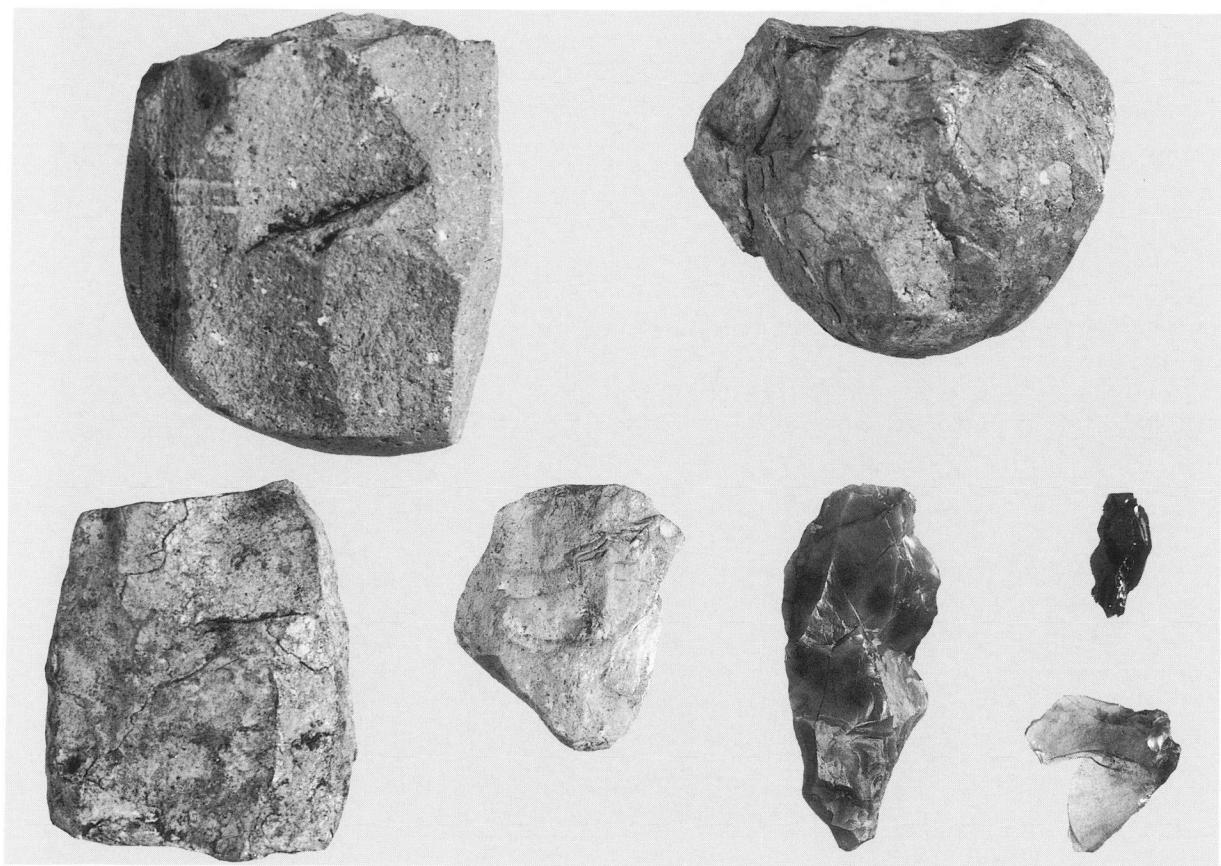
図版 11



(1) 休場層使用痕剥片・加工痕剥片（表）

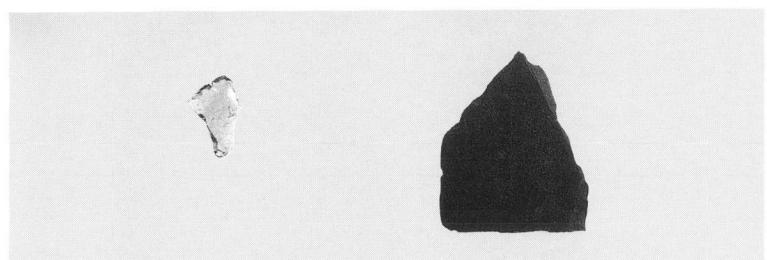
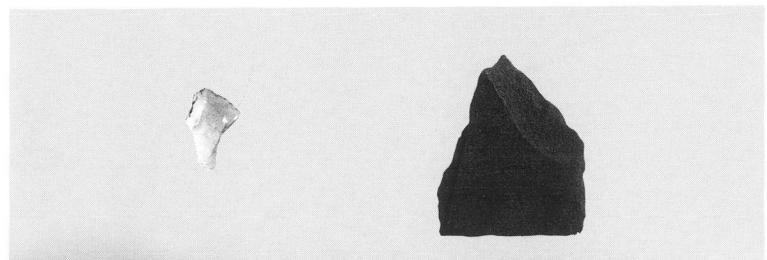


(2) 休場層使用痕剥片・加工痕剥片（裏）

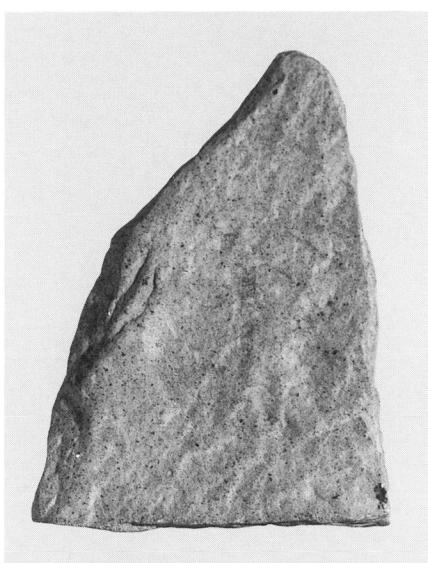
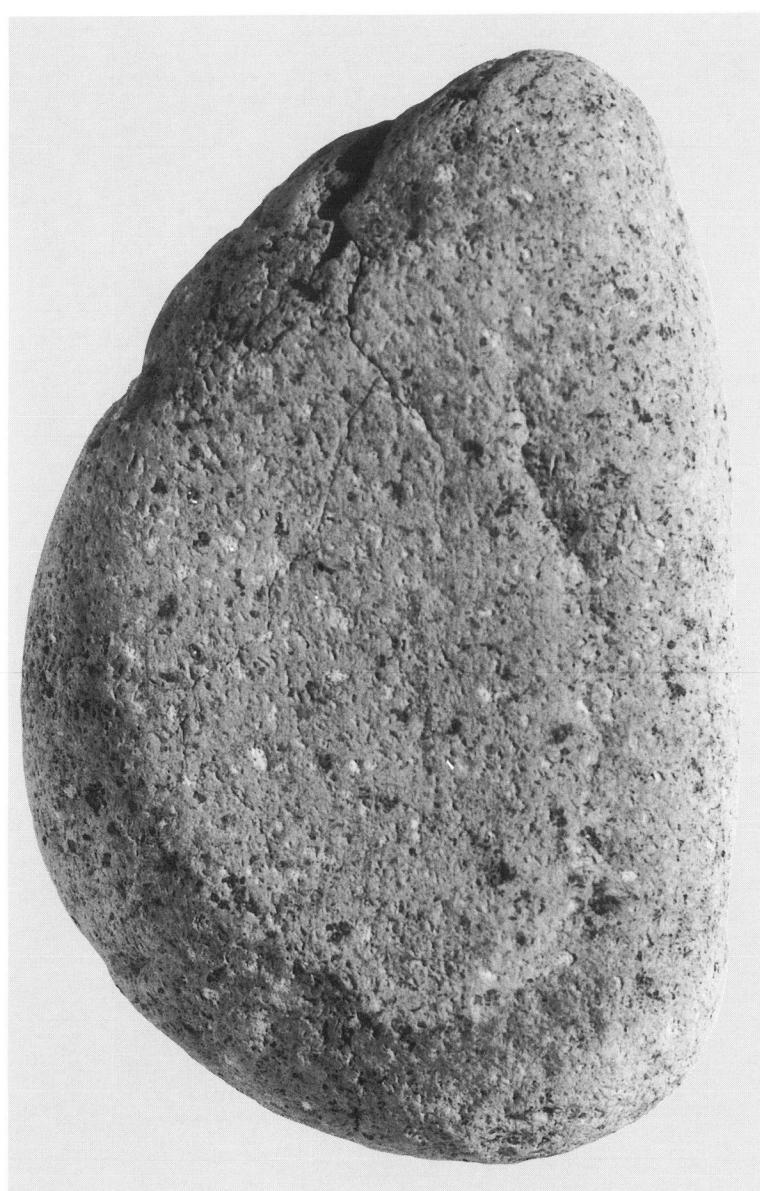
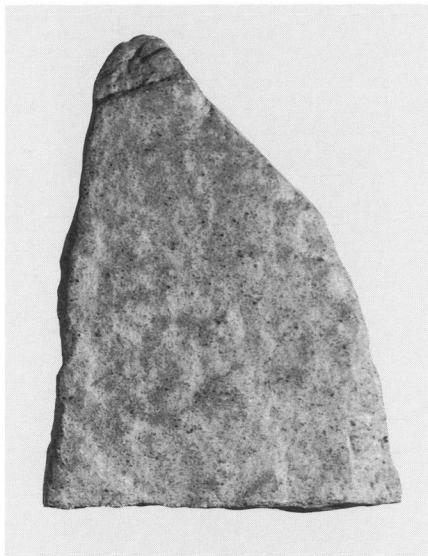


(3) 休場層石核・打面調整剥片

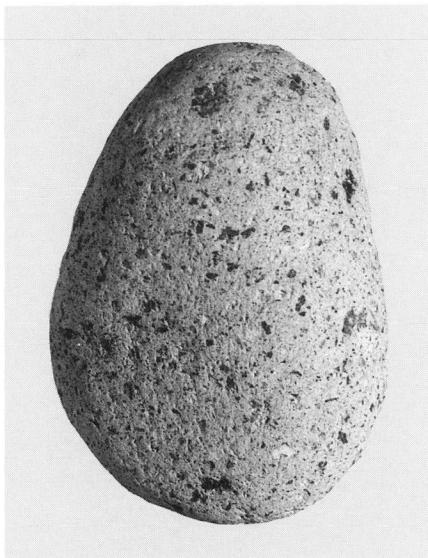
## 図版 12



(1) 休場層ポイントフレーク・器種不明石器（上一表・下一裏）

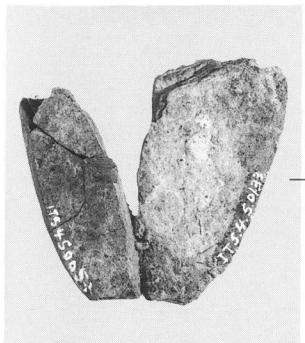


(2) 休場層礫器（上一表・下一裏）

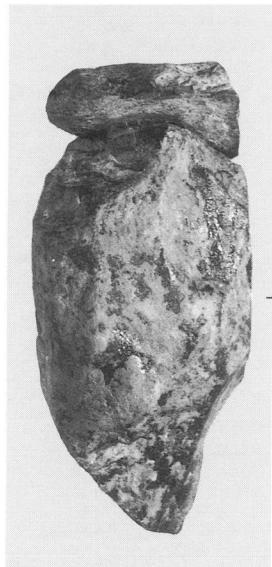
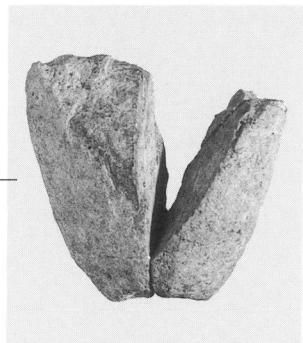


(3) 休場層加工礫

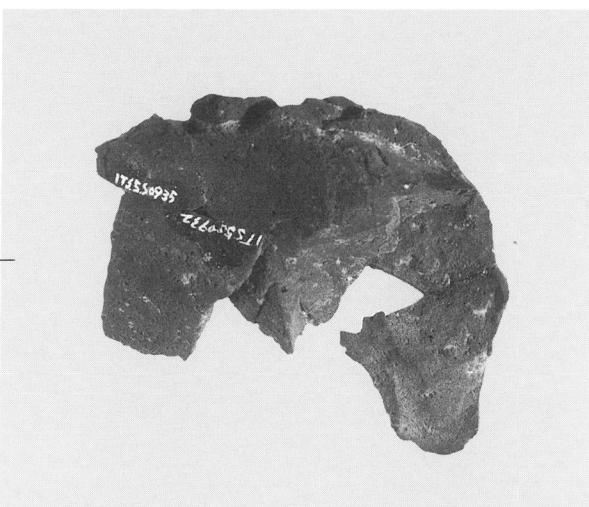
(4) 休場層敲石



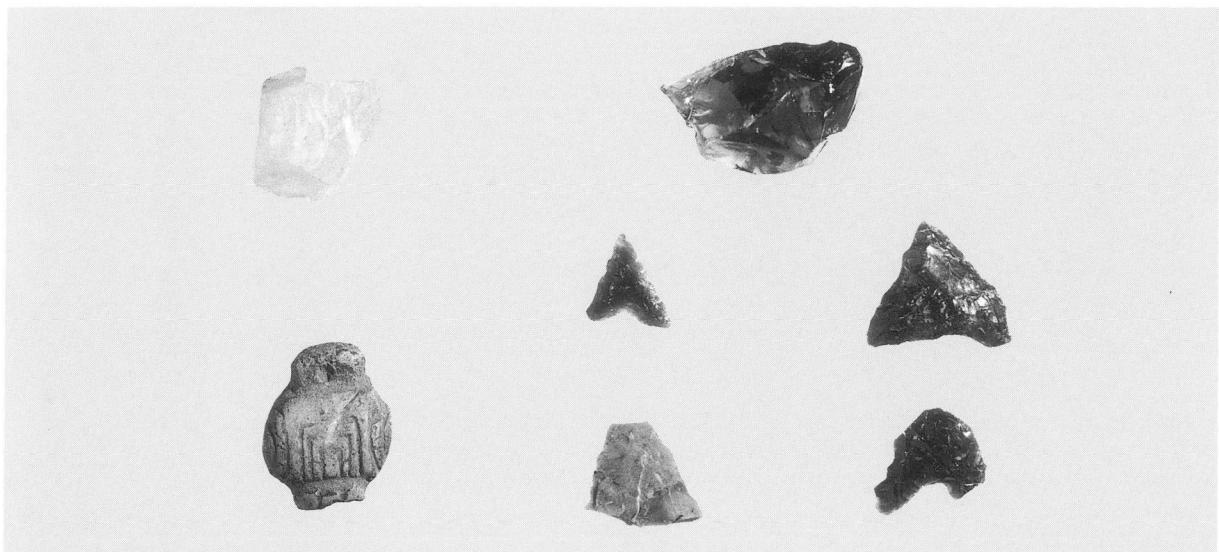
(1) 休場層接合資料



(2) 休場層接合資料



(3) BB II 層接合資料



(4) 近世・縄文時代の遺物

現地作業参加者（50音順・敬称略）

金井 徹	菊地 茂	栗原 計二	桑山 隆充	河野 新一	小林 將
下山 正	鈴木 勝征	鈴木 八郎	高木 龍雄	土屋 福宣	中津 雅俊
中西 康徳	西島 茂	平井 勝美	深沢雄太郎	藤田 正夫	町田彦三郎
三輪 建吾	望月 武夫	山口 尚	山口 博規	吉田 友彦	渡辺喜久夫
渡辺 武夫	渡辺 昇	渡辺 美行			
天野由紀子	石井 明良	伊藤 梨香	稻葉 澄枝	岩瀬喜代美	岩間 昭
鬼沢 幸恵	小池せつ子	小寺 知子	斎藤 恵子	杉本亜澄美	世利三津子
高橋 敏子	津々野詩織	菱谷 貴子	元 恵子	吉野 智里	吉満みさ江
渡辺なほみ					

整理作業参加者（50音順・敬称略）

遠藤佐知子	勝又 幸子	工藤 香織	坂口 充代	鈴木 輝美	津々野詩織
森嶋富士夫	山本 和美				

# 報告書抄録

ふりがな	しも はら い せき Ⅲ						
書名	下原遺跡Ⅲ						
副書名	平成9年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告						
シリーズ番号	第106集						
編集者名	岩崎しのぶ						
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所						
所在地	〒422 静岡県静岡市谷田23-20 TEL.054-262-4261						
発行年月日	西暦1998年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯/東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
市町村	遺跡番号						
しもはら 下原	みしましつかはらしんでん 三島市塚原新田 あざしもはら 字下原	22206	237	35° 07' 12" / 138° 56' 44"	1997年6月 1997年10月	2275m <sup>2</sup>	道路建設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
下原	集落跡	旧石器時代	石器集中地点 礫群 焼土 土坑	尖頭器 ナイフ形石器 彫器 削器 挿入削器 楔形石器 石核 打面調整剥片 加工痕剥片 使用痕剥片 礫器 敲石 加工礫			

静岡県埋蔵文化財調査研究報告 第106集

## 下原遺跡Ⅲ

平成9年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998年3月31日

発行所 財団法人  
静岡県埋蔵文化財調査研究所  
TEL (054) 262-4261(代)  
印刷所 ヨシダ印刷両国工場  
東京都墨田区亀沢3-20-14